

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第108集

堀の内遺跡2

2021

公益財団法人山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第108集

ほり の うち 遺 跡 2

2021

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、美祢市岩永本郷に所在する堀の内遺跡で、昨年度に続いて実施した発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、岩永本郷東地区における県施工の農地整備事業に先立ち、山口県美祢農林水産事務所及び美祢市教育委員会から発掘調査業務の委託を受けた、公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施しました。

今回の調査では、弥生時代の竪穴建物や中世の掘立柱建物・土坑などを検出し、弥生土器・石器や多数の中世の土器・陶磁器などが出土しました。

とりわけ、中世の土坑や柱穴などからまとまって出土した中国製の青磁・白磁や土師器は、周辺地域の当時の暮らしを知るうえで、貴重な資料になると考えられます。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸甚です。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化する中、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人山口県ひとつづくり財団
理事長 原 田 尚

例 言

- 1 本書は2020年度に実施した堀の内遺跡2（美祢市秋芳町岩永本郷地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県美祢農林水産事務所（契約名：農業競争力強化農地整備事業 岩永本郷南地区 埋蔵文化財発掘調査業務2号）と美祢市教育委員会（契約名：農業競争力強化農地整備事業 岩永本郷南地区の埋蔵文化財発掘調査業務）からの委託を受けて実施した。
- 3 調査組織は以下のとおりである。
調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター
調査担当 調査第一課 文化財専門員 井上 広之
調査第一課 文化財専門員 磯村 義信
調査員 竹内 麻美
- 4 本書の第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「山口」および2万5千分の1地形図「秋吉台」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調標記は農林水産省農林水産技術会議事務所（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は挿図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
S I：竪穴住居 S B：掘立柱建物 S K：土坑 S D：溝 S A：柱列 S P：柱穴
S X：性格不明遺構
- 9 本書の作成に当たり、石材の鑑定については山口県立山口博物館学芸課主任 赤崎英里氏のご教示をいただいた。
- 10 出土炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定については業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 11 第IV章に掲載の挿図・表・写真についてはおのおの、本文とは独立した番号とした。
- 12 本書の作成は井上・磯村が分担し、井上が編集した。なお、執筆分担は次のとおりである。
I：井上 II：磯村 III-1・2：磯村・井上 III-3：井上 IV：業者委託 V：井上・磯村

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と概要	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 調査の成果	
1 遺跡の概要	6
2 主な遺構	6
3 主な遺物	19
IV 自然科学分析	
1 堀の内遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定、樹種・種実同定	35
V 総括	
1 弥生時代の様相	47
2 古代の様相	47
3 中世の様相	48
1) SB01・SX01 と遺物包含層 1 出土の遺物	48
2) 歴史的背景「長門国美祢郡岩永地頭職 岡部氏」	52
4 近世の様相	55
5 まとめ	56

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第18図	SB、SP 出土遺物実測図	20
第2図	堀の内遺跡調査範囲図	6	第19図	SX01 出土遺物実測図①	22
第3図	遺構配置図	7	第20図	SX01 出土遺物実測図②	23
第4図	東壁土層断面図	8	第21図	SX01 出土遺物実測図③	24
第5図	北壁Ⅰ土層断面図	8	第22図	SK08、SX02 出土遺物実測図	26
第6図	中央壁土層断面図	9	第23図	鍛冶関連遺物実測図	27
第7図	北壁Ⅱ土層断面図	9	第24図	遺物包含層1 出土遺物実測図①	27
第8図	西壁土層断面図	9	第25図	遺物包含層1 出土遺物実測図②	28
第9図	SI01 実測図	11	第26図	遺構外遺物実測図	28
第10図	SB01 実測図	12	第27図	暦年較正結果	40
第11図	SP041849 土器出土状況実測図	13	第28図	炭化材(1)	43
第12図	SX01 土器等出土状況実測図	14	第29図	炭化材(2)	44
第13図	SK01・02 実測図	16	第30図	炭化材(3)	45
第14図	SX02 実測図	17	第31図	炭化種実	46
第15図	SD01・02 実測図	18	第32図	堀の内遺跡出土の青磁・白磁	50
第16図	石器実測図	19	第33図	長門国の主な荘園・地頭の配置	52
第17図	出土遺物実測図(弥生時代～古代)	19	第34図	発掘調査区周辺	55

写真目次

写真1	重機による表土除去	2
写真2	遺構掘り込み作業風景	2
写真3	空中写真撮影風景	2
写真4	打製石斧出土状況	47
写真5	雁又式鉄鏝出土状況	51

表目次

第1表	出土土器・陶磁器観察一覧表	29
第2表	出土石器類観察一覧表	34
第3表	鉄鏝および鍛冶関連遺物観察一覧表	34
第4表	樹種同定結果	37
第5表	種実同定結果	38
第6表	放射性炭素年代測定結果	39
第7表	堀の内遺跡出土の青磁・白磁の分類	49
第8表	土地制度の移り変わりと岡部氏関連年表	54

図版目次

図版1	調査区遠景（西から）
図版2	調査区遠景（北西から） 調査区と岩永盆地（正面奥：東から）
図版3	調査区と岩永盆地（正面奥：南から） 調査区近景①（北上空から）
図版4	調査区近景②（北上空から） 調査区全景（北上空から）
図版5	調査区北部分（鉛直上空から） SX01周辺部（鉛直上空から）
図版6	SI01完掘状況（北から） SI01完掘状況（東から） SI01中央土坑土層断面（東から）
図版7	SB01完掘状況（北から） SB01完掘状況（東から）
図版8	SB01構成柱穴P04半裁・土器出土状況（北から） SB01構成柱穴SP18土器出土状況（東から） SP49土器出土状況（北から） SP49完掘状況（北から）

- 図版9 SD01・02 完掘状況（西から）
SD01・02 土層断面①（南から）
SD01・02 土層断面②（南から）
- 図版10 SK01 土層断面（南から）
SK01 完掘状況（南から）
SK02 土層断面（南から）
SK02 完掘状況（南から）
- 図版11 SK08 遺物出土状況（北から）
SK08 完掘状況（北から）
- 図版12 SX01 土層断面東部分（北から）
SX01 土層断面西部分（南から）
- 図版13 SX01 遺物出土状況（北から）
SX01 完掘状況（北から）
- 図版14 SX01 遺物出土状況（東から）
SX01 遺物出土状況（部分：東から）
- 図版15 出土遺物（1）
- 図版16 出土遺物（2）
- 図版17 出土遺物（3）
- 図版18 出土遺物（4）
- 図版19 出土遺物（5）
- 図版20 出土遺物（6）
- 図版21 出土遺物（7）
- 図版22 出土遺物（8）

I 調査に至る経緯と調査の概要

1 調査に至る経緯

堀の内遺跡の所在する美祢市秋芳町岩永本郷は、山口県中央部の中国山地西端部に位置する。調査対象地は向山（標高約 142.1 m）の北側山麓（標高約 83 ～ 84 m）に立地しており、調査前は水田として活用されていた。

山口県美祢農林水産事務所により農業競争力強化農地整備事業（岩永本郷東地区）に伴うほ場整備工事が計画されたことを受け、山口県教育委員会が平成 27・29 年度に試掘調査を実施した結果、丘陵地の地山面から大量の土師器を伴う土坑や柱穴など、中世から近世にかけての遺跡の広がりが確認されたため、工事に先立ち当該地区を対象とする発掘調査が実施されることとなった。

近隣遺跡では、同じく農業競争力強化農地整備事業に伴うほ場整備工事に伴い、本調査地の西北西約 150 m の場所（堀の内遺跡の範囲内）において当センターが令和元年度に発掘調査し、弥生時代中期から中・近世にかけての遺構・遺物を発見している。

今回の発掘調査は、記録保存が必要となる 820㎡について、山口県美祢農林水産事務所と美祢市教育委員会から委託を受けて公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

2 調査の経過と概要

令和 2 年 3 月 31 日付けの委託契約締結をうけて諸準備を開始した。4 月 9 日には美祢農林水産事務所との初回業務打合せ協議を行い、その後美祢市教育委員会と現地で打合せを行った。これ以後、表土除去および仮設事務所設置に向けた手続きを開始した。

重機による表土除去は 5 月 18 日から 6 月 2 日にかけて実施した。表土除去日程は当初の見込みより短縮することができた。

5 月 12 日には自治会・学校等の関係者・関係機関に協力依頼等を行った。現地作業員の調達については地域理事の協力の下に人員を確保し、5 月 26 日に作業員説明会を実施した。

作業開始に備え、発掘調査の拠点となる仮設事務所および器材庫等を 5 月 29 日に設置した。なお、仮設事務所に関わる備品搬入と内部電気配線は 6 月 1 日に実施、水道配管等の設置は 6 月 2 日に完了した。電気外部配線工事は 6 月 5 日に取りかかり、6 月 10 日に完了した。

6 月 2 日には山口県埋蔵文化財センターから現地へ器材搬入を行い、翌日 6 月 3 日から人力により壁清掃、遺構検出作業等を順次行った。調査区南東部から南中央部にかけての高位部は、近世以降の開墾による削平が見られたが、遺構の一部（深部）が残存していた。弥生時代の竪穴住居の一部、中世の掘立柱建物や土坑、および近世の水溜遺構等を検出した。その他の範囲でも土坑や溝、柱穴等が多数見つかり、調査区全体に万遍なく遺構が存在していることが判明した。

6 月 16 日に国土座標杭を設置したのち、遺構の配置状況を確認するために調査区全体の略測図を作成し、位置関係を確認しながら遺構を掘り進めていった。

6 月中旬から 7 月下旬まで梅雨による長雨で遺構面が軟弱化し、発掘作業ができない日が続き、作

業工程に大幅な遅れが生じた。また、7月末からは30度を超す猛暑日となった。その為、作業員の作業時間を短縮して休憩をこまめにとり、暑さ指数33度（WBGT値）を超えた時点で作業を中止するなどの熱中症対策を講じた。

各々の遺構完掘後に個別遺構図・写真記録の作成を順次進めた。

調査区全体の遺構掘削がほぼ終わりに近づいた8月上旬に遺構面清掃、調査区周辺の環境美化を行い、8月7日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

その後、更に未調査遺構の掘削や測量を行った。

猛暑日は8月下旬まで続いた為に作業効率は低下したが、8月は降雨による作業の中断がなかった為、比較的順調にその後の調査を進めることができた。

8月21日に器材撤収、仮設事務所水道設備および仮設事務所電気配線の撤去、8月25日・26日に仮設事務所・器材庫等の撤去を行った。遺跡全体の遺構確認作業を施したうえで、9月11日に現地における調査を終了した。

9月中旬から10月下旬にかけては記録類を整理するとともに、それまでに当センターに持ち帰り整理してきた出土遺物を実測・写真撮影して資料化し、報告書刊行準備を進めた。また、出土鉄鏃の保存処理と出土炭化材の自然科学分析を業者に委託した。あわせて、挿図・写真図版の作成や原稿執筆作業を継続し、3月下旬本報告書を刊行するに至った。



写真1 重機による表土除去



写真2 遺構掘り込み作業風景



写真3 空中写真撮影風景

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

堀の内遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。本年度の調査区は昨年度の堀の内遺跡発掘調査地点から、国道 435 号を挟んで北側に約 500 m 離れた山裾にある。堀の内の地名は、当地に地頭として武蔵国から下向してきた岡部氏が、向山の北側丘陵裾部から谷部にかけて居館を築いたことに由来する。また、向山の山頂には向山城跡（別称、岡部城跡）も築かれたということである。

美祢市は山口県の中央やや西寄りの内陸部にあり、北部に中国山地の西端、長門山地が広がり、中央部にカルスト台地の秋吉台、秋芳町南部には小起伏丘陵地の秋吉丘陵がある。

岩永本郷は市域の中央寄りにあり、秋吉台の南縁、厚東川の右岸側に位置し、全域はおよそ南北 7 km、東西 3.5km の範囲にわたる。本遺跡は岩永本郷の中でも東南域にあるポリエと呼ばれる南北約 1km、東西約 0.9km の小盆地（本郷盆地、岩永ポリエ）内にある。盆地床は標高約 73～74 m であり、北西域は標高約 200 m 前後、南東域は標高約 150 m 前後の丘陵で囲まれる。また、北西域にある石灰岩層からなる岩永台には多数の石灰洞があり、その丘陵縁辺には湧水地も所在する。一方、南東域には主に砂岩、チャートからなる大田層群となる。盆地内低地の土壌は砂礫土壌であり、河川は、南西から北東方向に向かって盆地中央部を貫流する厚東川支流の本郷川があり、その支流である岩永台の南裾部に水源（カルスト湧水）を有する泉川が北縁を東方に流れ、盆地内北側で本郷川に合流している。なお、気候は内陸性気候である。

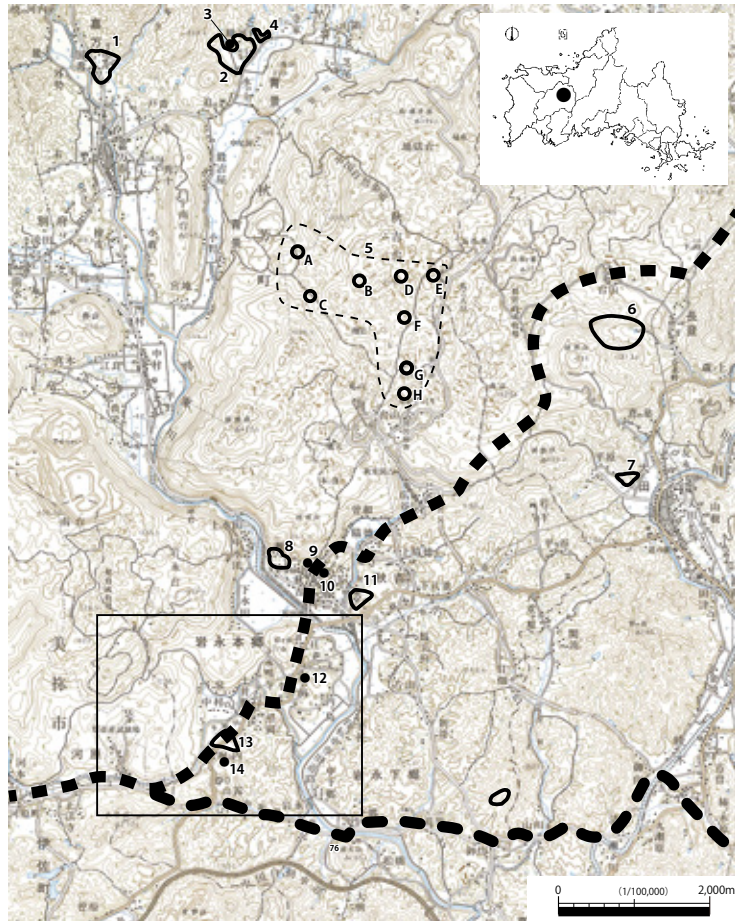
2 歴史的環境

岩永本郷周辺を見渡してみると、秋吉台上の秋吉台遺跡群で採集された石器から、旧石器時代から人の活動があったと察せられる。続く縄文時代での遺跡数は増えるが未だ集落跡は見つかっていない。弥生時代になると、瀬戸遺跡や松ヶ迫遺跡など、厚東川流域沿いやポリエ縁辺の丘陵、段丘上に人々は集落を営み始め、終末期には且箱式石棺墓における台状墓の存在から個人首長の萌芽が窺える。古墳時代に至ると、後期には国秀遺跡のような大きな集落が出現し、大里古墳や秋吉八幡宮古墳にみるように在地豪族が台頭してくる。古代は美祢郡に属し、この地域特有の地質に絡んで、長登銅山跡や平原第Ⅱ遺跡など各所で金属生産が盛んに行われる。別府の地に青景城を築いた地頭青景氏の進出をみた中世では、やがて大内氏の支配下に属し、近世には毛利氏の萩藩領、美祢宰判に属する。

以下、視点を本郷盆地（岩永ポリエ）内に向ける。旧石器時代の遺跡は盆地内には見当たらず、道場・中村遺跡から出土した楕円押型土器から推察できる縄文時代早期が最も古い時期であり、同時に縄文時代に多用された形態の石鏃が多数採集されている。

弥生時代になると遺跡数が急増し、西側丘陵裾部域にある的場遺跡、東側丘陵裾部の本郷小学校遺跡、川東遺跡で弥生土器が採集されている。昨年度の堀の内遺跡の調査で竪穴建物等の遺構を検出したが、1962（昭和 37）年には、国道 435 号の堀の内バス停留所東側で堀の内石棺群が確認されている。盆地外周辺であるが、北東側丘陵には遺物散布地として内ヶ島遺跡や且遺跡、埋葬遺跡として内ヶ島箱式石棺群や且箱式石棺群があり、三戸遺跡でも、後期後半の壺棺が出土している。

古墳時代の遺跡として未だ古墳は周知されていないが、前出の的場遺跡で採集された耳環や鉄鏃と

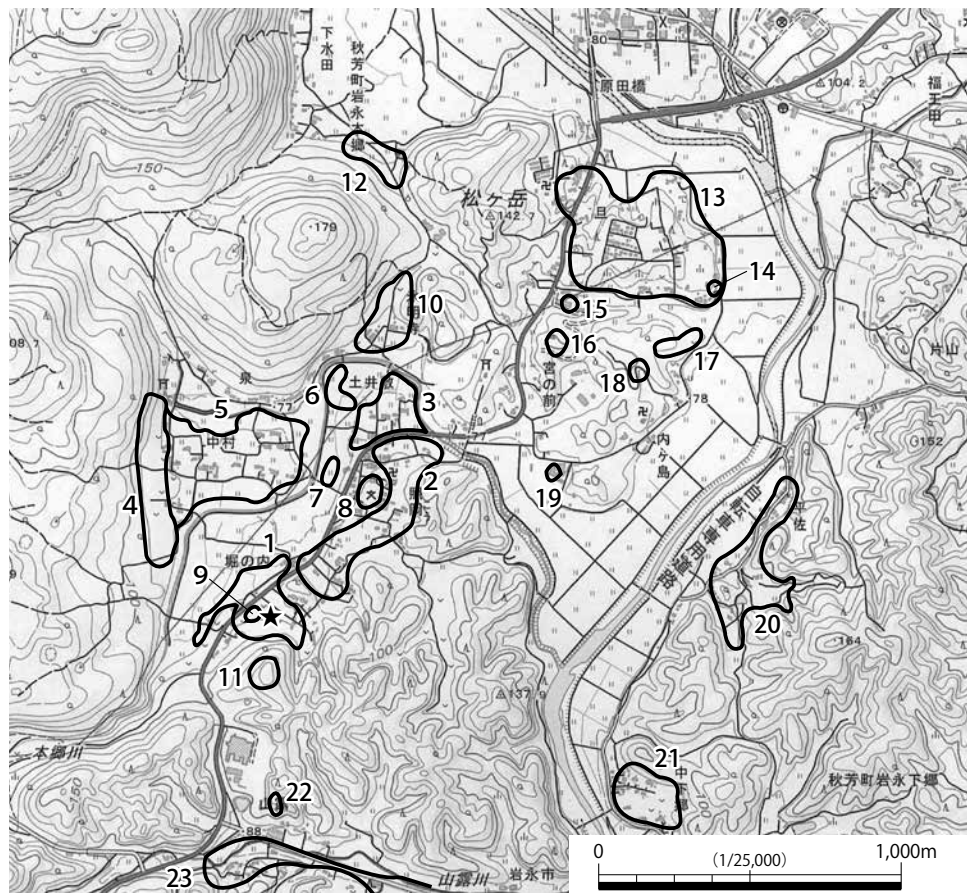


- 1 国秀遺跡
- 2 青景氏館跡周辺遺跡
- 3 青景城跡
- 4 殿河内遺跡
- 5 秋吉台遺跡群
 - A 出来水遺跡
 - B 笠木遺跡
 - C 船が窪遺跡
 - D 住居久保遺跡
 - E 下麻島遺跡
 - F 小郡久保遺跡
 - G 妙見原遺跡
 - H 長ジャグリ遺跡
- 6 長登銅山跡
- 7 平原第Ⅱ遺跡
- 8 瀬戸遺跡
- 9 秋吉八幡宮古墳
- 10 大里古墳
- 11 松ヶ迫遺跡
- 12 且箱式石棺群
- 13 堀の内遺跡
- 14 向山城

■ ■ 赤間関街道（中道筋）
 ● ● 肥中街道

1 堀の内遺跡
 (★は本年度調査地)

- 2 川東遺跡
- 3 土井敷遺跡
- 4 的場遺跡
- 5 道場・中村遺跡
- 6 仮畑遺跡
- 7 国本遺跡
- 8 本郷小学校遺跡
- 9 堀の内石棺群
- 10 永明寺遺跡
- 11 向山城跡
- 12 下水田遺跡
- 13 且遺跡
- 14 且1号横穴墓
- 15 且2号横穴墓
- 16 且箱式石棺群
- 17 内が鳥遺跡
- 18 内が鳥箱式石棺群
- 19 三戸遺跡(三戸石棺)
- 20 平佐遺跡
- 21 中下郷遺跡
- 22 山露横穴墓
- 23 山露遺跡



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

みられる鉄器から古墳の存在が予想される。盆地外近傍、北東側の内ヶ島丘陵南端部において、三戸石棺と称する、古墳時代前半の箱式石棺が発見されている。同じく、旦丘陵には、旦1号横穴墓、旦2号横穴墓があったとされる。また、南側の丘陵部中腹には、山露横穴墓がある。埋葬遺跡以外では、昨年度の堀の内遺跡の調査で、竪穴建物が検出されており、須恵器の散布地としては、本郷小学校遺跡、的場遺跡、川東遺跡、道場・中村遺跡、永明寺遺跡が周知されている。

古代律令制下において、この地域一帯は、長門国美祢郡五郷の一つで、厚狭郡久喜郷に属したとも言われる。古代の遺物としては、昨年度の堀の内遺跡、川東遺跡の調査で須恵器が出土したが、盆地外周辺では、本郷川左岸に位置する三戸遺跡で古代の須恵器、緑釉陶器が出土している。

中世になると、この地は武蔵七党の一つ猪俣党に属する岡部氏の所領地となる。1220（承久2）年、岡部景澄が長門国岩永地頭に補任されて以来、北条氏、厚東氏、大内氏に仕えている。1551（天文20）年、陶晴賢の反乱で山口に追われた大内義隆に従った岡部隆景は、深川大寧寺で自殺した義隆に殉ずることで岡部氏は領地を没収される。中世の埋蔵文化財包含地としては、昨年度調査の堀の内遺跡及び川東遺跡の他に、盆地内北部の谷部に立地する永明寺遺跡がある。

近世における堀の内には、正徳年中に開創した浄土真宗本願寺派大乘寺や荒神社があり、1862（文久2）年頃に作成されたとする『美禰郡細見繪圖』を見ると、堀の内は、桂隼人の知行となっており（畔頭、石高129石9計4升1合）、同地には大乘寺や荒神社も載っている。また、大乘寺や荒神社の西側を南北に通る街道が示されているが、これは赤間ヶ関街道中道筋であり、萩と下関とを最短ルートで結び吉田往還とも言われた。中道筋を堀の内から下関に向けて進めば河原宿（美祢市河原）で肥中街道（県道240号）と出会う。近世以前にも山陽と山陰を繋ぐこの街道は頻繁に使われていたことは想像に難しくなく、岡部氏の時代にも、街道の東西・南北への行き来に目を配るために向山城は十分に機能していたものと推察できる。

現在の本郷盆地も、盆地の南縁を通る国道435号が周辺地域を結んでおり、産業についても古来同様に農業を主とした地域であり、丘陵縁辺では秋芳町特産の梨の栽培も行われている。

引用・参考文献

- 山口県文書館 1962『防長風土注進案』第17巻 美禰宰判
- 山口県 1976『都道府県土地分類基本調査 山口』
- 山口県地方史学会 1980『防長地下上申』第四巻
- 平凡社 1980『日本歴史地名大系第36巻 山口県の地名』
- 秋芳町教育委員会 1981『三戸遺跡－美祢郡秋芳町大字岩永本郷－』
- 山口県教育会 1982『山口県百科事典』大和書房
- 角川書店 1988『角川日本地名辞典 35 山口県』
- 秋芳町教育委員会 1991『秋芳町史』
- 秋芳町教育委員会 1995『秋芳町の遺跡 秋芳町遺跡詳細分布調査結果の報告』
- 秋芳町地方文化研究会 2014『美禰郡細見繪圖』（復刻版）
- 山口県教育委員会 2017『山口県中世城館遺跡総合調査報告書－長門国編－』その他

Ⅲ 調査の成果

1 遺跡の概要

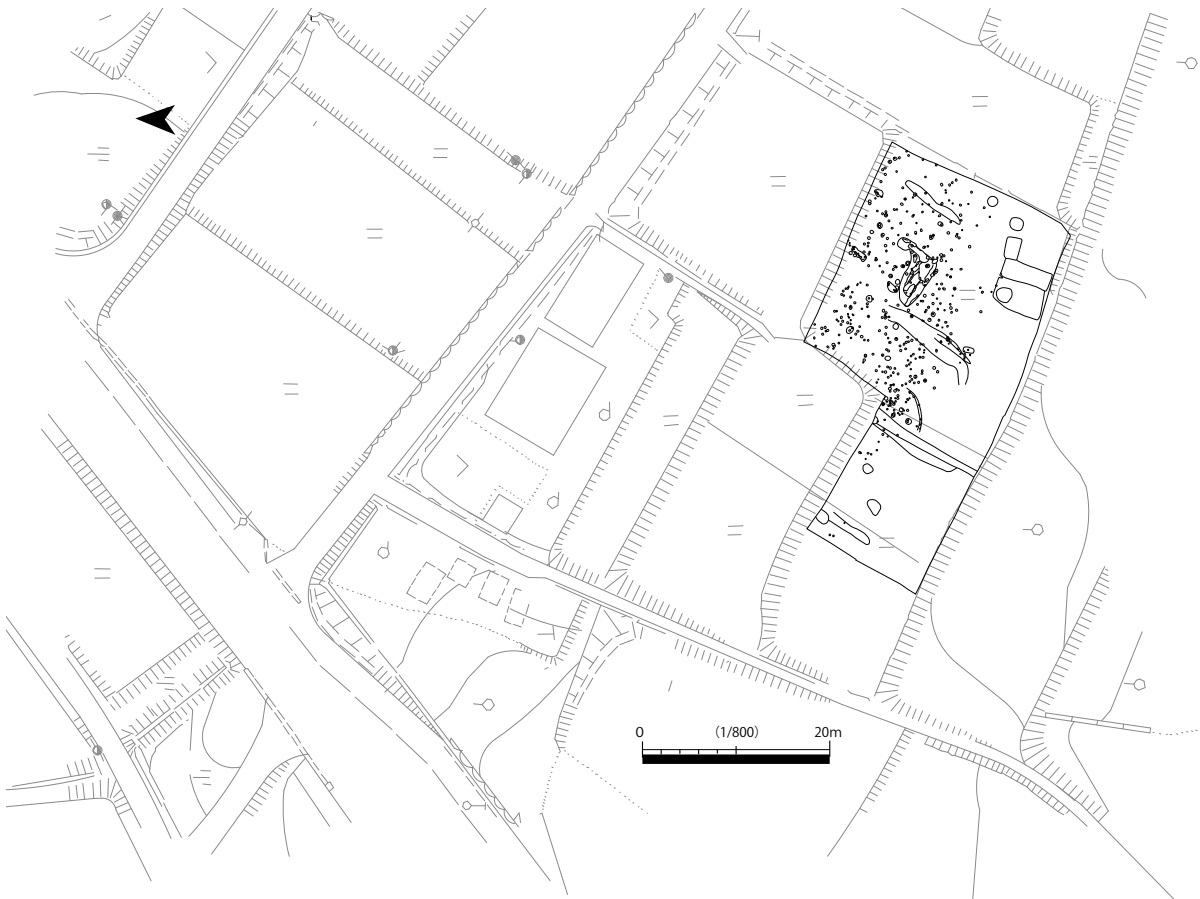
堀の内遺跡は向山（標高約 142.1 m）の北裾部から延びる舌状丘陵上にあり、調査地は西方に岩永盆地を望む丘陵上位部（標高約 83～84 m）に立地する。弥生時代、中世および近世の遺構を確認し、弥生時代から近世にかけての遺物を発見・採集した。

基本層序

調査区の各壁面による土層観察を行った結果、基本層序は上から耕作土（現代）、盤土（現代）、客土（現代）、整地土（近世）、堆積土（中～近世）、遺物包含層（中世）、地山（粘質土）となることが判明した。調査区北東部は後世の水田開発（基盤整備）による客土が厚い。また、斜面地形により、下位の堆積土や遺物包含層も二層を成すことが分かった。

2 主な遺構

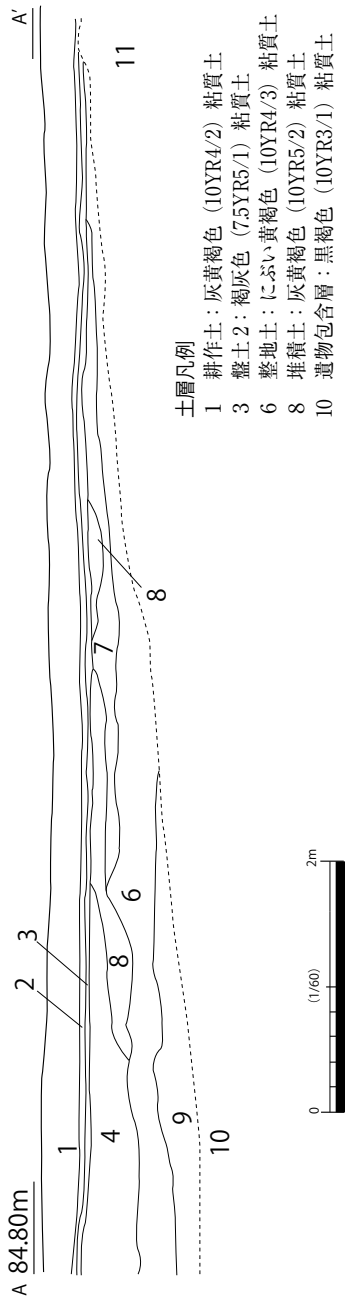
本調査において、弥生時代の遺構として竪穴建物1棟を検出した。また、中世の遺構と判断できるものは、掘立柱建物1棟、柱列1条、土坑5基、溝6条、性格不明遺構1基である。ほかに近世の遺構として土坑4基、性格不明遺構1基を確認している。また、調査区の西方に、時代・用途ともに不明な遺構を3基検出している。



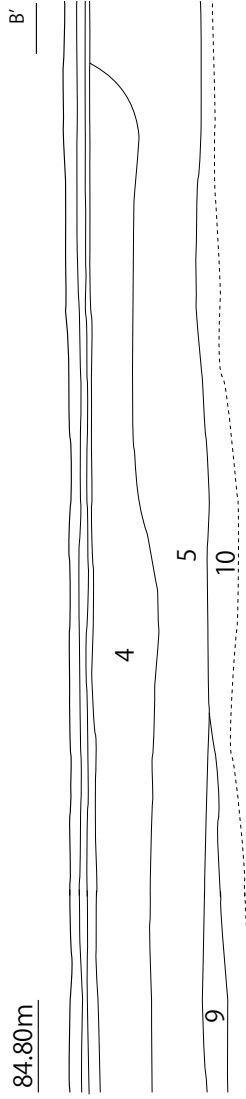
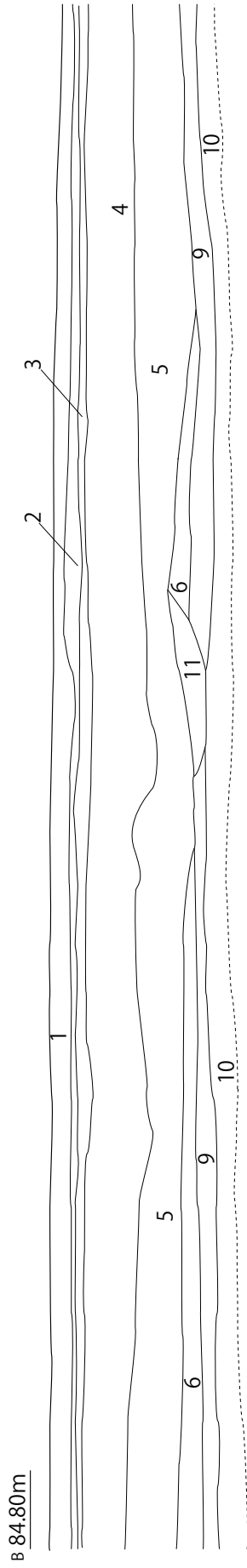
第2図 堀の内遺跡調査範囲図



第3図 遺構配置図

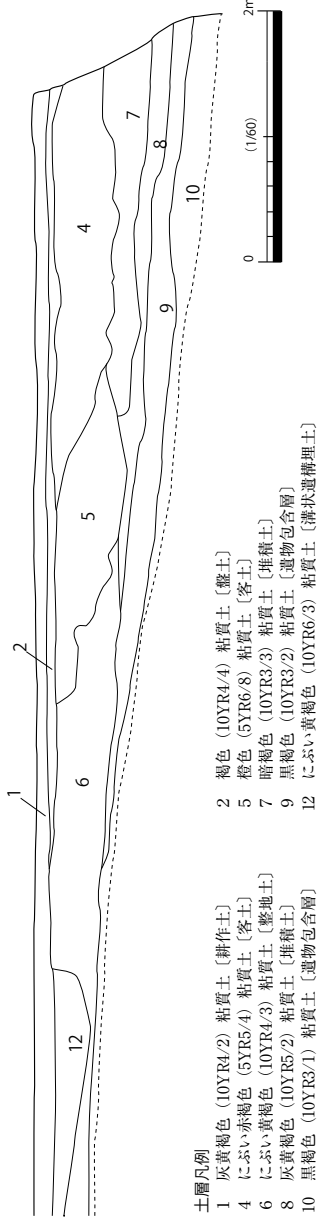


第4図 東壁土層断面図



第5図 北壁I土層断面図

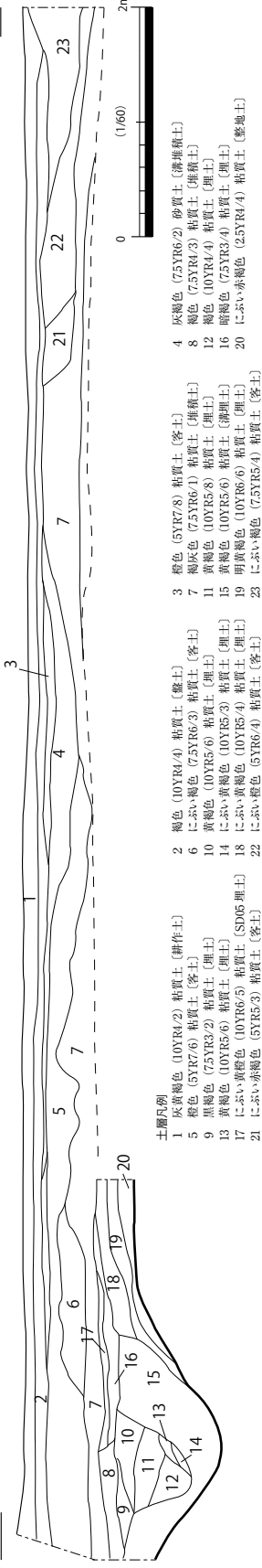
C' 84.80m



- 土層凡例
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (耕作土)
 - 4 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 粘質土 (客土)
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 (整地土)
 - 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (堆積土)
 - 10 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 (遺物包含層)
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (雜土)
 - 5 橙褐色 (5YR6/8) 粘質土 (客土)
 - 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (堆積土)
 - 9 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 (遺物包含層)
 - 12 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質土 (溝状遺構埋土)

第6図 中央壁土層断面図

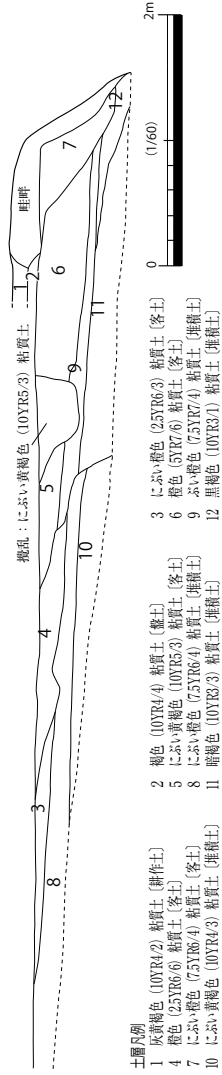
D 84.80m



- 土層凡例
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (耕作土)
 - 5 橙褐色 (5YR7/6) 粘質土 (客土)
 - 9 黒褐色 (5YR3/2) 粘質土 (埋土)
 - 13 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 (埋土)
 - 17 にぶい黄褐色 (10YR6/5) 粘質土 (SD05埋土)
 - 21 にぶい赤褐色 (5YR5/3) 粘質土 (客土)
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (雜土)
 - 6 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 粘質土 (客土)
 - 10 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 (埋土)
 - 14 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 (埋土)
 - 18 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土 (埋土)
 - 22 にぶい褐色 (5YR6/4) 粘質土 (客土)
 - 3 橙褐色 (5YR7/8) 粘質土 (客土)
 - 7 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質土 (堆積土)
 - 11 黄褐色 (10YR5/8) 粘質土 (埋土)
 - 15 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 (雜埋土)
 - 19 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 (埋土)
 - 23 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土 (客土)
 - 4 灰褐色 (7.5YR6/2) 砂質土 (雜埋積土)
 - 8 褐色 (7.5YR3/3) 粘質土 (堆積土)
 - 12 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (埋土)
 - 16 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 (埋土)
 - 20 にぶい赤褐色 (2.5YR4/4) 粘質土 (整地土)

第7図 北壁Ⅱ土層断面図

E' 84.80m



- 土層凡例
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (耕作土)
 - 4 橙褐色 (5YR6/6) 粘質土 (客土)
 - 7 にぶい褐色 (7.5YR6/4) 粘質土 (客土)
 - 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 (堆積土)
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (雜土)
 - 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 (客土)
 - 8 にぶい褐色 (7.5YR6/4) 粘質土 (客土)
 - 11 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (堆積土)
 - 3 にぶい褐色 (2.5YR6/3) 粘質土 (客土)
 - 6 橙褐色 (5YR7/6) 粘質土 (客土)
 - 9 赤褐色 (7.5YR7/4) 粘質土 (堆積土)
 - 12 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 (堆積土)

第8図 西壁土層断面図

竪穴建物（弥生時代）

SI01（第9図 図版6）

調査区中央部西よりに位置する。中世の開墾時、SD01・02によって西半分を削平消滅。また残った東半分も、現代の水田開発により上層部の殆どが削平されている。床面直上僅か10cm以下の壁掘方と壁下周溝の一部、主柱穴および中央土坑（長径50cm×短径48cmでほぼ円形、壁面が焼け締まっており、炉と考える）が残る。中央土坑、周溝、主柱穴の位置から判断すると、推定径7.6m～7.8m程度の規模である。周溝付近に杭状の小柱穴が巡るが、出土遺物がないため竪穴建物に伴うものか判断し難い。

床面直上で弥生土器小片（甕か壺の体部か）を1点検出したが、器面剥離・摩滅により、部位が特定できなかった。同じく床面直上で多量の炭化材と焼土を検出した。炭化材の放射性炭素年代測定（AMS）では2世紀頃の結果が出ている。また、主柱穴の一つと考えるSP34から出土した炭化材も同様の結果を得ている。この竪穴建物は弥生時代後期後半の遺構であり、炭化材・焼土の広がりから焼失家屋と判断する。

掘立柱建物（中世）

SB01（第10図 図版7）

SB01は調査区の北東部に位置する総柱の建物跡で、桁行3間（8.04m）×梁行2間（3.18m）、床面積25.57㎡を測る。棟方向はN33°Eである。後述のSP04、SP18の他に、SP17からは青磁椀（24）が出土した（SP06・08・27からも土師器片等が出土しているが、小片のため図化に至らなかった）。これらの遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭の建物と考えられる。なお、建物東側に位置するSD06に沿って、建物の棟方向と平行に並ぶ柱穴列SA01が配置されている。全長7.2m。敷地境界に付属する柵列や建物の目隠し塀などが想定できる。

SP04（構成柱穴）（第11図 図版8）

SB01を構成する柱穴である。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は長径が68cm、短径が40cmであり、検出面から底面までの深さは40cmを測る。黒褐色を呈する柱の抜跡の周辺には褐色土が、またそれらの上部には炭を含む明褐色土、にぶい黄褐色土の層が確認できた。暗褐色土の層で多数の炭と共に白磁椀（14）や土師器皿・椀片が出土した。

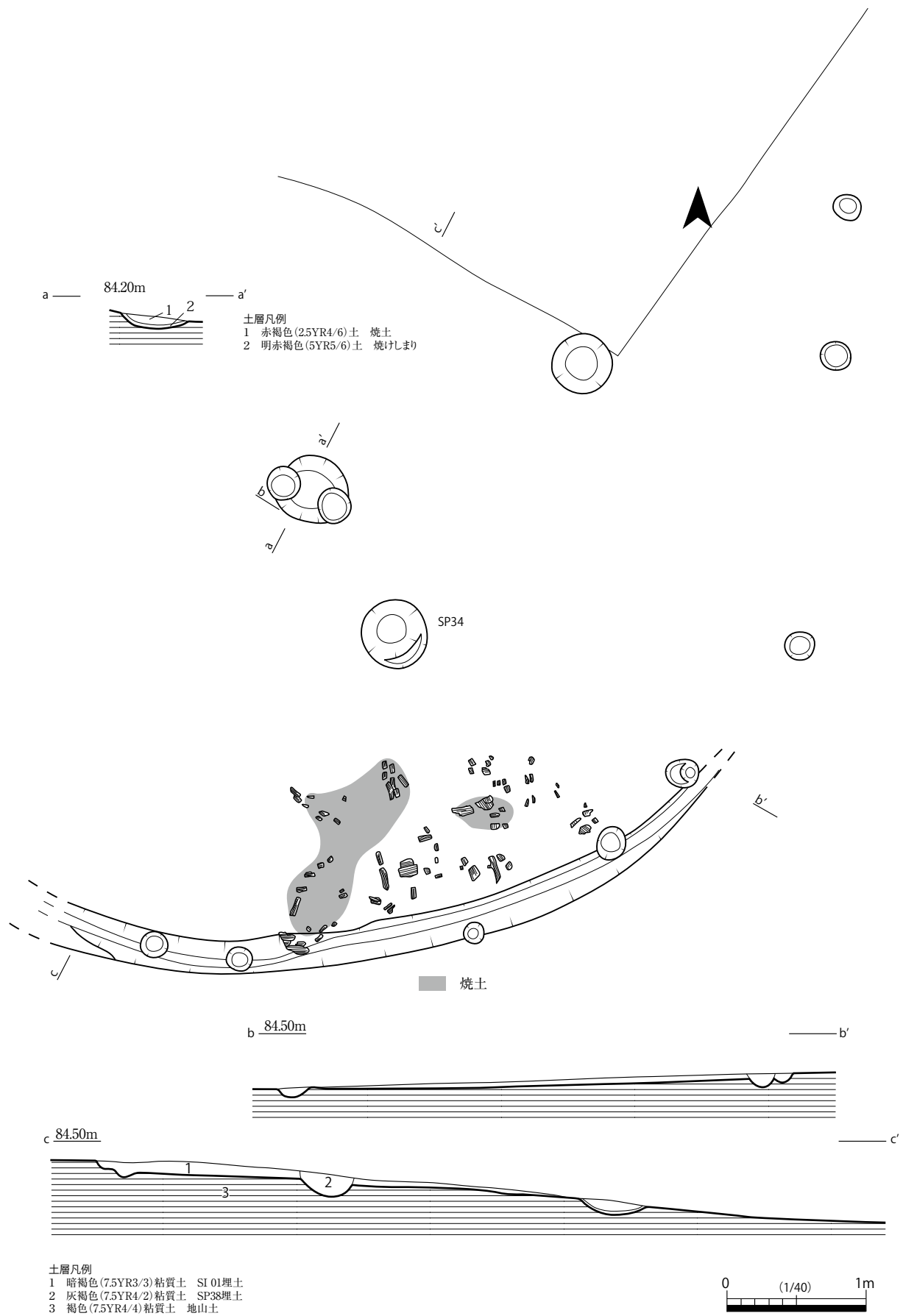
SP18（構成柱穴）（第11図 図版8）

SB01を構成する柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径26cm、短径20cmであり、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は明黄褐色土の単層である。埋土の上位で検出された土師器甕（23）から下方に白磁椀（15）や白磁皿（16～22）が重なるように出土した。また、底面には高台部を上に向け、伏せたように並べた白磁椀・皿を確認することができた。

柱穴（中世）

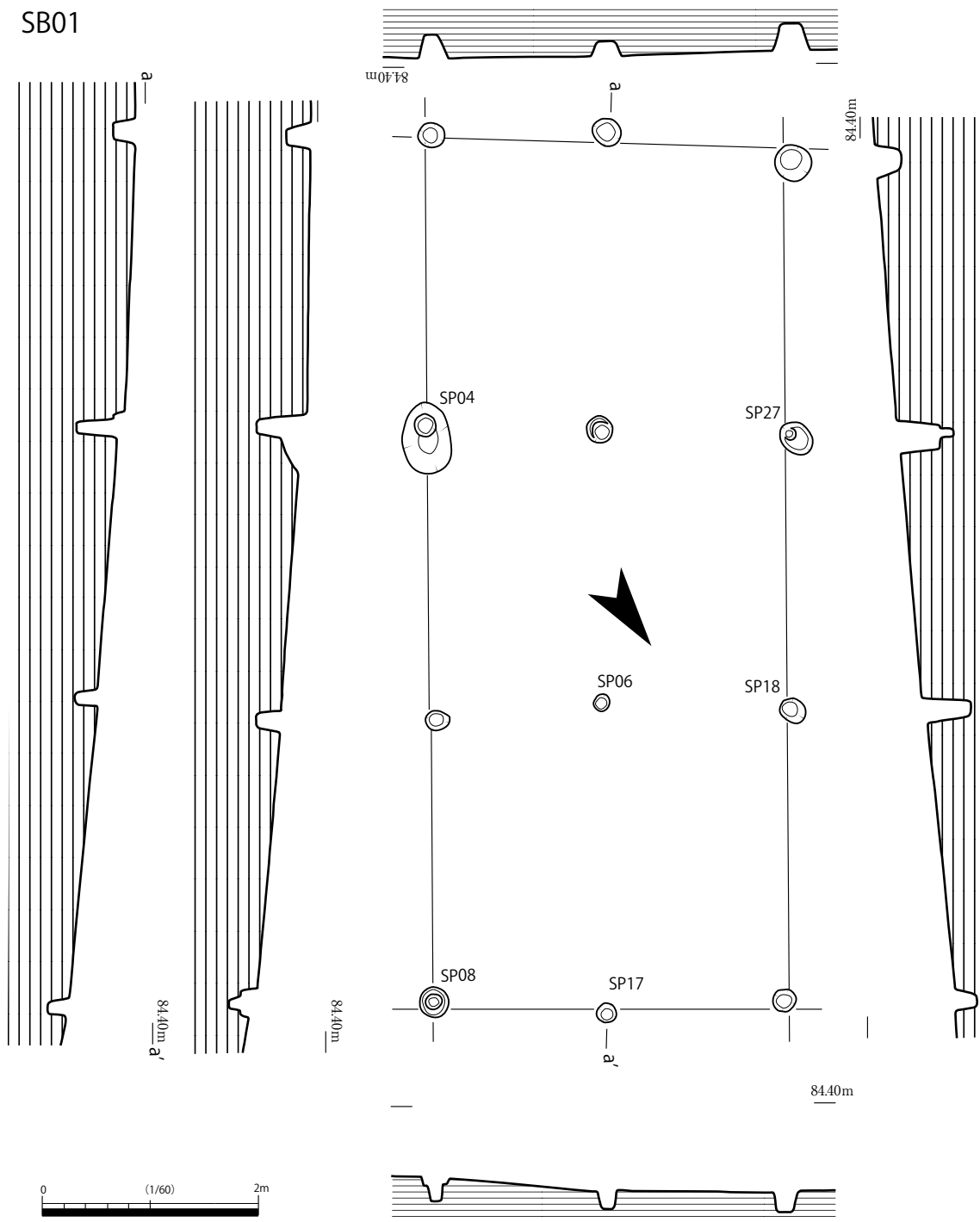
SP49（第11図 図版8）

SX01の北東部で検出された柱穴である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径26cmであり、検出面から底面までの深さは37cmを測る。埋土は灰褐色土の単層である。埋土の中位から底面にかけて



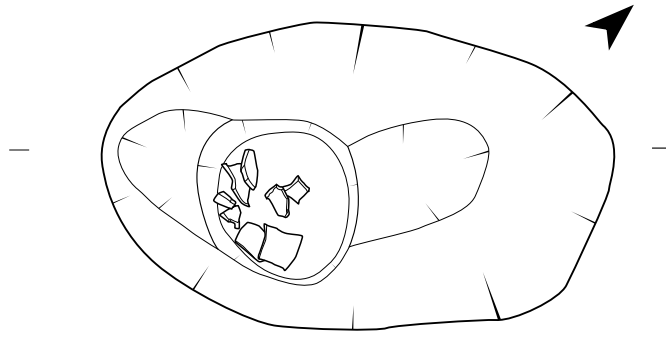
第9図 SI01 実測図

SB01

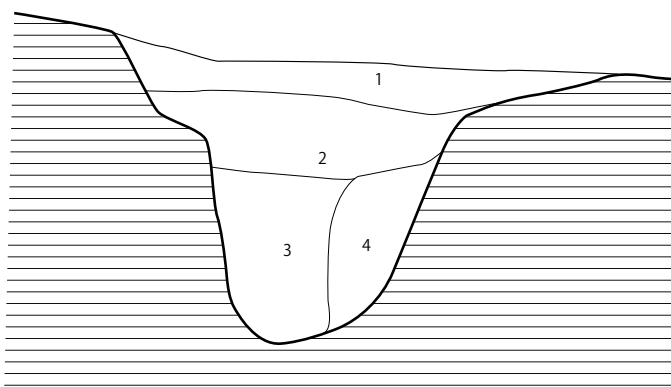


第 10 図 SB01 実測図

SP04



84.30m

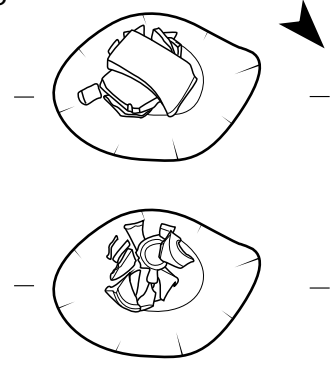


土層凡例

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
やや粘質、若干炭混入
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 炭多数含む
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土
- 4 褐色 (10YR4/6) 粘質土

0 (1/10) 20cm

SP18

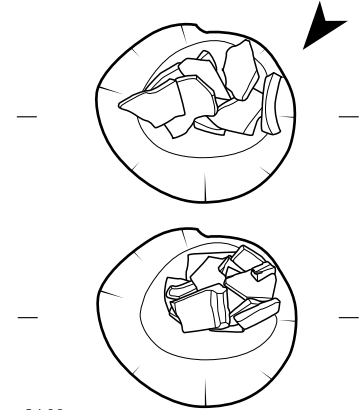


83.80m

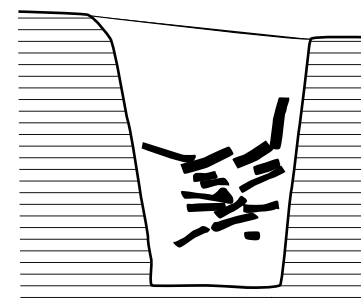


0 (1/10) 20cm

SP49

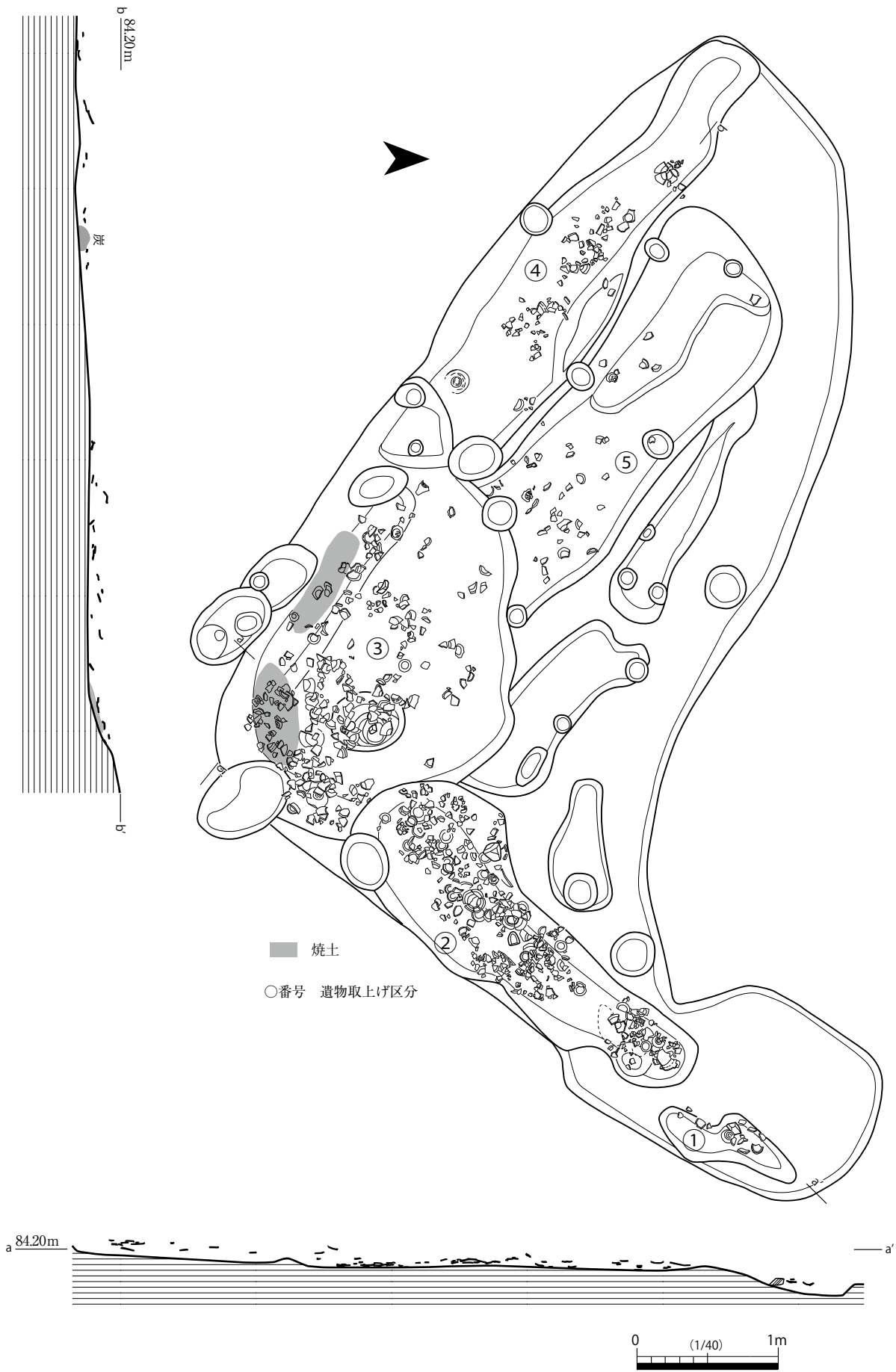


84.00m



0 (1/10) 20cm

第 11 図 SP04・18・49 土器出土状況実測図



第 12 図 SX01 土器等出土状況実測図

白磁皿（28）、陶器壺（29）をはじめ多数の磁器・陶器・土師器が出土した。中でも陶器甕（30）は、東に隣接するSB01の構成柱穴であるSP18から出土した陶器片と接合することができ、掘立柱建物SB01の構成柱穴、あるいは関連建物の柱穴であることも考えられる。

性格不明遺構（中世）

SX01（第12図 図版12～14）

SX01は調査区東部中央に位置する。大小10余の浅い土坑状の掘込みで構成されており、全体上層を5cm程度の遺物包含層が覆う。遺物包含層と個別土坑状掘込み埋土は境界がはっきりしない。これは連続廃棄による堆積によるものと考えられる。遺物の出土状況と照らして、短期間（数年～数十年程度か）で形成された廃棄土坑と推察するが、不明な点もある。

全体の平面形はL字型を呈し南東～北西方向の長さ約640cm、南西～北東方向の幅は中央部で約280cm、東部で約560cmを測る。また、個別掘込みの平面形は長楕円形ないし溝状で浅く10cm～30cmだが、周辺の柱穴の多くが30cm～35cm程度であることから、上面が幾分削平されていることが分かる。南東～北西方向と南西～北東方向の掘込みはほぼ直交し、L字状を形成する（遺物取り上げ区分①～⑤で形成される部分）。この部分はSX01他の部分と比較するとやや深めである。土器の出土もこのL字状の掘込みに集中している。旧地形に沿うものなのか、建物と関連するものなのか推察の域を出ないが、単なる廃棄土坑ではないと考える。先述のSB01の構成柱穴SP04およびSP18出土の白磁碗片とSX01出土の白磁碗片が接合したこと、またSB01の棟方向とSX01の各辺が並行あるいは直交していることなど、関連性は大きい。

SX01からは中世の遺物が一括出土している。出土遺物のうち、土師器は150点を超える。皿と杯の個体数出土割合は約3：1で、碗は数点である。土師器皿のうち2点は京都系である。次いで瓦器が多く、図化した瓦器の点数も20点を超える。更に、白磁の碗・皿、青磁碗・皿も出土している。他地域との交流・交易により得られる物品の出土量が多い。

全体量は少ないが、鍛冶関連遺物である鉄滓の殆どがSX01から出土している。SX01内に鍛冶炉は確認できなかった。また調査範囲内でも検出されなかったが、後世の水田開発によりSX01の直ぐ上位部分は斜面が大きく削平されて平坦面になっており、削平の際に鍛冶関連遺構が消滅したと考えることができる。

土坑（近世）

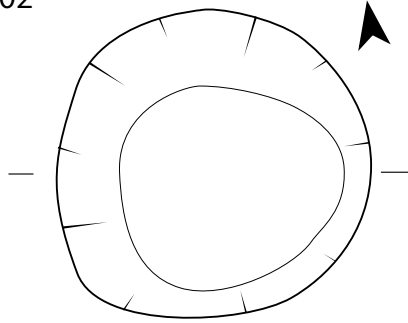
SK01（第13図 図版10）

調査区東壁近辺に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約120cm深さ44cmを測り、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。1層から瓦片が多数出土したが、他の遺物は無い。形状および褐色粘質土の3層に杉板材が混入していたことから、貯水を目的とした井戸の可能性が高い。

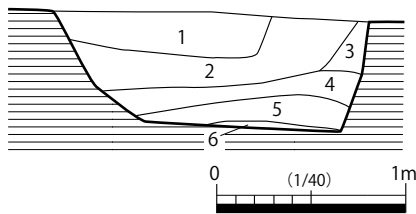
SK02（第13図 図版10）

調査区の東側、SK01から南西約4mの方向に位置する。平面形は長径166cm、短径160cmの楕円形を呈し、深さ60cm。断面は皿状で底面は平坦である。出土遺物は見当たらず、埋土に竹片が混入

SK02



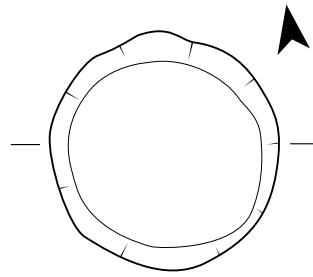
84.50m



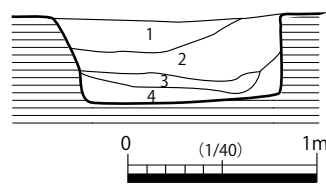
土層凡例

- 1 灰褐色 (5YR4/2) 粘質土
石灰岩が混じる客土
- 2 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 粘質土
- 3 灰褐色 (5YR4/2) 粘質土
- 4 灰褐色 (5YR5/2) 粘質土
帯水層
- 5 明赤褐色 (5YR5/8) 粘質土
- 6 褐灰色 (5YR5/1) 粘質土

SK01



84.50m



土層凡例

- 1 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 粘質土
- 2 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 粘質土
- 3 褐灰色 (5YR5/1) 粘質土
杉板材が混入
- 4 赤褐色 (5YR4/6) 粘質土

第 13 図 SK01・02 実測図

したり、灰褐色粘質土の帯水層と思われる 4 層を確認できたことから、SK01 と同様、貯水を目的とした井戸の可能性が高い。

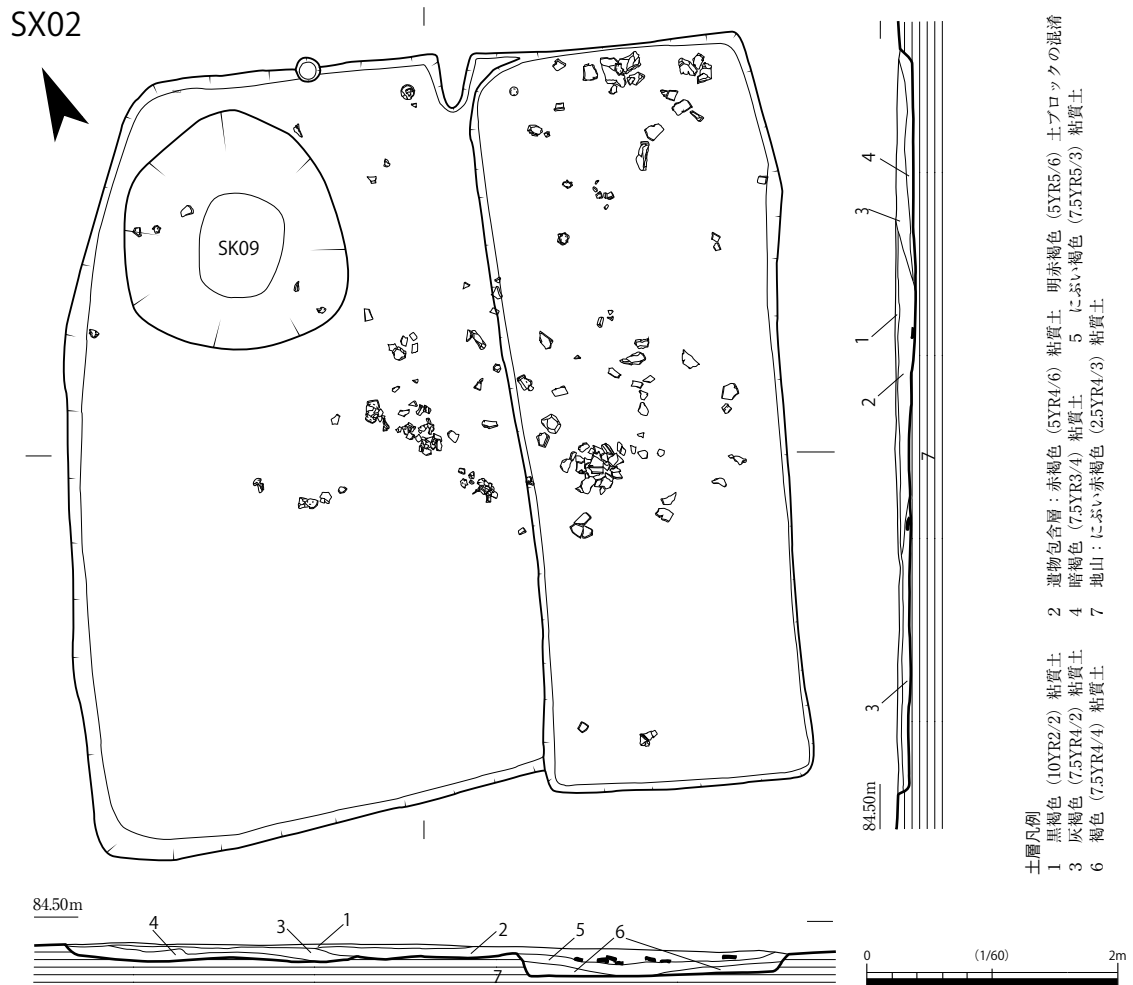
SK08 (図版 11)

調査区南側、SK02 に隣接し、SX02 に東側壁面の一部が切られている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、長軸 260cm、短軸 170cm、深さ 30cm を測り、断面は皿状、底面は平坦である。埋土は大きく 2 層に分かれる。埋土上位から丸瓦 (139)、白磁紅皿 (140) をはじめ、瓦質土器片や陶器椀・壺、備前焼、瓦片など、近世の遺物が多く出土した。また下位には褐灰色粘質土が広がっていることから水溜等の使用が考えられる。

性格不明遺構 (近世)

SX02 (第 14 図)

調査区南側 SK08 と隣接する。平面形は長方形を呈し、規模は、長軸約 600cm、短軸約 570cm を測る。長軸の方向は N30° E。深さは東側約 25cm、西側約 10cm と、東側が一段掘り下げられ、出土土器の多くは掘り下げた東側の赤褐色土の層から検出された。長方形の平面から、竪穴建物跡あるいは工房跡を予想しながら調査を進めたが、床面からの出土遺物も無く、屋根を支える柱穴も確認できなかった。出土遺物は近世のものが多く、主な遺物として、白磁紅皿 (141)、白磁椀 (玩具 142)、瓦質土器湯釜 (143)、陶器播鉢 (144)、陶器甕 (145・146)、土師器甕 (147・148・149) が挙げられる。これらの土器が使用された時期か、あるいは早い時期に何らかの目的をもって造られた SX02 に、これらの



第14図 SX02実測図

多くの器物が廃棄されたとも想像できる。また、床面の掘り下げ作業中に、北西部にSK09が検出された。SX02より古い時代に造られた土坑であるが、出土遺物が全くなく、その目的及び時期は不明。

溝 (中世)

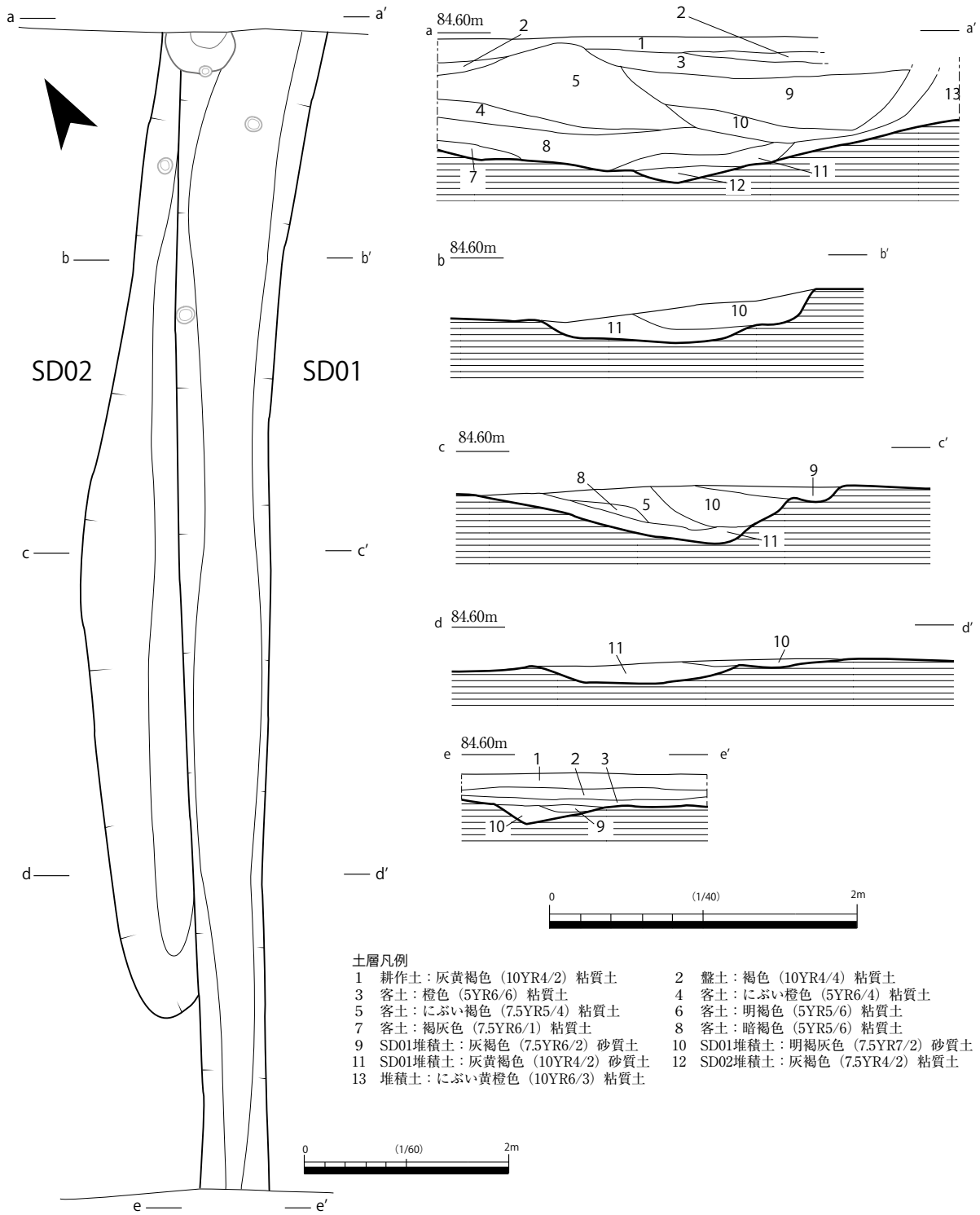
調査区内にSD01からSD06まで6本の溝が検出された。SD06、SD04、SD02、SD05は東から順に12m程度の間隔をもって南北方向に位置しており、造られた時期に大きな差はなく、更にSD06はSB01の棟方向と同じ向きであることから、これらの溝の築造時期を中世と比定できる。SD01とSD03はそれぞれSD02、SD04を切っていることから他の4本より新しい溝である。

SD01 (第15図 図版9)

調査区の南側高所から、北側低所にかけて南北に貫通するように位置する。検出部分は全長約14m、幅80～180cm、深さ20～44cm。断面形はU字形や逆台形を呈する。後世の耕地利用による削平などによって南側ほど浅い。時期を裏付ける遺物は出土していないが、調査区を南北に横切っていることから最も新しい溝であると推測できる。

SD02 (第15図 図版9)

SD01と同じく南北に貫通していたが、後世の削平によって南側は消滅した段階でSD01に東壁を切られている。検出部分は全長約9.5m、幅90cm～120cm、断面形は浅いU字形やV字形を呈する。時期を裏付ける遺物は出土していない。

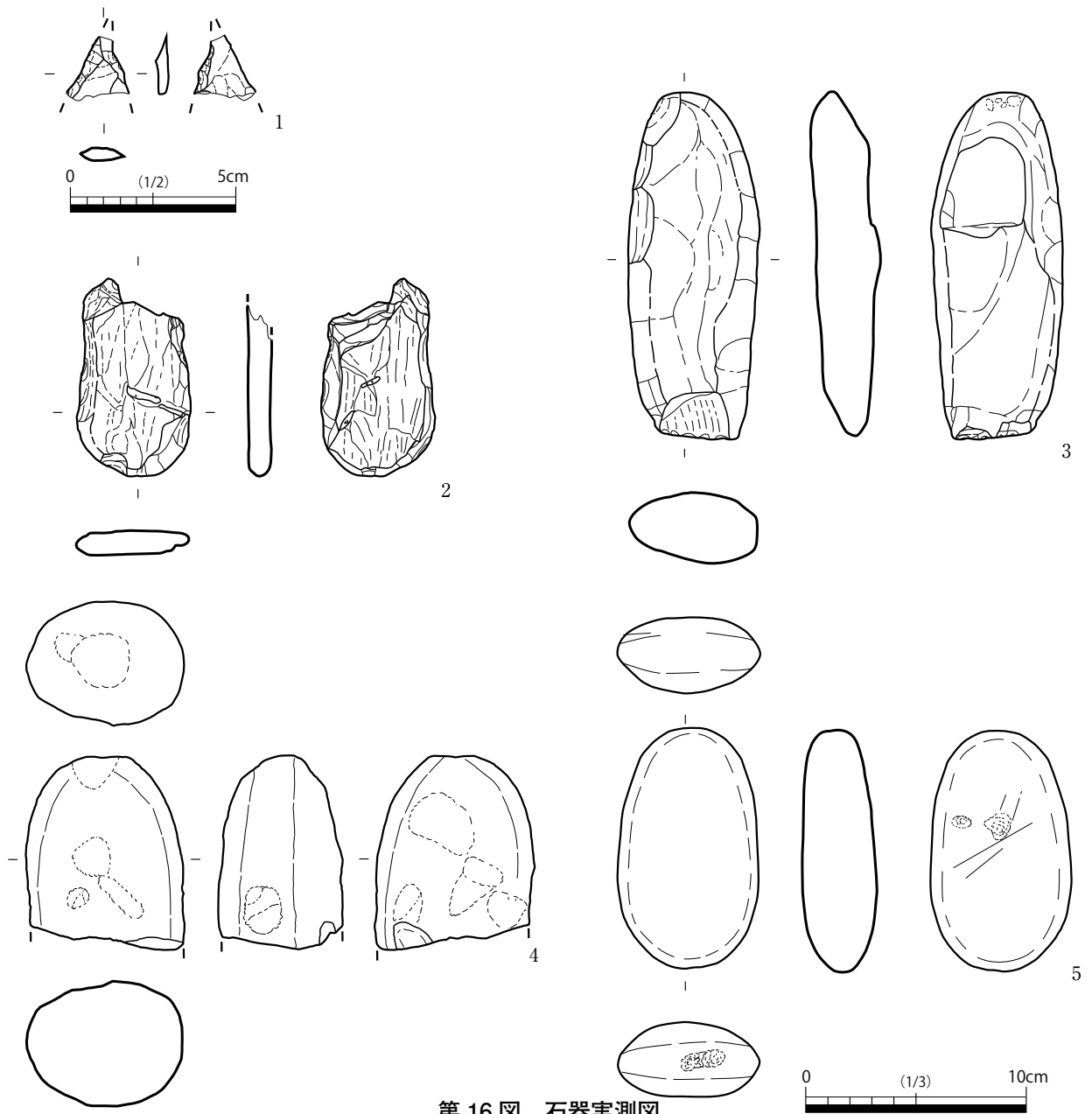


第 15 図 SD01・02 実測図

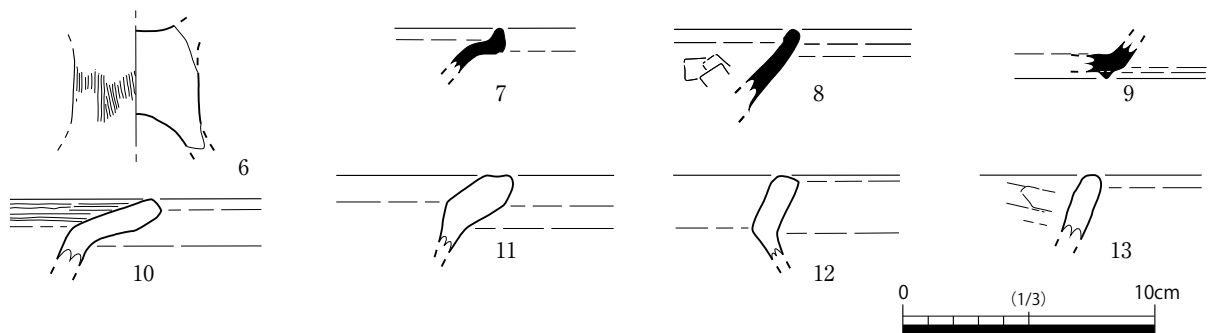
3 主な遺物

石器・石製品

本調査において石器・石製品が遺物包含層から出土したほか、遺構面直上で数点を採集している。

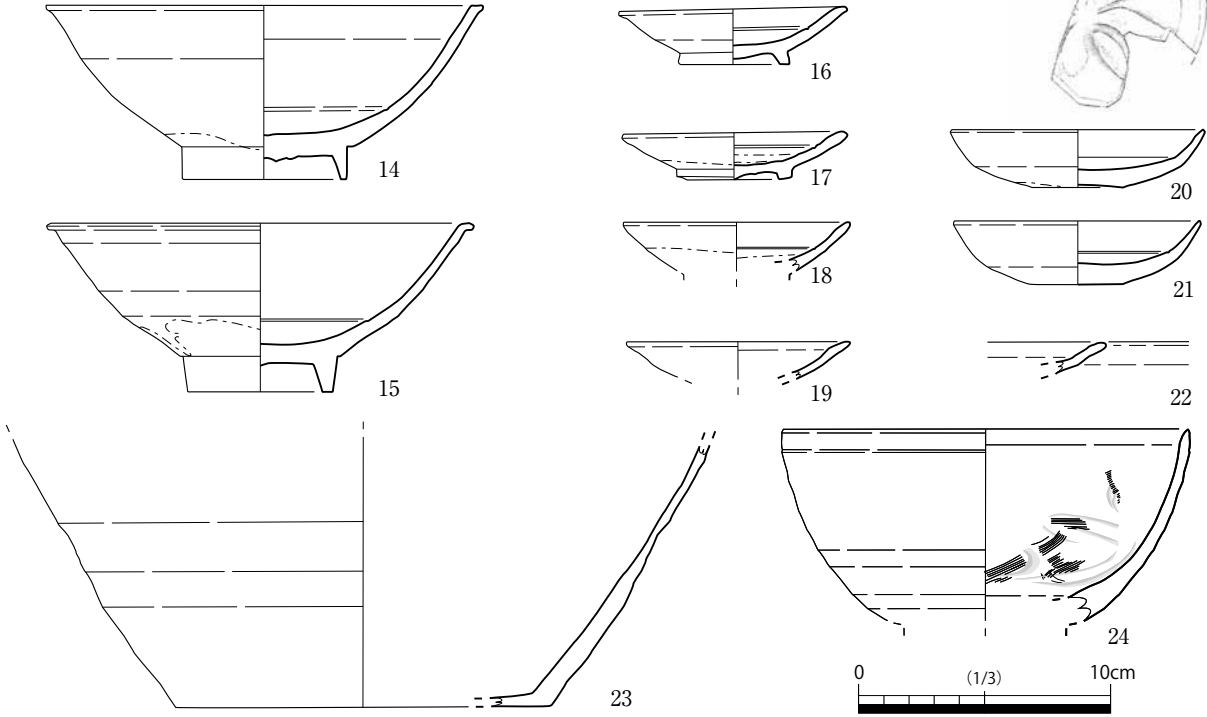


第16図 石器実測図

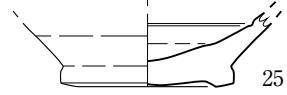


第17図 出土遺物実測図（弥生時代～古代）

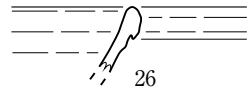
SB01(SP18)



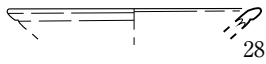
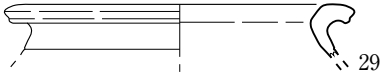
SP25



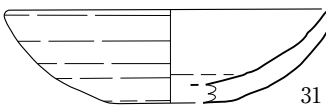
SP31



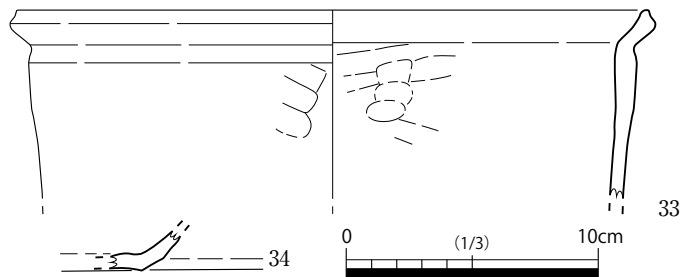
SP49



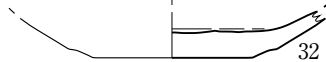
SP35



SP37



SP02



第 18 图 SB、SP 出土遺物実測図

1は打製石鏃である。石材は火山岩系の安山岩と考える。調整はやや雑で、先端および基部端を破損している。2は砂質片岩製の打製石斧で破損品。3は泥質片岩製の磨製石斧。研磨は粗く、刃部を欠損している。4は磨石と考える。欠損品で4面に使用痕がある。5は敲石。完形品で、使用による敲打痕を有す。

弥生時代～古代の遺物

弥生時代の遺物はSI01から7cm程度の弥生土器片(甕か壺の体部か)1点と小片が数点出土したが、器面表裏とも剥落が激しく、部位が特定できないため図化には至らなかった。共伴出土炭化材の放射性炭素年代測定(AMS)では2世紀頃の結果が出ている。

古墳時代から古代にかけての出土遺物は、極めて少ない。6は土師器の高杯脚部であり、受部および裾部を欠損している。7～9は須恵器である。7は広口壺の口縁部小片、8は鉢の口縁部、9は杯身体部の小片である。須恵器の出土は図化した3点のほかに遺構外採集の小片数点のみである。10～13はいずれも土師器甕の口縁部。土師器も、この4点以外に図化できるものがない。7はSP41から、10はSK06からそれぞれ出土している。11はSX01⑤の上層を覆う遺物包含層から出土している。これらの遺物が出土した遺構からは中世遺物が多量に共伴出土していることから、7、10、11は流入と考える。古墳時代から古代の遺構時期決定資料として扱える遺物は出土していない。

中世の遺物

(1) 掘立柱建物および柱穴出土遺物

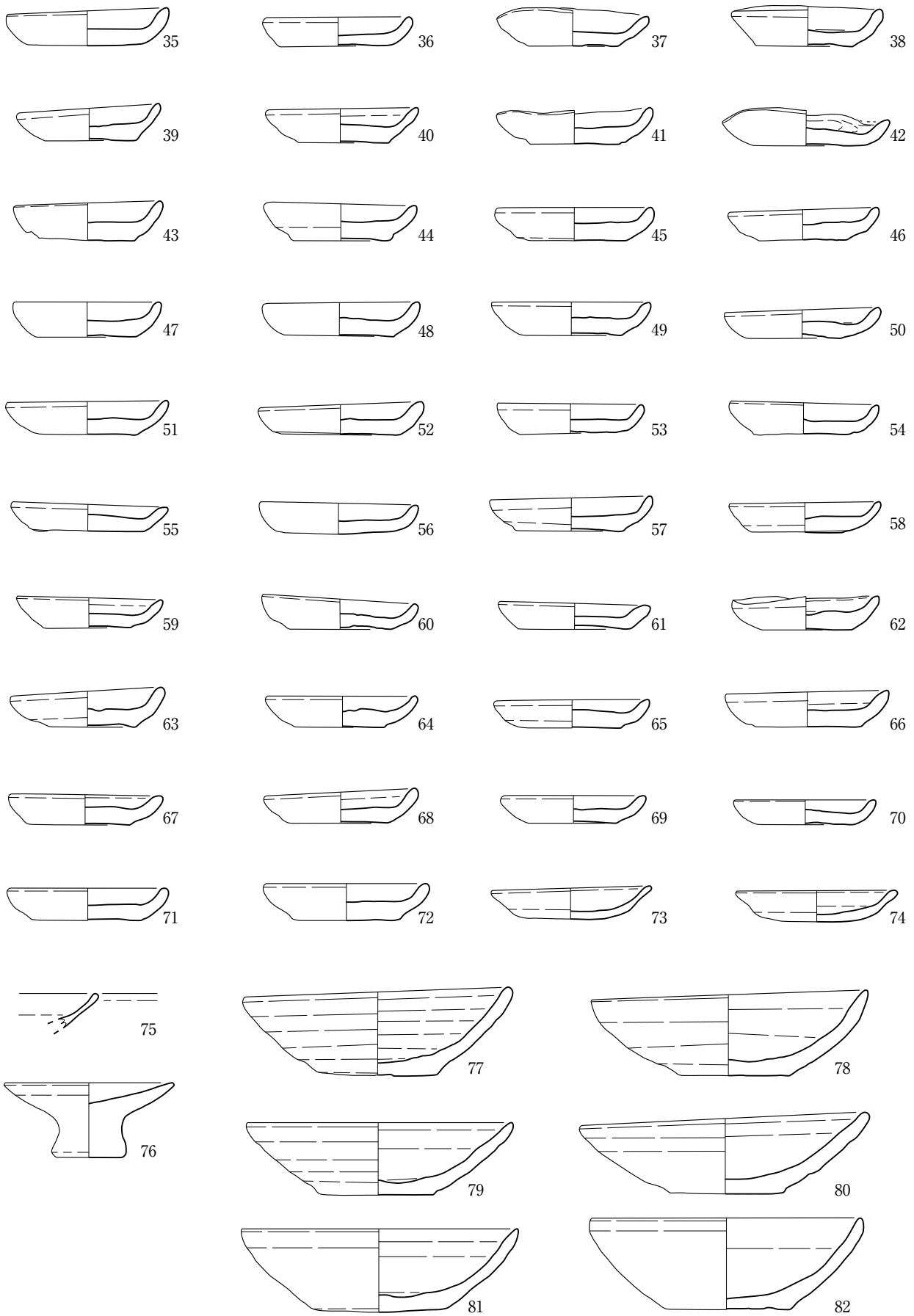
14～24はSB01構成柱穴から出土した遺物である。14・15は白磁碗。高台は細目で直立する。口縁部は外方に鋭く屈折し、上端部は水平にする。14はSP04、SP18およびSX01②から出土した部位を接合した。14の釉は浅黄色、15は灰白色を呈す。16～22は白磁皿。16の内外面は灰白色を呈し、高台は露胎。内面に一条の沈線を有す。見込み部分の釉を掻き取らないもので、重ね焼きの際の最上段に置いた皿と考える。17の内外面は灰白色で高台は露胎である。内面に一条の沈線を有す。見込みは蛇の目釉剥ぎである。20の底部外面は僅かに抉り、21は平底で厚めである。20は内面に花文状の櫛描きとヘラ描きを有す。23は土師器の甕の底部で、器壁は薄い。24は龍泉窯系の青磁碗で、SP17から出土した。内面に片彫蓮花文様を配し、空白部を櫛目で埋める。高台を欠失しているが、ケズリ出しはやや浅めで底部は肉厚と推察する。

25は白磁碗底部で、SP25から出土した。ケズリ出しは浅く、底面は厚い。外面は露胎である。28～30はSP49から出土した。28は白磁皿、29は陶器壺の口縁部である。30は陶器甕で、断面Y字形の口縁を有す大型容器である。タタキによる調整を施した後、内外面ともに丁寧にナデ消している。31・32は土師器の杯でそれぞれSP35、SP02から単独出土した。SP37からは33土師器鍋の口縁～体部片と34土師器皿底部が出土している。

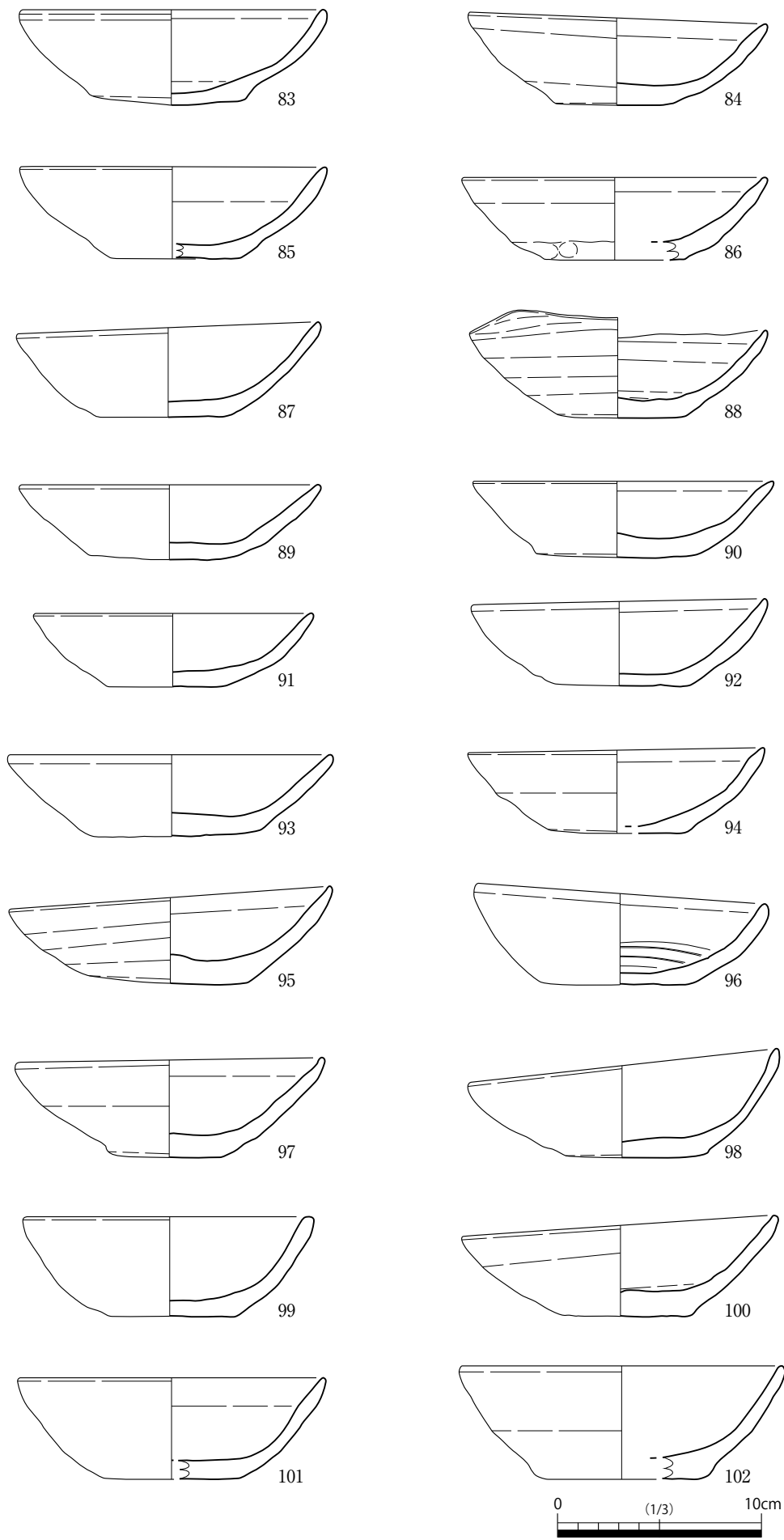
(2) SX01 出土遺物

35～138はSX01から一括出土した遺物である。土師器皿および杯の個体数は全体で150点を超える。皿：杯の出土割合は約3：1である。

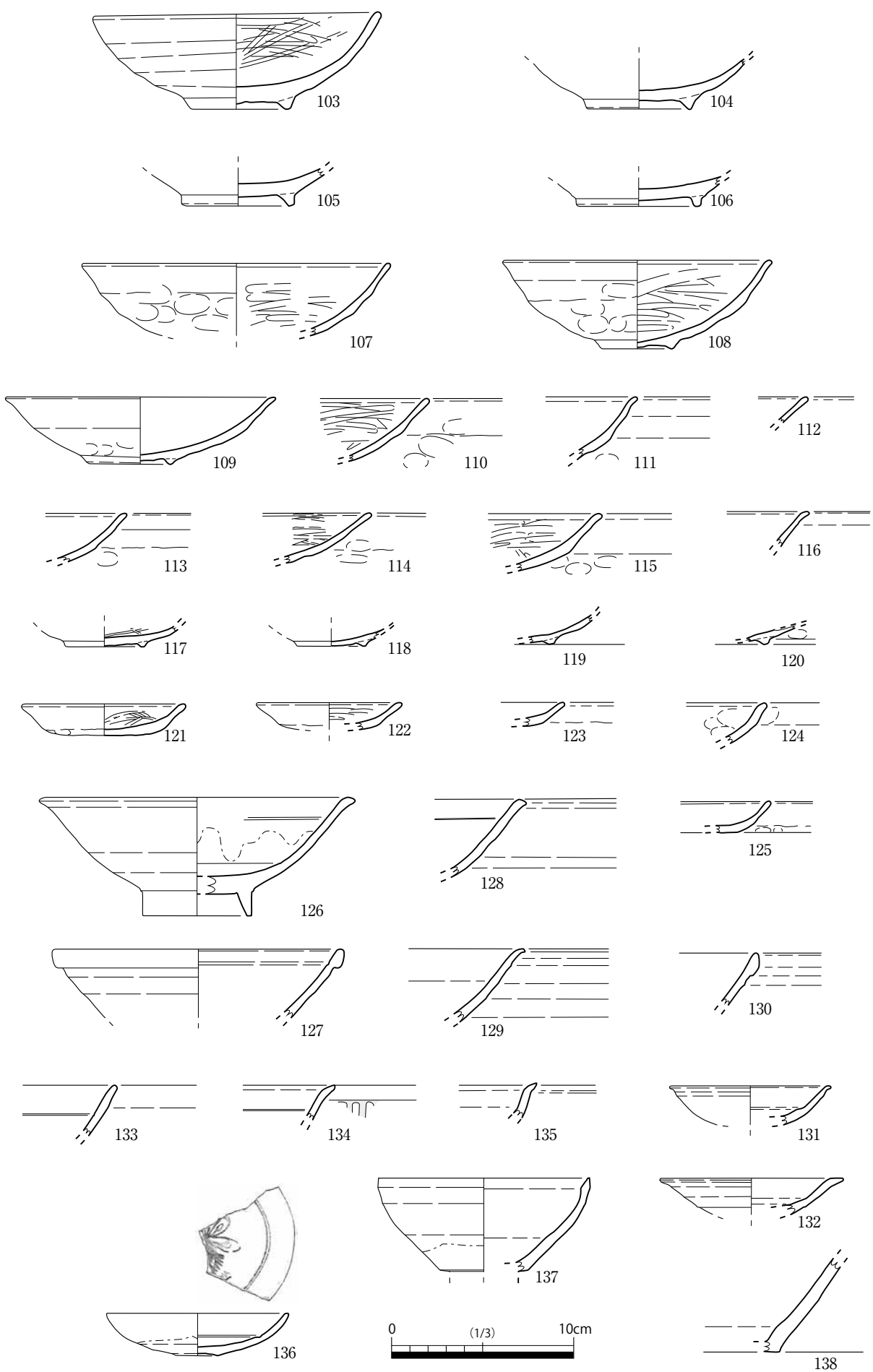
35～75は土師器皿。口径7.5～8.9cm、底径4.7～6.8cm、器高1.4～2.2cmを図る。切り離し法は全て回転糸切。色調は橙色またはにぶい橙色。概ね器壁はやや厚く、体部は逆八字方向に短く摘み上



第 19 図 SX01 出土遺物実測図①



第 20 图 SX01 出土遺物実測図②



第 21 图 SX01 出土遺物実測図③

げ、口唇先端は丸く収める。73・74は京都系土師器。76は土師器の柱状高台付皿である。77～102は土師器杯である。口径14.3～15.7cm（復元径を除く）、底径5.7～8.3cm、器高3.6～5.6cmを図る。切り離し法は全て回転糸切（不明を除く）。色調は橙色～浅黄橙色またはにぶい橙色。82と93は底面に板目圧痕を有す。103～106は土師器碗である。灰白色ないし浅黄橙色を呈し、断面逆三角形の貼付け高台を有す。103の内面にはミガキ痕残る。107～120は瓦器碗、121～125は瓦器皿である。何れも和泉型で、概ね黄灰色または灰黄色を呈す。瓦器碗の出土個体数は多いが、底部から口縁までが残存しているものは109のみで、他は口縁片、体部～口縁片、底部片それぞれの小片であった。皿も121を除き小片である。126～130は白磁碗である。127・130の体部は直線的で玉縁口縁をもつ。126・128・129の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁先端は外方に屈曲する。131・132は白磁皿。共に灰白色を呈す。132の見込みおよび底面は釉ハギ。高台の有無は不明。133～135は青磁碗。134は外面口縁下に間隔の狭い連弁を有す。136は青磁皿で、見込みに花卉印を有す。黄褐色を呈すが、二次被熱によるものか。137は陶器碗である。建蓋（禾目）天目か。SX01の上層を覆う遺物包含層から出土しており、上位遺構から流入したものと考え。138は瓦質土器の鉢の底部片。

近世の遺物

（1）SK08 出土遺物

139は軒丸瓦である。右三巴文。140は白磁の紅皿。内面は、型抜き後ナデ。外面は菊花様に成形。

（2）SX02 出土遺物

141は白磁の紅皿で、140と同様の成形。142は白磁の碗（玩具）である。羽子板と羽の文様を有す。143は湯釜である。144は陶器の播鉢。卸目が幾重にもつけられている。145・146は陶器の甕である。暗赤褐色を呈す。備前か。147～149は土師器の甕である。何れも橙色呈し、内外面はハケ目調整。149の口径は147に比べて大きい。

鍛冶関連遺物

150～157は鉄滓で、150はSK03、151～157はSX01から出土した。鍛冶炉の検出はなかったが、碗形滓（150）や151・152のようにやや大きめの鉄滓が出土していることから、隣接地に鍛冶関連の遺構が存在すると考える。

遺物包含層1 出土遺物

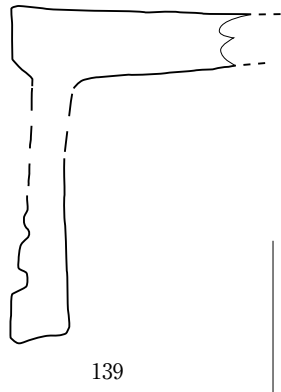
遺物包含層1は、SB01やSX01が後世に削平されて流出した遺物（或いは同時期の遺物）を多く包含している。158～166は白磁碗、167は青磁皿である。大宰府編年のV類が多く含まれ、何れも12世紀代（前半から後半まで幅広く含む）。158～160の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁先端は外方に屈曲する。158は内面に短い櫛目文を有す。161の体部は直線的に口縁に延び、先端は小さな玉縁をもつ。162・163の口縁先端は鋭く外反。164の器壁は薄く、口縁部は緩やかに外反する。

165の高台は幅が広く、ケズリ出しが浅い。よって、底部は厚みを帯びている。体部上位から口縁にかけては欠損しているが、いわゆる玉縁口縁を有する時期の碗である。166の高台は細目で、高く直立する。167は龍泉窯系の小皿。

168～177は土師器皿、178～181は土師器柱状高台付皿である。何れも切り離し法は回転糸切。

183～188は土師器杯。183～186は橙色系杯で体部は逆ハ字形に開き、直線的に立ち上がる。

SK08



139

SX02



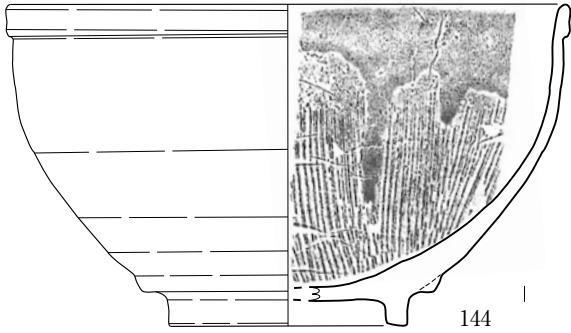
140



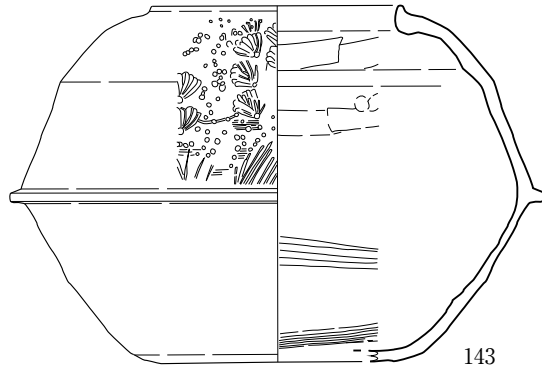
141



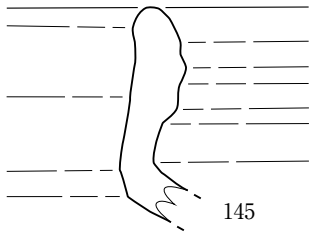
142



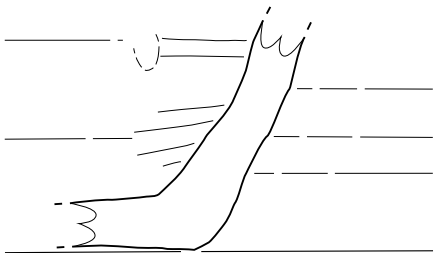
144



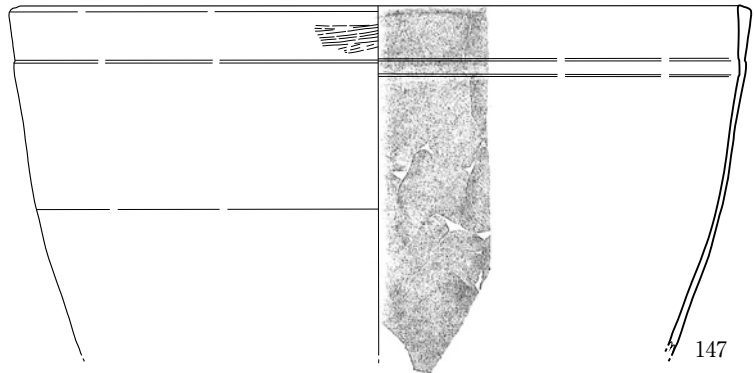
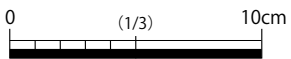
143



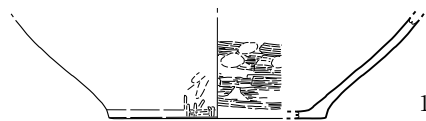
145



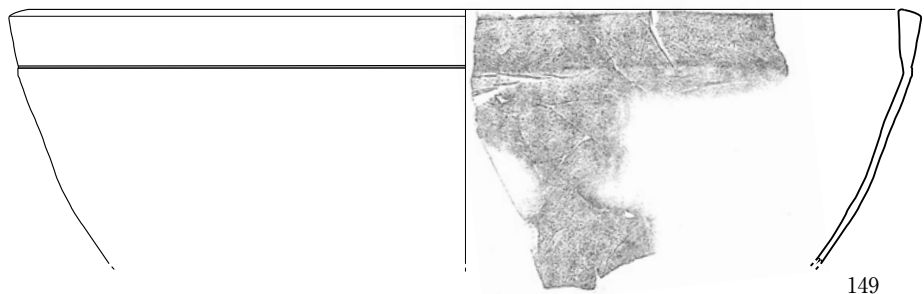
146



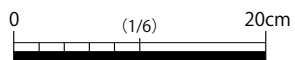
147



148



149



第 22 图 SK08、SX02 出土遺物実測図

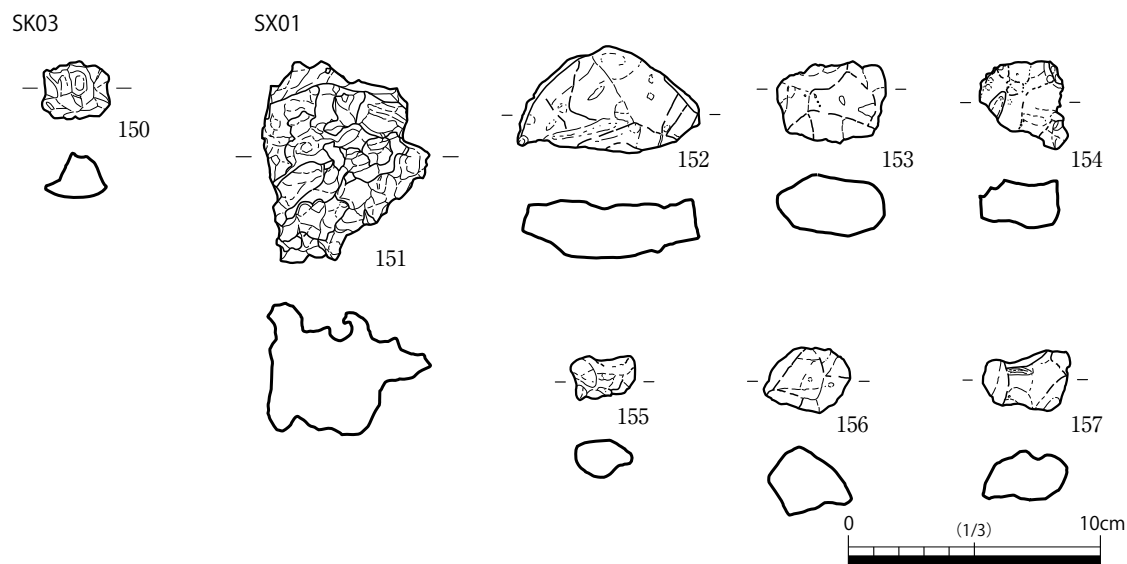
187・188 は白色系杯で、体部は内湾して立ち上がる。188 の器高は 3.5cm と低い。

189～191 は土師器碗である。白色系で断面三角形の貼付高台を有す。

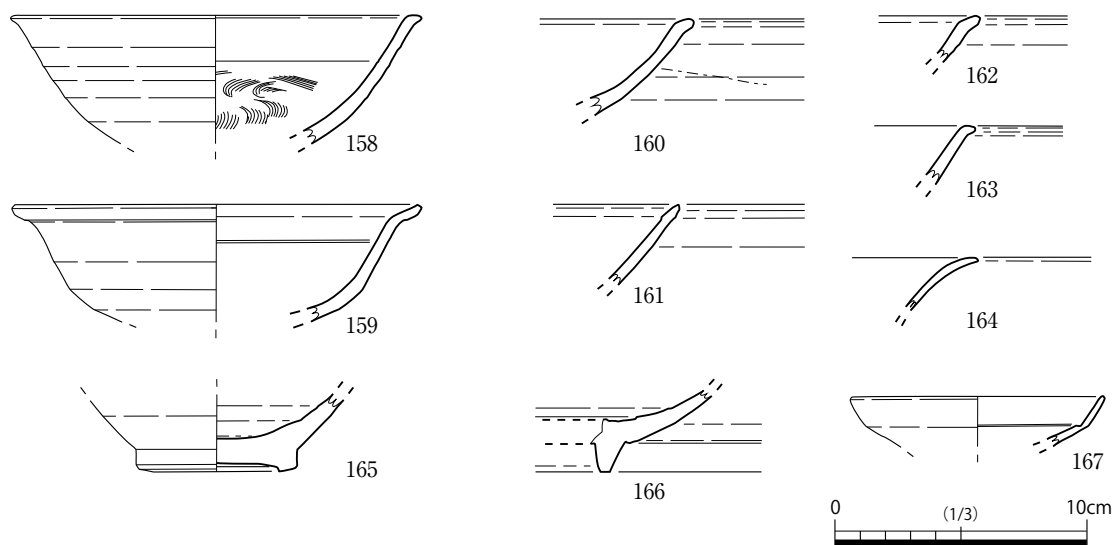
192 は短頸雁又式鉄鏃。鏃身の一方先端部を欠損。鏃矢や流鏃馬などに使用されるもので、嚙矢（こ
うや）として用いられるなど儀礼的要素のある遺物である。出土地点の南上方に SB01 や SX01 が位
置していることから、それらの遺構から流出したものか、関わりのある出土遺物と考える。美祢市近
郊では、神郷大塚遺跡Ⅳ（山口市）や中恋路遺跡 3（山口市）で出土例を見る。

遺構外遺物

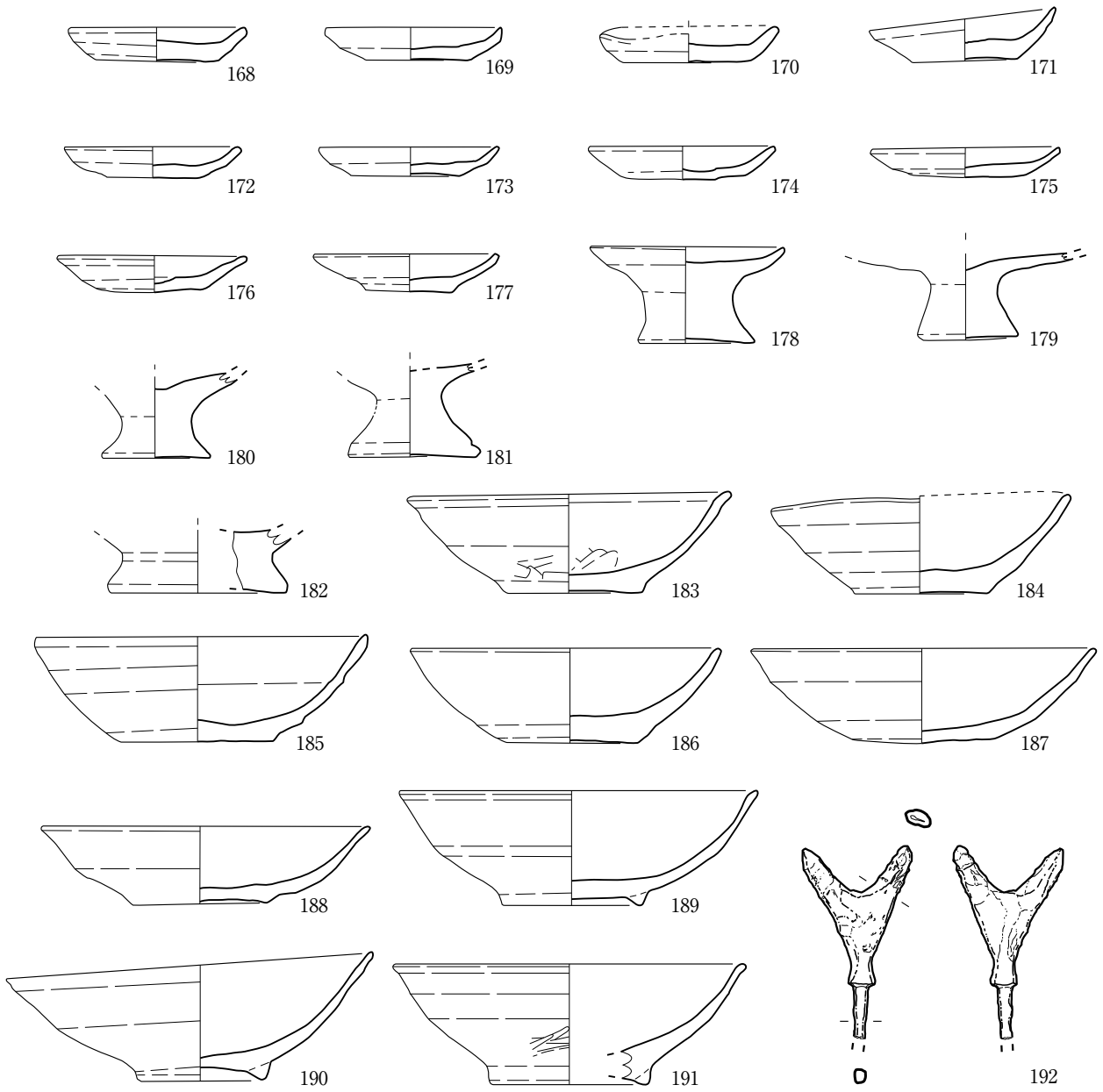
196 は土師器杯底部。197 は柱状高台付皿の台部で、底部径は 8.4cm と大きめ。198～200 は瓦質土
器鍋の脚部片である。199・200 はいわゆる獣足。遺構から出土した瓦質土器はない。遺構外採集も
図化した 3 点に留まる。



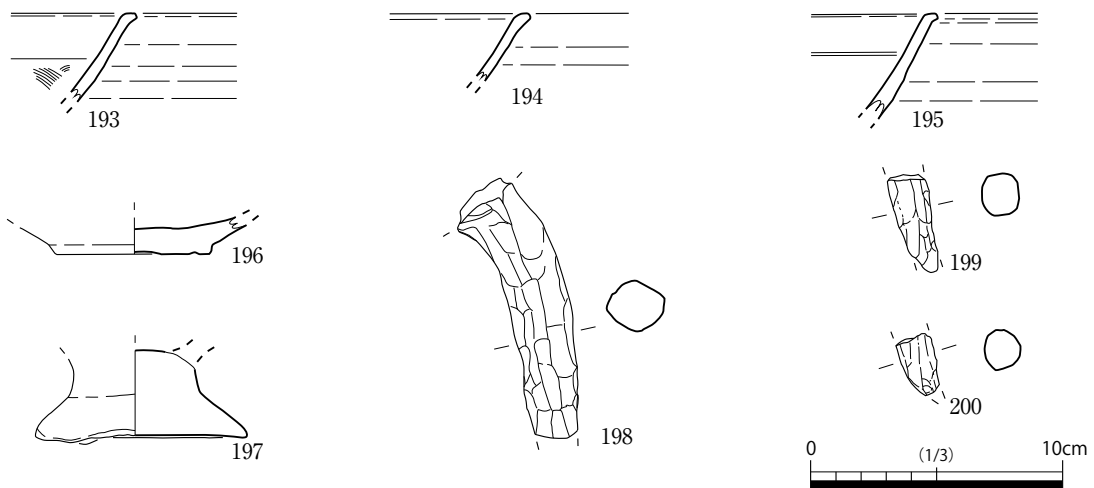
第 23 図 鍛冶関連遺物実測図



第 24 図 遺物包含層 1 出土遺物実測図①



第 25 图 遺物包含層 1 出土遺物実測図②



第 26 图 遺構外遺物実測図

第1表 出土土器・陶磁器観察一覧表

No.	挿 図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考	
					口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)						
6	17	15	SP23	土師器	高杯	-	[4.8]	-	粗	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 5YR7/6	杯部ナデ後ミガキカ 脚底部ナデ ハケ目	古墳時代
7	17	15	SP41	須恵器	広口壺	-	[2.0]	-	密	良	灰 10Y6/1 黄灰 2.5Y5/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	蓋の可能性あり 面に自然釉 外面は素地のみか
8	17	15	遺構外	須恵器	鉢	-	[3.2]	-	密	やや 良	灰黄褐色 10YR6/2 褐色 10YR6/1	回転ナデ回転後ナデ 回転ナデ	
9	17	-	遺構外	須恵器	杯身	-	[1.5]	-	密	良	黄灰色 2.5Y6/1 褐灰色 10YR6/1	回転ナデ 回転ナデ	底部貼り付け高台 切り離しは不明 高台部
10	17	15	SK06	土師器	甕	-	[2.6]	-	やや 粗	やや 良	明赤褐色 5YR5/6 灰褐色 5YR4/2	ハケ目 ナデ	
11	17	15	SX01⑤ 上層	土師器	甕	-	[3.0]	-	やや 密	やや 良	明赤褐色 5YR4/6 黒褐色 5YR3/1	回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ヘラケズリ後回転ナデ	外面煤付着 もしくは焼成不足による色 調か
12	17	15	遺物 包含層1	土師器	甕	-	[3.0]	-	密	やや 良	赤褐色 5YR4/6 橙色 2.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	古代
13	17	15	遺物 包含層1	土師器	甕	-	[2.5]	-	やや 密	やや 良	にぶい橙色 7.5YR6/4 褐色 7.5YR4/3	回転ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ	焼成不十分
14	18	15	SP04	白磁	椀	17.4	6.9	(6.6)	密	良	胎土：淡黄色 2.5Y8/3 釉：浅黄色 2.5Y7/3	回転ナデ 口縁部ナデ 口縁部ナデ 体部~底部ヘラケズリ	内面と外面体部施釉 高台は露胎 V-4a 12C 中頃以降 SP18 および SX1 ②出土片と接合
15	18	15	SB01 (SP18)	白磁	椀	(17.0)	6.7	5.8	密	良	胎土：灰白色 2.5Y8/2 釉：灰白色 2.5Y7/1	内外面口縁部ナデ ヘラケズリ ヘラケズリ ケズリ出し高台	V-4a 12C 中頃以降
16	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	9.1	2.2	4.3	密	良	胎土：灰白色 10Y8/1 釉：灰白色 5Y7/1	回転ナデ ナデ 口縁部ナデ ヘラケズリ	内面施釉 外面施釉高台露胎 III-2 見込部分の釉を掻きとらないもの 重ね焼の最上部 畳付に重ね痕あり
17	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	9.0	1.9	2.6	密	良	胎土：灰黄色 2.5Y7/2 釉：灰白色 2.5Y7/1	ナデ 口縁部ナデ 体~底ヘラケズリ	内面に一條の沈線 内面蛇の目軸ハギ 底面露胎 他施釉 III-1 12C 中頃
18	18	15	SB01 (SP18)	白磁	椀	(9.0)	[1.9]	-	密	良	胎土：灰黄色 2.5Y7/2 釉：灰白色 2.5Y7/1	ナデ ナデ (口縁部) 以下ヘラ ケズリ	内面に一條の沈線 内面蛇の目軸ハギ 底面露胎 他施釉 高台欠損か III-1 12C 中頃
19	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	(8.8)	[1.5]	-	密	良	胎土：灰白色 2.5Y7/1 釉：灰白色 5Y7/1	回転ナデ後施釉 回転ナデ後施釉	
20	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	(10.0)	2.3	3.6	密	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：灰白色 5Y7/1	内外面口縁部ナデ 底面は小さく削り込み	内外面施釉 内面にヘラ描+花文状の櫛 描文を施す VII-1C 11C 後半~12C 前半 SX01 出土片と接合
21	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	(9.8)	2.5	3.6	密	良	胎土：灰白色 10YR8/2 釉：灰黄色 2.5Y7/2	ナデ 口縁部ナデ 体~底面ヘラケズリ	内外面施釉 底面露胎 VII-1a か SX01 出土片と接合
22	18	15	SB01 (SP18)	白磁	皿	-	[1.3]	-	密	良	胎土：灰白色 10YR8/2 釉：灰白色 5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	III-1 12C 中頃
23	18	16	SB01 (SP18)	土師器	甕	-	[10.7]	(14.8)	やや 密	やや 良	明褐色 7.5YR7/1 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	
24	18	16	SP17	青磁	椀	(16.2)	[7.6]	-	密	良	胎土：灰黄色 2.5Y7/2 釉：オリーブ黄色 Y6/3	内外面口縁部ナデ ヘラケズリ ヘラケズリ	内外面に片影蓮花文と櫛目文様を有す 内面施釉 龍泉窯系 I-3a 12C 中頃~後 半
25	18	16	SP25	白磁	椀	-	[2.9]	(6.8)	密	良	胎土：灰白色 2.5Y8/2 釉：灰黄色 2.5Y7/2	ヘラケズリ 斜にケズル 高台は'リケズリ出しが浅い	内面に一條の沈線 内面施釉 底は厚い 外面露胎 IV-1a 11C 後半~12C 前半
26	18	16	SP31	白磁	椀	-	[2.5]	-	密	良	胎土：灰白色 7.5Y7/1 釉：灰白色 7.5Y7/1	回転ヘラケズリ後ナデ後施釉 回転ヘラケズリ後ナデ後施釉	玉縁状口縁 IV-1a 2a
28	18	16	SP49	白磁	皿	(10.0)	[0.8]	-	密	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：灰白色 7.5Y7/1	内外面口縁部ナデ -	口縁は玉縁状をなす II-1b 高台あり 又は II-2 平底 11C 後半~12C 前半
29	18	16	SP49	陶器	壺	(11.2)	[2.0]	-	やや 密	良	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい橙色 7.5YR7/3	回転ナデ 回転ヘラケズリ? 後回転ナデ	外面沈線 1本 (回転ケズリ・ナデによ り生じたものか)
30	18	16	SP49	陶器	甕	(23.5)	[24.0]	-	密	良	褐色 10YR4/4 黒褐色 10YR3/1	回転ナデ 底部は指押え タタキ後ナデで当て具痕を消 す タタキ後ナデでタタキ目を 丁寧に消す	Y 次口縁 外面肩部~胴部上側は灰オ リーブ (2.5YG5/1)
31	18	16	SP35	土師器	杯	(12.8)	3.8	(4.8)	やや 密	良	にぶい褐色 7.5YR7/3 褐色 5YR7/6	回転ナデ 底部は指押え 回転ヘラケズリ後回転ナデ	底部回転糸切 (右回転か)
32	18	16	SP02	土師器	杯カ	-	[1.8]	(6.2)	やや 粗	やや 良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
33	18	16	SP37	土師器	鍋	(24.8)	[7.5]	-	密	良	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3	回転ヘラケズリ後ナデ 指頭圧痕有 ヨコハケ ナデ ヘラケズリ ナデ	両内外面に黒斑 (焼成時か)
34	18	16	SP37	土師器	皿	-	[1.9]	-	密	やや 良	褐色 5YR6/6 にぶい褐色 5YR6/3	回転ナデ後指ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転)
35	19	17	SX01①	土師器	皿	8.6	1.9	6.1	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
36	19	17	SX01①	土師器	皿	(7.7)	1.6	6.1	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ 調整不明	底部回転糸切
37	19	17	SX01②	土師器	皿	8.1	2.1	4.8	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
38	19	17	SX01②	土師器	皿	7.9	2.2	5.2	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 口縁垂む
39	19	17	SX01②	土師器	皿	7.5	1.8	4.9	やや 密	良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ ナデ	底部回転糸切
40	19	17	SX01②	土師器	皿	8.2	1.9	4.9	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 板目圧痕
41	19	17	SX01②	土師器	皿	8.3	1.8	4.8	やや 密	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 口縁垂む

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備 考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
42	19	17	SX01②	土師器	皿	8.9	1.9	6.1	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	ナデ 指押え (摩滅) 摩滅	底部回転糸切
43	19	17	SX01②	土師器	皿	7.7	2.0	5.1	やや 密	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
44	19	17	SX01②	土師器	皿	8.2	2.0	5.4	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 内面に煤付着
45	19	17	SX01②	土師器	皿	8.3	1.8	5.9	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 板目圧痕
46	19	17	SX01②	土師器	皿	4.8	1.8	4.8	やや 密	やや 良	にぶい橙色 7.5YR6/4 灰褐色 7.5YR5/2	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
47	19	17	SX01②	土師器	皿	(7.8)	1.9	5.4	やや 密	やや 良	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR6/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
48	19	17	SX01②	土師器	皿	8.3	1.8	5.9	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ
49	19	17	SX01②	土師器	皿	8.5	1.8	5.4	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
50	19	17	SX01②	土師器	皿	8.2	1.6	5.3	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
51	19	17	SX01②	土師器	皿	8.5	0.8	5.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
52	19	17	SX01②	土師器	皿	1.7	1.7	6.8	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ (摩滅) 回転ナデ	底部回転糸切
53	19	17	SX01②	土師器	皿	7.8	1.6	5.7	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
54	19	17	SX01②	土師器	皿	7.8	1.7	5.2	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
55	19	17	SX01②	土師器	皿	8.4	1.5	6.2	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
56	19	17	SX01②	土師器	皿	8.5	1.7	6.6	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	摩滅により不明 摩滅により不明	底部回転糸切
57	19	17	SX01②	土師器	皿	8.6	1.8	5.7	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
58	19	17	SX01②	土師器	皿	8.1	1.6	5.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	ナデ 摩滅により不明	底部回転糸切
59	19	17	SX01②	土師器	皿	7.7	1.7	4.7	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
60	19	17	SX01②	土師器	皿	8.2	1.6	5.5	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ ナデ (摩滅) 回転ナデ (摩滅)	底部回転糸切
61	19	17	SX01②	土師器	皿	8.1	1.4	6.05	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
62	19	17	SX01③	土師器	皿	7.9	1.8	4.9	密	良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/8	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	器壁が厚い
63	19	17	SX01③	土師器	皿	8.1	1.9	4.7	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
64	19	17	SX01③	土師器	皿	(8.0)	1.7	4.8	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	調整不明 調整不明	底部回転糸切
65	19	18	SX01③	土師器	皿	8.2	1.5	5.4	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
66	19	18	SX01③	土師器	皿	8.7	1.9	6.1	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
67	19	18	SX01③	土師器	皿	8.1	1.6	5.6	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	回転糸切り
68	19	18	SX01③	土師器	皿	8.0	1.7	5.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
69	19	18	SX01③	土師器	皿	7.6	1.5	4.9	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
70	19	18	SX01③	土師器	皿	(7.5)	1.4	5.2	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
71	19	18	SX01③	土師器	皿	(8.4)	1.8	6.0	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
72	19	18	SX01③	土師器	皿	(8.6)	2.0	(5.8)	やや 密	やや 良	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
73	19	18	SX01③	土師器	皿	8.5	1.7	5.0	やや 密	やや 良	橙色 2.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	指ナデ ナデ 指ナデ 指押え ナデ	二次焼成による黒色化 京都系 外面底部煤付着
74	19	18	SX01③	土師器	皿	8.5	1.7	4.0	やや 密	やや 良	にぶい橙色 2.5YR6/4 にぶい橙色 2.5YR6/4	指ナデ 指ナデ 指押え	二次焼成 京都系
75	19	-	SX01③	土師器	皿	-	[1.8]	-	密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	
76	19	18	SX01② 上層	土師器	柱状高 台付皿	(9.2)	4.0	4.0	密	やや 良	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/4	回転ナデ後ナデ 回転ナデか (器面剥離不明)	内面に有機物付着
77	19	18	SX01②	土師器	杯	14.3	4.5	6.4	やや 密	やや 良	にぶい褐色 7.5YR7/4 橙色 5YR7/6	回転ナデ (摩滅) 回転ナデ	底部回転糸切
78	19	18	SX01②	土師器	杯	14.7	4.4	6.0	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 内面に煤付着
79	19	18	SX01②	土師器	杯	(14.2)	3.9	6.2	やや 密	やや 良	にぶい褐色 7.5YR7/4 灰褐色 7.5YR5/2	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
80	19	18	SX01②	土師器	杯	15.3	4.1	6.1	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
81	19	18	SX01②	土師器	杯	(14.9)	4.6	7.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
82	19	18	SX01②	土師器	杯	(14.6)	5.0	6.8	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 板目圧痕
83	20	18	SX01②	土師器	杯	(14.7)	4.7	7.5	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
84	20	18	SX01②	土師器	杯	14.5	4.3	5.8	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/4	調整不明 調整不明	
85	20	18	SX01②	土師器	杯	14.9	4.5	(6.4)	やや 密	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	調整不明 調整不明	
86	20	18	SX01②	瓦器	椀	(14.8)	4.1	(6.9)	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	ナデ ナデ 指押え	
87	20	19	SX01④	土師器	杯	14.7	4.4	6.3	やや 密	やや 良	浅黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR8/6	調整不明 調整不明	
88	20	19	SX01④	土師器	杯	14.5	4.9	6.3	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 口縁垂む
89	20	19	SX01④	土師器	杯	(14.6)	3.7	7.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	ナデ 回転ナデ ナデ	底部回転糸切 胎土内の白色粘土により 形がいびつ
90	20	19	SX01③	土師器	杯	(14.7)	3.8	7.8	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR7/3	調整不明 調整不明	底部回転糸切 (摩滅)
91	20	19	SX01③	土師器	杯	(13.5)	3.6	5.9	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	ナデ ナデ	底部回転糸切 (摩滅)
92	20	19	SX01③	土師器	杯	14.3	4.2	6.7	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	調整不明 調整不明	底部回転ナデ (摩滅)
93	20	19	SX01③	土師器	杯	(15.7)	3.9	8.3	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ ナデ 調整不明	底部回転糸切 板目圧痕 (摩滅)
94	20	19	SX01③	土師器	杯	14.4	4.0	6.8	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	調整不明 調整不明	底部回転糸切
95	20	19	SX01③	土師器	杯	15.7	7.8	4.2	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
96	20	19	SX01③	土師器	杯	(14.1)	4.5	7.3	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
97	20	19	SX01③	土師器	杯	14.9	4.8	5.7	やや 密	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR7/6	調整不明 調整不明	底部回転糸切 (摩滅)
98	20	19	SX01③	土師器	杯	15.1	4.5	6.9	やや 密	やや 良	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR8/4	調整不明 調整不明	底部回転糸切 (摩滅)
99	20	19	SX01③	土師器	杯	(14.0)	4.9	6.1	やや 密	やや 良	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
100	20	19	SX01③	土師器	杯	15.3	4.5	6.4	やや 密	やや 良	にぶい橙 7.4YR7/4 にぶい橙 7.4YR7/4	調整不明 調整不明	
101	20	19	SX01③	土師器	杯	(14.8)	5.0	(6.6)	やや 密	やや 良	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR8/4	調整不明 調整不明	底部回転糸切 (摩滅)
102	20	19	SX01③ 下層	土師器	杯	(15.8)	5.6	(7.4)	やや 密	やや 良	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4	回転ナデ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切
103	21	20	SX01③	土師器	椀	15.6	5.2	5.5	やや 密	やや 良	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ ナデ ミガキ (工具 痕あり) 回転ナテ ナテ	底部貼付高台 内外面口縁の一部に煤付着
104	21	20	SX01④	土師器	椀	-	[2.8]	5.6	やや 密	やや 良	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/3	調整不明 ナデ	底部貼付高台
105	21	20	SX01④	土師器	椀	-	[2.1]	(5.6)	やや 密	やや 良	灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	調整不明 ナデ	底部貼付高台
106	21	20	SX01③	土師器	椀	-	[1.2]	(6.8)	やや 密	やや 良	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/3	ナデ 調整不明	底部貼付高台
107	21	20	SX01②	瓦器	椀	(16.8)	[4.0]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	ナデ ミガキ ナデ 指押え	
108	21	20	SX01③	瓦器	椀	(14.6)	4.8	(3.8)	密	やや 良	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/2	ナデ ミガキ ナデ 指押え	底部貼付高台
109	21	20	SX01③	瓦器	椀	(14.8)	3.7	4.5	やや 密	やや 良	明黄褐色 10YR7/6 明黄 褐色 10YR7/6	調整不明 指押え ナデ	底部貼付高台
110	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[3.4]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	ナデ ミガキ ナデ 指押え	
111	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[3.4]	-	やや 密	やや 良	灰白色 2.5Y7/1 黄灰色 2.5Y6/1	調整不明 ナデ 指押え	
112	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[1.4]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	ナデ ナデ	
113	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[2.7]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	調整不明 ナデ 指押え	
112	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[1.4]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	ナデ ナデ	
113	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[2.7]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	調整不明 ナデ 指押え	
114	21	20	SX01③	瓦器	皿	-	[2.7]	-	やや 密	良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y6/1	ミガキ ナデ 指押え	
115	21	20	SX01③	瓦器	椀	-	[3.1]	-	やや 密	やや 良	灰白色 2.5Y8/2 浅灰色 2.5Y7/3	ナデ ミガキ ナデ 指押え	
116	21	20	SX01③ 下層	瓦器	椀	-	[1.9]	-	やや 密	やや 良	にぶい黄橙色 10YR6/4 黄灰色 2.5Y4/1	ナデ ナデ 指押え	

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
117	21	20	SX01② 上層	瓦器	椀	-	[1.1]	4.3	密	良	黄灰色 2.5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2	ナミガキ ナデ	底部貼付高台
118	21	20	SX01③	瓦器	椀	-	[1.0]	(3.6)	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y4/1 暗灰黄色 2.5Y5/2	ナデか ナデ	底部貼付高台
119	21	20	SX01④ 上層	瓦器	椀	-	[1.7]	-	密	良	灰褐色 7.5YR7/2 灰白色 7.5YR8/1	回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ナデ後指押え	底部切り離し不明 張付高台 外部に炭素吸着 焼成時か?
120	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[1.0]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/1	調整不明 ナデ 指押え	底部貼付高台
121	21	20	SX01② 上層	瓦器	皿	(8.9)	1.7	4.7	密	良	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y5/1	ナデ ミガキ ナデ 指押え	
122	21	20	SX01②	瓦器	椀	(3.8)	[1.5]	-	密	やや 良	黄灰褐色 2.5Y4/1 黄灰褐色 2.5Y4/1	ナデ ミガキ ナデ	
123	21	20	SX01②	瓦器	椀	-	[1.3]	-	やや 密	やや 良	黄灰色 2.5Y4/1 灰黄褐色 10YR6/2	調整不明 ナデ	
124	21	20	SX01② 上層	瓦器	皿	-	[2.3]	-	密	良	黒褐色 10YR3/1 黒褐色 10YR3/1	回転ナデ後指押え 回転ナデ後指押え	内外面とも炭素吸着 口縁端部にかけても指痕有す
125	21	20	SX01③	瓦器	皿	-	1.7	-	密	良	灰色 N4/0 にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ ナデ 指押え	
126	21	20	SX01③	白磁	椀	(17.4)	6.5	(6.0)	密	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	ケズリ出し高台 内外面施釉
127	21	20	SX01③ 下層	白磁	椀	(15.6)	[3.9]	-	密	良	灰白色 2.5Y7/1 灰黄色 2.5Y7/2	回転ヘラケズリ 回転ナデ後施釉 回転ヘラケズリ 回転ナデ後施釉	外面にヘラケズリの痕が縦方向に残る
128	21	20	SX01③	白磁	椀	-	[4.3]	-	密	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面施釉
129	21	20	SX01③	白磁	椀	- 推 16.8	[4.0]	-	密	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面接釉 口唇釉ハギ
130	21	20	SX01②	白磁	椀	-	[2.8]	-	密	良	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	回転ヘラケズリ後回転ナデ後 施釉 回転ヘラケズリ後回転ナデ後 施釉	外面に回転ヘラケズリの痕跡が目立つ 椀 N-1ab OY2ab
131	21	20	SX01③ 下層	白磁	皿	(8.6)	[2.2]	-	密	良	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	回転ヘラケズリ 回転ナデ後施釉 回転ヘラケズリ 回転ナデ後施釉	
132	21	20	SX01② 上層	白磁	皿	(10.0)	[2.0]	-	密	良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 5Y7/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ 底部ヘラケズリ	内外面施釉 内面見込 外底面ともに釉ハギ IV - 1a 12C 前半
133	21	20	SX01②	青磁	椀	-	[2.8]	-	密	良	灰白色 2.5Y8/1 灰オリーブ色 5Y6/2	内外面口縁部ナデ 内面口縁下 に1条の沈線を有す	体部内外面無文施釉か 龍泉窯系 I 類 - 1a 12C 中～後半
134	21	20	SX01②	青磁	椀	-	[1.9]	-	密	良	灰色 5Y6/1 灰オリーブ色 7.5Y5/3	回転ナデ 回転ナデ ヘラケズリ	内面に1条の沈線 外面口縁に進弁 (間 隔狭い) を有す 初期龍泉窯系 12C 前 半 青磁 0 類
135	21	20	SX01⑤	青磁	皿	-	[1.5]	-	密	良	灰白色 5Y7/1 オリーブ黄色 5Y6/3	回転ナデ 回転ナデ	内外面施釉
136	21	20	SX01⑤	青磁	皿	(10.0)	2.3	(6.4)	密	良	浅黄色 2.5Y7/3 黄褐色 10YR5/6	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	見込に花文を有す II-2b 小型
137	21	20	SX01④ 上層	陶器	椀	(11.6)	[5.1]	-	やや 密	良	浅黄色 2.5Y7/3 黒色 10YR1.7/1	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	内外面施釉 高台欠損 (無釉) 天目茶碗
138	21	20	SX01③	瓦質 土器	鉢	-	[5.2]	-	密	良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/3	ナデ ナデ	
139	22	21	SK08	瓦	丸瓦	-	-	-	密	良	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1	-	右三巴文 珠文
140	22	21	SK08	白磁	紅皿	3.9	1.2	1.5	密	良	明緑灰色 7.5GY7/1 灰白色 5Y7/1	型抜き後ナデ 外型成形 菊花様	
141	22	21	SX02	白磁	紅皿	(3.8)	[1.2]	-	密	良	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1	型抜き後ナデか 外型成形 菊花様	
142	22	21	SX02	白磁	玩具 (椀)	2.3	1.3	0.8	密	良	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1	型抜 型抜	羽子板と羽根の文様有す
143	22	21	SX02	瓦質 土器	湯釜	(9.8)	14.2	(9.4)	やや 密	良	灰黄褐色 10YR5/2 上部黒褐色 10YR3/2 下部黒 10YR2/1	回転ナデ 指押え 上部は型抜き後は調整なし 下部は回転ナデ 指押え	外面上部に型の文様有す 型抜き後内面は回しながら手で調整 口縁部は上下を貼り合せた後に取り付 け
144	22	21	SX02	陶器	播鉢	(22.0)	12.7	(9.6)	密	良	口縁：オリーブ黄 7.5YR6/3 体部：灰オリーブ 7.5Y6/2	回転ヘラケズリ後卸目 回転ヘラケズリ後施釉	内面に有機物付着 2 か所目跡有す 卸目：にぶい赤褐色 5YR4/3
145	22	21	SX02	陶器	甕	-	[8.5]	-	やや 密	良	暗赤褐色 10R3/2 暗赤灰色	回転ナデ 回転ナデ	備前焼
146	22	21	SX02	陶器	甕	-	[10.1]	-	やや 密	良	赤灰色 2.5YR4/1 暗赤褐色 2.5YR3/2	回転ヘラナデ 回転ヘラナデ	底部の一部に付着物あり 備前焼
147	22	21	SX02	土師器	甕	(60.0)	[27.5]	-	やや 密	良	橙色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR4/4	ヨコナデ ハケメ 当て具痕 ヨコナデハケメ	
148	22	21	SX02	土師器	甕	-	[7.7]	(16.8)	やや 密	良	橙色 7.5YR6/6 にぶい橙色 5YR6/4	ヨコナデ ハケメ 指押え ヨコナデ 下部ヘラミガキか	
149	22	21	SX02	土師器	甕	(72.0)	[20.0]	-	やや 密	良	橙色 7.5YR7/6 明赤褐色 5YR5/8	ヨコナデ ハケメ 当具痕 ヨコナデ ハケメ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
158	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	(16.2)	[5.1]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰白色 5Y7/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後回転ヘラケズリ	内外面施釉 内面口縁下に1条の沈線 口縁部輪花 内面に短い櫛目文を有す V-4b
159	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	(16.2)	[4.6]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰白色 5Y7/1	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	内外面施釉 V-2a 12C 前半
160	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[3.8]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰黄色 25Y6/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	内面施釉 外面下位露胎 V-2a 12C 前半
161	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[3.2]	-	密	良	灰白色 25Y8/1 灰白色 25Y7/1	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	V-1a 12C 前半
162	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[1.8]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰黄色 25Y6/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	内外面接釉 V-2a 12C 前半
163	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[2.4]	-	密	良	灰色 5Y6/1 灰オリーブ色 5Y6/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	内外面施釉 口縁部直線的に伸びる V-4a
164	24	21	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[2.1]	-	密	良	灰白色 25Y8/1 灰白色 10Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面施釉 Ⅳ 4 12C 前中～後
165	24	-	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[3.1]	(6.2)	密	良	灰白色 25Y7/1 灰白色 5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面施釉 IV-1a 12C 前半
166	24	-	遺物 包含層1	白磁	椀	-	[3.2]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰黄色 25Y7/2	回転ナデ 回転ナデ後回転ヘラケズリ	ケズリ出し高台 内外面施釉 内底面蛇 の目軸ハギ 外面底部露胎 V-1～4
167	24	-	遺物 包含層1	青磁	皿	10.1	[2.0]	-	密	良	灰黄色 25Y6/2 にぶい黄色 25Y6/3	回転ナデ 口縁回転ナデ 底部ヘラケズリ	龍泉窯系 I -2a (小型) 12C 中～後半
168	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.0	15	5.8	密	良	橙色 5YR6/8 にぶい橙色 5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 器壁厚く丁寧な仕上
169	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.0	1.5	4.8	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切後ナデ (右回転)
170	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.1	1.6	5.8	密	良	にぶい橙色 5YR7/4 橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	器面剥落のため切り離し法不明
171	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.5	2.4	4.9	密	良	黄橙色 7.5YR7/8 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 焼成周りの黒斑有す 回転ナデ	底部回転糸切 丁寧なナデ
172	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.0	1.4	4.1	密	良	浅黄橙色 7.5YR8/4 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 中央部にヘラの痕跡有 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 板目圧痕有す
173	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.2	1.4	4.9	密	良	浅黄橙色 7.5YR8/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 (方向不明) 後ナデか
174	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.4	1.4	5.2	やや密	良	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	中央に指圧痕 他回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 切り離し時に凸部の修正 板目圧痕有す
175	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.6	1.3	5.4	密	良	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	回転ナデ 底部指ナデ指押え 回転ナデ 底部との境に糸切痕	底部回転糸切 (左回転か)
176	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.6	1.7	4.7	やや密	やや良	灰白色 10YR8/1 灰白色 7.5YR8/2	回転ナデ 中央部指押え 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 板目圧痕有す
177	25	22	遺物 包含層1	土師器	皿	8.4	1.7	4.1	やや密	やや良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	回転ナデ 黒斑有す 回転ナデ 黒斑有す	底部切り離しはヘラか 高台部厚く切り離し法不明
178	25	22	遺物 包含層1	土師器	高台付 皿	8.7	4.4	5.2	やや密	良	褐色 2.5YR6/6 浅褐色 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部糸切りか 器面摩擦のため調整不明瞭
179	25	22	遺物 包含層1	土師器	高台付 皿	(9.6)	[4.0]	4.7	密	良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8	ヘラケズリ後回転ナデ 回転ナ デ 高台部に指痕残る	底部回転糸切 (右回転)
180	25	22	遺物 包含層1	土師器	高台付 皿	(5.9)	[3.5]	4.9	やや密	良	褐色 5YR6/8 にぶい褐色 7.5YR7/4	回転ナデ後指押え 回転ナデ	底部回転糸切後ナデ (右回転)
181	25	22	遺物 包含層1	土師器	高台付 皿	(5.8)	[4.2]	5.7	密	良	にぶい褐色 7.5YR7/4 褐色 5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切後ナデ (右回転) 切り離し時の凹線有
182	25	-	遺物 包含層1	土師器	高台付 皿	-	-	(7.9)	密	良	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転)
183	25	22	遺物 包含層1	土師器	杯	(14.6)	4.5	6.2	密	良	褐色 5YR7/8 にぶい褐色 5YR7/4	内面底部回転ヘラケズリ後指 押え 内面上位～外面上位回転 ナデ 下部回転ヘラケズリ後回 転ナデ	底部回転糸切後ナデ (右回転) 板目圧 痕有す
184	25	22	遺物 包含層1	土師器	杯	13.5	4.2	6.1	やや密	良	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6	ヘラケズリ後回転ナデ 指押え 回転ナデ	底部回転糸切 (右回転)
185	25	22	遺物 包含層1	土師器	杯	15.0	4.8	6.8	やや密	良	褐色 2.5YR6/6 褐色 2.5YR6/6	回転ナデ後ナデ 底部は静止ナ デ回転ヘラケズリ後回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 板目圧痕有す
186	25	22	遺物 包含層1	土師器	杯	13.8	4.3	5.9	密	良	褐色 5YR7/8 褐色 5YR7/8	回転ヘラケズリ後ナデ 指痕が 残る 回転ヘラケズリ?後ナデ	底部回転糸切 (左回転か)
187	25	-	遺物 包含層1	土師器	杯	(15.6)	4.2	6.6	やや密	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/3	回転ナデか 口縁～中位回転ケ ズリ後ナデ 以下回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 後ナデ
188	25	-	遺物 包含層1	土師器	杯	(14.8)	3.5	6.2	密	良	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	回転ナデ 内面底部は指押え? 口縁～中部回転ヘラケズリ 以下回転ナデ	底部回転糸切 (右回転) 器面摩擦により調整不明瞭
189	25	22	遺物 包含層1	土師器	椀	(16.4)	5.2	6.4	やや密	良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR7/1	回転ナデ後 指押え ナデの前 にヘラケズリか 回転ナデ (右 方向)	底部回転糸切 (方向不明) 底部貼付高 台 内面に焼成時の重ね痕有す
190	25	22	遺物 包含層1	土師器	椀	(16.5)	5.2	5.8	やや密	やや良	灰白色 10YR7/1 灰白色 10YR8/2	回転ナデか ヘラケズリ 指押 え 回転ナデか	底部切り離しは不明 貼付高台
191	25	-	遺物 包含層1	土師器	椀	(16.0)	5.5	(7.0)	密	良	浅褐色 10YR8/3 浅褐色 10YR8/3	回転ナデ 口縁～中部回転ケズリ後ナデ 中部～底部ナデ後ヘラミガキ	底部貼付高台 底部中央欠損部の断面を二次調整
193	26	-	遺構外	白磁	椀	-	[3.6]	-	密	良	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後回転ヘラケズリ	内外面接釉 内面口縁下に1条の沈線 口縁部輪花 内面に短い櫛目文を有す V-4D
194	26	-	遺構外	白磁	椀	-	[2.7]	-	密	良	灰白色 25Y7/1 灰白色 5Y7/1	内外面口縁部ナデ 以下ヘラケズリ	V-2a

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備 考
						口径 [復元値]	器高 [残存値]	底径 [復元値]					
195	26	-	遺構外	白磁	椀	-	[4.2]	-	密	良	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 5Y7/1	回転ナデ後ナデ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	内外面施軸 内面口縁下に1条の沈線を有す V-4d
196	26	-	遺構外	土師器	杯	-	[1.5]	6.1	粗	不良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底面回転糸切
197	26	-	遺構外	土師器	高台付皿	-	[3.5]	8.4	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	皿部 (杯) ナデ	回転ナデ 底面回転糸切後ナデ
198	26	-	遺構外	瓦質土器	足鍋	-	[10.2]	-	密	良	灰白色 10YR8/2 ※煤 黒色 10YR2/1	- 指押え P142 指頭圧痕有す N141 二次的被熱による煤付着	鍋底部への貼り付けが割がれた状態 付着面には鍋のヘラケズリの痕有す
199	26	-	遺構外	瓦質土器	鍋	-	[4.0]	-	やや密	やや良	灰白色 2.5Y8/1	- 手握ね	獣足
200	26	-	遺構外	瓦質土器	鍋	-	[2.5]	-	やや密	やや良	にぶい橙色 5YR7/4	- 手握ね	獣足

第2表 出土石器類観察一覧表

No.	挿 図	図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備 考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
1	16	15	SP18	石鏃	2	1.85	4.6	0.9	安山岩か	一部破損 風化 両面加工 流入か
2	16	15	遺物包含層1	石斧 (打製)	9.0	5.2	1.0	78	砂質片岩か	-
3	16	15	遺物包含層1	石斧 (磨製)	15.8	6.0	3.25	442	泥質片岩か	未成品もしくは欠損品
4	16	15	SX01 ②	磨石か	8.8	7.2	5.7	482	花崗岩	使用面は4面か 敲打痕有り 流入か
5	16	15	遺構外	敲石か	11.0	6.5	3.4	347	花崗岩か	使用痕有り 擦痕有す (使用によるものか)
27	18	16	SP31	石鍋	-	-	(底) 1.8	172	滑石	大刀、小刀によるノミ削り

第3表 鉄鏃および鍛冶関連遺物観察一覧表

No.	挿 図	図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備 考
					最大長 [残存値]	最大幅 [残存値]	最大厚 [残存値]		
150	23	21	SK09	鉄滓	[2.2]	[2.7]	[1.8]	17.2	椀形滓か
151	23	21	SX01 ③	鉄滓	8.0	6.5	5.2	254	
152	23	21	SX01 ③下層	鉄滓	4.3	7.3	2.3	96	
153	23	21	SX01 ②	鉄滓	3.3	4.4	2.5	48.0	
154	23	21	SX01 ②	鉄滓	3.5	3.5	1.9	19.7	
155	23	21	SX01 ②	鉄滓	1.7	2.6	1.5	6.9	
156	23	21	SX01 ②	鉄滓	2.6	3.5	2.7	21.1	
157	23	21	SX01 ②	鉄滓	2.9	3.4	2.0	19.2	
192	25	22	遺物包含層1	鉄鏃	8.9	4.9	-	22.2	短頸雁又式 鏃身先端の一方を欠損 頸部：厚 0.55cm 鏃身部：幅 1.2cm 厚 0.7cm / 中空

IV 自然科学分析

1 堀の内遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定、樹種・種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堀の内遺跡（山口県美祢市秋芳町岩永本郷所在）は、本郷盆地内の南域に位置し、発掘調査の結果、弥生時代、平安時代末～鎌倉時代初頭を中心とした遺構や遺物が検出されている。

本分析調査では、主に平安時代末～鎌倉時代初頭とされる遺構より出土した炭化材や炭化種実を対象として、樹種同定、種実同定、放射性炭素年代測定を実施し、年代観や当時の植生、植物利用に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、各遺構より出土した炭化物 16 点（試料 1～16）である。各試料の詳細は、同定結果とともに第 4、5 表に示す。炭化物は 1 点あたり 1～複数個の炭化材や炭化種実が含まれる。放射性炭素年代測定は、各試料中で最も大きな破片を対象に実施する。炭化材の樹種同定は、試料 1～4、6、8～16 の他、試料 7 を対象に実施する。炭化種実同定は、試料 5、7 を対象に実施する。さらに、複数個含まれる試料は、年代測定試料以外に関しても、可能なできる限り同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 炭化材同定

炭化材同定は、年代測定の試料調整の際に削り落とした部分を用いる。木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(2) 炭化種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。同定は、現生標本を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数と重量を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付し、保存状態が良好な炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、試料 5 のクリの一部 0.20g と、試料 7 のクリの一部 0.24g を年代測定に供する。残りの炭化種実は、容器に入れて返却する。

(3) 放射性炭素年代測定

炭化材は実体顕微鏡で観察し、周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg 程度に調整する。炭化種実の一部を割って試料を採取後、表面を削って付着物を取り除き、分析用試料とする。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶

成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。しかし、試料が脆弱な場合、炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため、試料によってはアルカリの濃度を薄めて処理を行う（AaA と記載）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

3. 結果

（1）炭化材同定

結果を第 4 表に示す。針葉樹 2 分類群（マツ属複維管束亜属、カヤ）、広葉樹 6 分類群（コナラ亜属クヌギ節、アカガシ亜属、スダジイ、ケヤキ、シキミ、サカキ）が同定された。試料中の炭化材は概ね単一分類群（元々 1 個体？）であるが、試料 6 は 2 分類群（マツ属複維管束亜属、不明広葉樹）、試料 7 は炭化種実と炭化材が確認された。なお、試料 4 は広葉樹と考えられるが、組織が崩れているため不明広葉樹、試料 14 は木材組織が確認されず不明炭化物とした。以下、各分類群の解剖学的特徴を述べる。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15 細胞高。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪幅全体も狭い。仮道管内壁に対をなしたらせん肥厚がみられる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列で、細胞高が低い（4～5 細胞高）ものが多い。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Quercus sect. Cerris）ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1～3 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界

第4表 樹種同定結果

試料番号	遺構名等	樹種	備考	出土遺物等からの推定時期
試料1	SI01	スダジイ	径7m弱の円形堅穴建物の床面直上。 焼失家屋か？	堅穴建物からは、弥生土器片（後期）が数点出土。
試料2	SI01	サカキ		
試料3	SX01 ④上層	ケヤキ？	廃棄土坑上層	平安末～鎌倉前半
試料4	SX01 ③	不明広葉樹	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料5	SX01 ②	(種実クリ5個、トチノキ1個)	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料6	SX01 ②	不明広葉樹 マツ属複雑管束亜属	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料7	SX01 ④	(種実クリ1個) シキミ	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料8	SX01 ④	カヤ	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料9	SX01 ①	カヤ	廃棄土坑	平安末～鎌倉初頭
試料10	SX01 ③下層	カヤ	廃棄土坑下層	平安末～鎌倉初頭
試料11	SP04 (SB01)	シキミ	掘立柱建物 SB01 構成柱穴	鎌倉初頭～前半
試料12	SP18 (SB01)	カヤ	掘立柱建物 SB01 構成柱穴	鎌倉初頭～前半
試料13	SP34	ケヤキ	SI01 主柱穴	土師器片が1点のみ。 後世の流込みと判断。
試料14	SP42	不明炭化物	SB01 構成柱穴の延長線上にある柱穴	鎌倉初頭～前半
試料15	遺物包含層1	コナラ亜属クスギ節	北壁 I 付近包含層 (下層)	平安末～鎌倉前半
試料16	遺物包含層1	アカガシ亜属	北壁 I 付近包含層 (下層)	平安末～鎌倉前半

に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、道管の分布密度は高く、年輪界近くではやや密度が低くなる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

第5表 種実同定結果

試料番号	遺構	種名	部位	状態	個数	No.	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	大きさ指数	図版番号	備考
試料5	SX01 ②	クリ	子葉	完形 炭化	1	-	0.47	16.53	18.49	-	25.62	3.4	一部 0.20g を年代測定
				完形 炭化	1	-	0.79	11.75	14.13	9.05	19.88	2	
				完形未満 炭化	1	-	0.31	13.05	11.50+	5.65+	-	5	
				破片 炭化	2	1	0.33	14.16	13.10+	5.44+	-	6	
					-	2	0.29	14.27+	-	-	-	7	
試料7	SX01 ④	クリ	トチノキ 子葉	破片 炭化	1	-	0.39	14.22+	11.00+	-	-	11	一部 0.24g を年代測定
			子葉	完形 炭化	1	-	1.01	14.65	15.23	8.09	22.52	8-10	

注) 計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値にプラス「+」で示す。

注) クリの大きさ指数 (吉川, 2011) = $\sqrt{((炭化子葉の長さ(高さ) + 1.85) / 0.76) \times 幅「(炭化子葉の幅 + 4.86) / 0.86」}$

・サカキ (Cleyera japonica Thunb.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

(2) 炭化種実同定

結果を第5表に示す。落葉広葉樹で高木になるクリの子葉6個と、トチノキの子葉1個に同定された。炭化種実の保存状態は、炭化や破損等により不良である。以下、形態的特徴等を述べる。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

子葉は炭化しており黒色、三角状広卵形で頂部は尖り、基部は切形、一側面は偏平で反対面は丸みがある。子葉は硬く緻密で、表面には種皮(渋皮)の圧痕の縦筋が粗く波打つ。2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた面は平滑で、正中線はやや窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。

長さ(高さ)と幅が完全な3個の計測値から「クリの大きさ指数($\sqrt{((炭化子葉の高さ + 1.85) / 0.76) \times ((炭化子葉の幅 + 4.86) / 0.86)}$ 」(吉川, 2011)を求めた結果、SK103(試料5)が長さ(高さ)16.53mm、幅18.49mm、大きさ指数25.62(図版番号3)と、長さ(高さ)11.75mm、幅14.13mm、大きさ指数19.88(図版番号2)、SK104(試料7)が長さ(高さ)14.65mm、幅15.23mm、大きさ指数22.52(図版番号8)であった。いずれも小型である。

・トチノキ (Aesculus turbinata Blume) トチノキ科トチノキ属

子葉は炭化しており黒色、完形ならば径1.5～3cmの偏球体。出土子葉は中心から放射状に不規則に割れ、残存径11.00mmを測る。子葉はクリよりも柔らかく粗い(図版番号11)。

(3) 放射性炭素年代測定

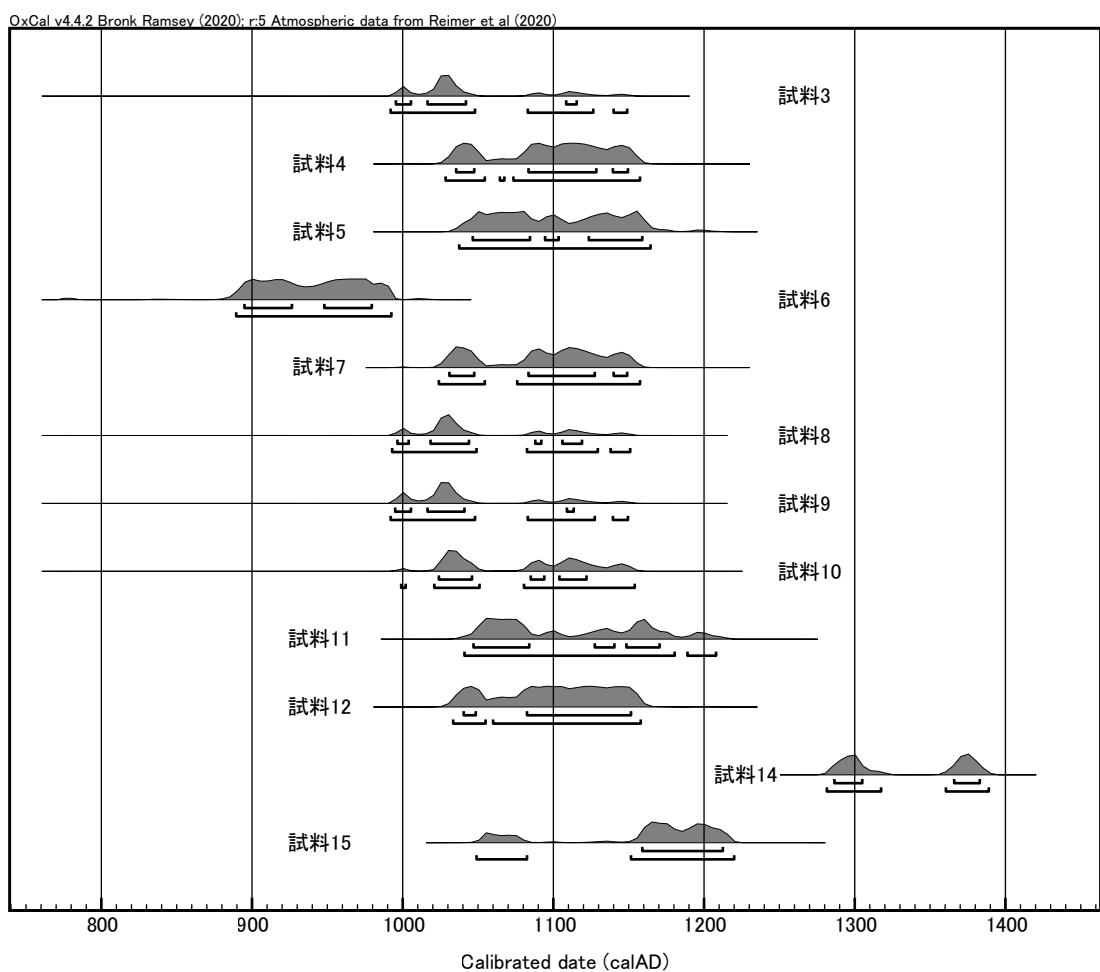
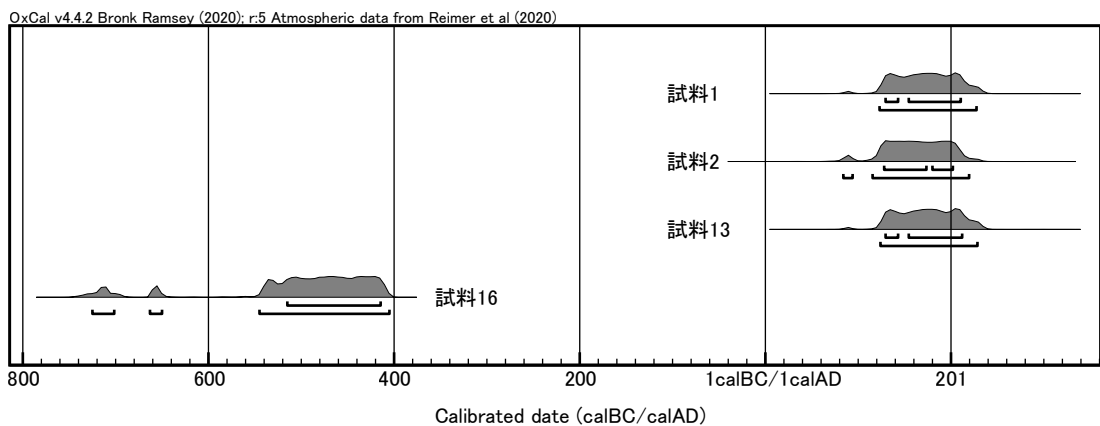
結果を第6表に示す。ほとんどの試料は定法での分析処理が可能であったが、一部は保存状態が悪く、損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄くした(表3)。いずれも測定に必要なグラフアイトは得られている。

同位体補正を行った値は、試料1が1870 ± 20BP、試料2が1885 ± 20BP、試料3が1000 ± 20BP、試料4が960 ± 20BP、試料5が930 ± 20BP、試料6が1115 ± 25BP、試料7が970 ± 20BP、試料8が995 ± 20BP、試料9が1000 ± 20BP、試料10が985 ± 20BP、試料11が915 ± 20BP、試料12が950 ± 20BP、試料13が1870 ± 20BP、試料14が665 ± 20BP、試料15が890 ± 20BP、試料16が2420 ± 20BPである。

第6表 放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺構等	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代												Code No.		
						年代値														確率 %
						σ	cal AD	130	-	cal AD	144	1820	-	1807	calBP	13.3				
試料 1	SI01	炭化材 スダジイ	AAA (1M)	1870 \pm 20 (1870 \pm 20)	-27.74 \pm 0.31	σ	cal AD	155	-	cal AD	211	1795	-	1739	calBP	54.9	YU- 12211	pal- 12948		
						2σ	cal AD	124	-	cal AD	228	1827	-	1722	calBP	95.4				
						cal AD	129	-	cal AD	174	1822	-	1776	calBP	46.1					
試料 2	SI01	炭化材 サカキ	AAA (1M)	1885 \pm 20 (1884 \pm 20)	-29.22 \pm 0.24	σ	cal AD	181	-	cal AD	203	1770	-	1748	calBP	22.1	YU- 12212	pal- 12949		
						2σ	cal AD	85	-	cal AD	95	1866	-	1856	calBP	2.5				
						cal AD	116	-	cal AD	220	1834	-	1730	calBP	93.0					
試料 3	SX01 ④ 上層	炭化材 ケヤキ?	AaA (0.01M)	1000 \pm 20 (1000 \pm 20)	-24.98 \pm 0.56	σ	cal AD	995	-	cal AD	1005	955	-	945	calBP	11.1	YU- 12213	pal- 12950		
						cal AD	1016	-	cal AD	1042	934	-	909	calBP	52.4					
						cal AD	1108	-	cal AD	1115	842	-	835	calBP	4.8					
試料 4	SX01 ③	炭化材 広葉樹	AaA (0.01M)	960 \pm 20 (959 \pm 20)	-24.54 \pm 0.39	σ	cal AD	992	-	cal AD	1048	959	-	903	calBP	74.8	YU- 12214	pal- 12951		
						2σ	cal AD	1083	-	cal AD	1126	868	-	824	calBP	18.2				
						cal AD	1140	-	cal AD	1149	811	-	802	calBP	2.5					
試料 5	SX01 ②	炭化種実 クリ	AAA (1M)	930 \pm 20 (930 \pm 20)	-29.42 \pm 0.49	σ	cal AD	1035	-	cal AD	1047	915	-	903	calBP	12.4	YU- 12215	pal- 12952		
						2σ	cal AD	1083	-	cal AD	1128	867	-	822	calBP	46.4				
						cal AD	1139	-	cal AD	1149	811	-	801	calBP	9.5					
試料 6	SX01 ②	炭化材 マツ属	AAA (1M)	1115 \pm 25 (1113 \pm 24)	-27.80 \pm 0.69	σ	cal AD	1028	-	cal AD	1054	922	-	896	calBP	20.3	YU- 12216	pal- 12953		
						2σ	cal AD	1064	-	cal AD	1067	886	-	883	calBP	0.8				
						cal AD	1073	-	cal AD	1157	877	-	793	calBP	74.3					
試料 7	SX01 ④	炭化種実 クリ	AAA (1M)	970 \pm 20 (968 \pm 21)	-27.76 \pm 0.62	σ	cal AD	1046	-	cal AD	1084	904	-	866	calBP	33.4	YU- 12217	pal- 12954		
						2σ	cal AD	1094	-	cal AD	1103	856	-	847	calBP	6.6				
						cal AD	1123	-	cal AD	1159	827	-	792	calBP	28.3					
試料 8	SX01 ④	炭化材 カヤ	AAA (1M)	995 \pm 20 (996 \pm 20)	-24.14 \pm 0.49	σ	cal AD	1037	-	cal AD	1164	913	-	786	calBP	95.4	YU- 12218	pal- 12955		
						2σ	cal AD	895	-	cal AD	926	1056	-	1024	calBP	33.5				
						cal AD	948	-	cal AD	979	1003	-	971	calBP	34.7					
試料 9	SX01 ①	炭化材 カヤ	AaA (0.01M)	1000 \pm 20 (1001 \pm 21)	-24.97 \pm 0.57	σ	cal AD	889	-	cal AD	992	1061	-	958	calBP	95.4	YU- 12219	pal- 12956		
						2σ	cal AD	1031	-	cal AD	1047	920	-	903	calBP	17.9				
						cal AD	1083	-	cal AD	1127	867	-	823	calBP	42.7					
試料 10	SX01 ③ 下層	炭化材 カヤ	AAA (1M)	985 \pm 20 (983 \pm 20)	-27.23 \pm 0.46	σ	cal AD	1140	-	cal AD	1149	811	-	802	calBP	7.7	YU- 12220	pal- 12957		
						2σ	cal AD	1024	-	cal AD	1054	927	-	896	calBP	25.3				
						cal AD	1076	-	cal AD	1157	875	-	793	calBP	70.2					
試料 11	SP04 (SB01)	炭化材 シキミ	AAA (1M)	915 \pm 20 (914 \pm 20)	-28.52 \pm 0.47	σ	cal AD	996	-	cal AD	1004	954	-	947	calBP	6.5	YU- 12221	pal- 12958		
						2σ	cal AD	1018	-	cal AD	1044	932	-	907	calBP	49.0				
						cal AD	1088	-	cal AD	1092	863	-	859	calBP	2.6					
試料 12	SP18 (SB01)	炭化材 カヤ	AAA (1M)	950 \pm 20 (949 \pm 20)	-25.77 \pm 0.34	σ	cal AD	1106	-	cal AD	1119	845	-	832	calBP	10.1	YU- 12222	pal- 12959		
						2σ	cal AD	993	-	cal AD	1049	958	-	902	calBP	65.5				
						cal AD	1082	-	cal AD	1129	868	-	821	calBP	25.5					
試料 13	SP34	炭化材 ケヤキ	AAA (1M)	1870 \pm 20 (1868 \pm 20)	-30.89 \pm 0.30	σ	cal AD	1138	-	cal AD	1151	813	-	800	calBP	4.4	YU- 12223	pal- 12960		
						2σ	cal AD	995	-	cal AD	1005	956	-	945	calBP	12.8				
						cal AD	1016	-	cal AD	1041	934	-	910	calBP	52.1					
試料 14	SP42	炭化物	AaA (0.01M)	665 \pm 20 (667 \pm 20)	-28.82 \pm 0.34	σ	cal AD	1109	-	cal AD	1113	842	-	837	calBP	3.3	YU- 12224	pal- 12961		
						2σ	cal AD	992	-	cal AD	1048	959	-	903	calBP	74.1				
						cal AD	1083	-	cal AD	1127	868	-	823	calBP	18.6					
試料 15	遺物 包含層 1	炭化材 クスギ節	AAA (1M)	890 \pm 20 (889 \pm 20)	-31.61 \pm 0.26	σ	cal AD	1139	-	cal AD	1149	811	-	801	calBP	2.7	YU- 12225	pal- 12962		
						2σ	cal AD	1024	-	cal AD	1046	927	-	905	calBP	37.1				
						cal AD	1085	-	cal AD	1094	866	-	857	calBP	9.5					
試料 16	遺物 包含層 1	炭化材 アカガシ 重属	AAA (1M)	2420 \pm 20 (2419 \pm 20)	-36.92 \pm 0.23	σ	cal AD	1104	-	cal AD	1122	847	-	829	calBP	21.6	YU- 12226	pal- 12963		
						2σ	cal AD	999	-	cal AD	1002	952	-	949	calBP	0.8				
						cal AD	1021	-	cal AD	1051	930	-	900	calBP	38.9					

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAはアルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、IntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である



第 27 図 暦年較正結果

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al.,2020) を用いる。2 σ の値は、試料1がcalAD124～228、試料2がcalAD85～220、試料3がcalAD992～1149、試料4がcalAD1028～1157、試料5がcalAD1037～1164、試料6がcalAD889～992、試料7がcalAD1024～1157、試料8がcalAD993～1151、

試料 9 が calAD992 ~ 1149、試料 10 が calAD999 ~ 1154、試料 11 が calAD1041 ~ 1208、試料 12 が calAD1033 ~ 1158、試料 13 が calAD125 ~ 229、試料 14 が calAD1281 ~ 1389、試料 15 が calAD1049 ~ 1220、試料 16 が calBC726 ~ 406 である。

4. 考察

暦年代を第 27 図に示す。発掘調査所見において、出土遺物との関係から推定される遺構の年代は、SI01（試料 1、2）が弥生時代、SP34（試料 13）が不明、他は平安時代末～鎌倉時代と考えられている。今回得られた暦年較正年代をみると、SI01（試料 1、2）は 2 世紀頃を示し、調査所見の年代観と調和的である。SP34（試料 13）も同様の年代と考えられることから、弥生時代の遺構である可能性と、出土遺物（土師器）が後代の攪乱により落ち込んだ可能性がある。その他、遺物包含層 1（試料 16）は弥生時代（紀元前 5 世紀頃）を示したことから、平安時代～鎌倉時代の包含層に古い炭化物が混入した可能性がある。

他の試料の年代値は、概ね古代～中世の年代値を示している。多くの試料が 11 世紀～12 世紀を中心とする年代値を示し、調査所見の年代観と調和的である。SX01 ②（試料 6）はやや古く 10 世紀の年代を示すが、樹齢が長い針葉樹材（マツ属）であることから、樹芯に近い部分を測定したことによる影響（古木効果）を受けた可能性がある。一方、SP42（試料 14）は 14 世紀頃とやや新しい年代を示し、後代から混入した可能性がある。

遺構の年代観および年代測定値より、同定を実施した炭化材は、弥生時代と平安時代末～鎌倉時代に分けられる。弥生時代の炭化材は少なく、広葉樹のアカガシ亜属、スダジイ、ケヤキ、サカキに同定された。遺物包含層 1（試料 16）のアカガシ亜属、SI01 のスダジイ、サカキは常緑広葉樹林の主要構成種であり、現在の遺跡周辺の自然度の高い場所にも生育する。SP34 のケヤキは林縁や河川沿いなどのやや湿った明るい林地を好む落葉高木であり、遺跡の立地環境からみても、近くに生育可能な樹種である。いずれも小型の炭化材であることから用途等は不明であるが、遺跡周辺で得やすい樹木であり、当時利用されていたと考えられる。この中で、アカガシ亜属、スダジイ、ケヤキに関しては、重堅で大きな材を得やすいことから、住居の構造材をはじめ、様々な用途に利用可能である。一方、サカキは大木になりにくいことから、木材としての用途は多くない。伊東・山田編（2012）の出土木製品用材データベースをみると、県内の縄文時代末～弥生時代の出土材は、炭化材、杭材、自然木など用途は様々であるが、アカガシ亜属やスダジイ、ケヤキの出土例がある。

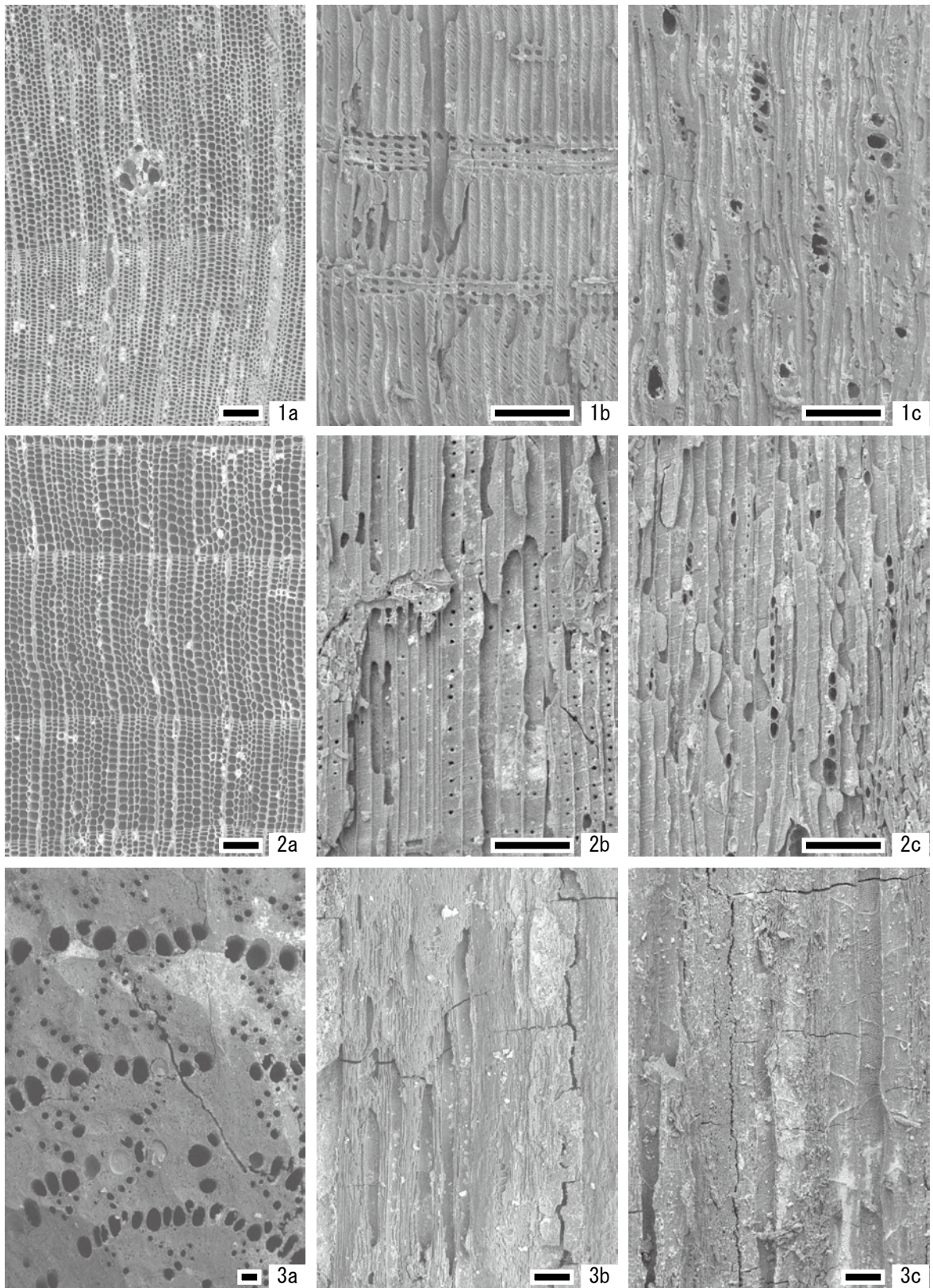
平安時代末～鎌倉時代の炭化材は、針葉樹のマツ複維管束亜属、カヤ、広葉樹のシキミ、ケヤキに同定された。SX01 ②のマツ属複維管束亜属は瘦地に強く、成長が早い典型的な陽樹である。このため、崩壊地、伐採地、植生が失われた場所に先駆的に侵入し、二次林を構成する。また、尾根沿い、河川近くなど他の樹木が生育しにくい場所でも生育可能である。マツ属は、材質は中庸であるが油分が多く、水湿に強いことから、土木材や建築材など様々な用途がある。SX01 ①・③下層・④、SP18 のカヤは暖地に多い常緑高木である。水湿に強いことから建築材や船舶材などに用いられることもあるが、成長が遅く大きな材が得られにくいいため、使用されることは希である。一般には耐湿性を生かした水回りの器具材や、緻密な木目を生かした彫刻材などに使われる。SP04 のシキミは、暖温帯の山地に

特徴的に産出する常緑小高木である。成長が遅く、大きな材が得られにくいいため、用途は少なく、仏具などに用いられる程度である。前述のデータベースで当該期の県内の分析事例をみると、いずれも用途がはっきりした木製品に対する分析であるため、今回確認された分類群はほとんど含まれない。本分析試料は小型の炭化材で用途等不明であるが、いずれも遺跡周辺で得やすい樹木であり、当時何らかの目的で利用されていたと考えられる。

平安時代末～鎌倉時代の炭化種実は、SX01 ②・④の6個がクリ、SX01 ②の1個のみトチノキに同定された。クリ、トチノキは高木になる落葉広葉樹で、クリは丘陵や山地などの明るく開けた場所に生育する二次林要素、トチノキは河畔林要素である。これらは、当時の遺跡周辺の落葉広葉樹林や河畔林に生育していたと考えられる。また、クリは子葉が食用可能で、トチノキは、あく抜きを施すことで子葉が食用可能となる有用植物である。これらの堅果類の出土部位は、可食部の子葉であることから、植物質食料として遺跡周辺の森林から持ち込まれ、火を受けた可能性がある。

引用文献

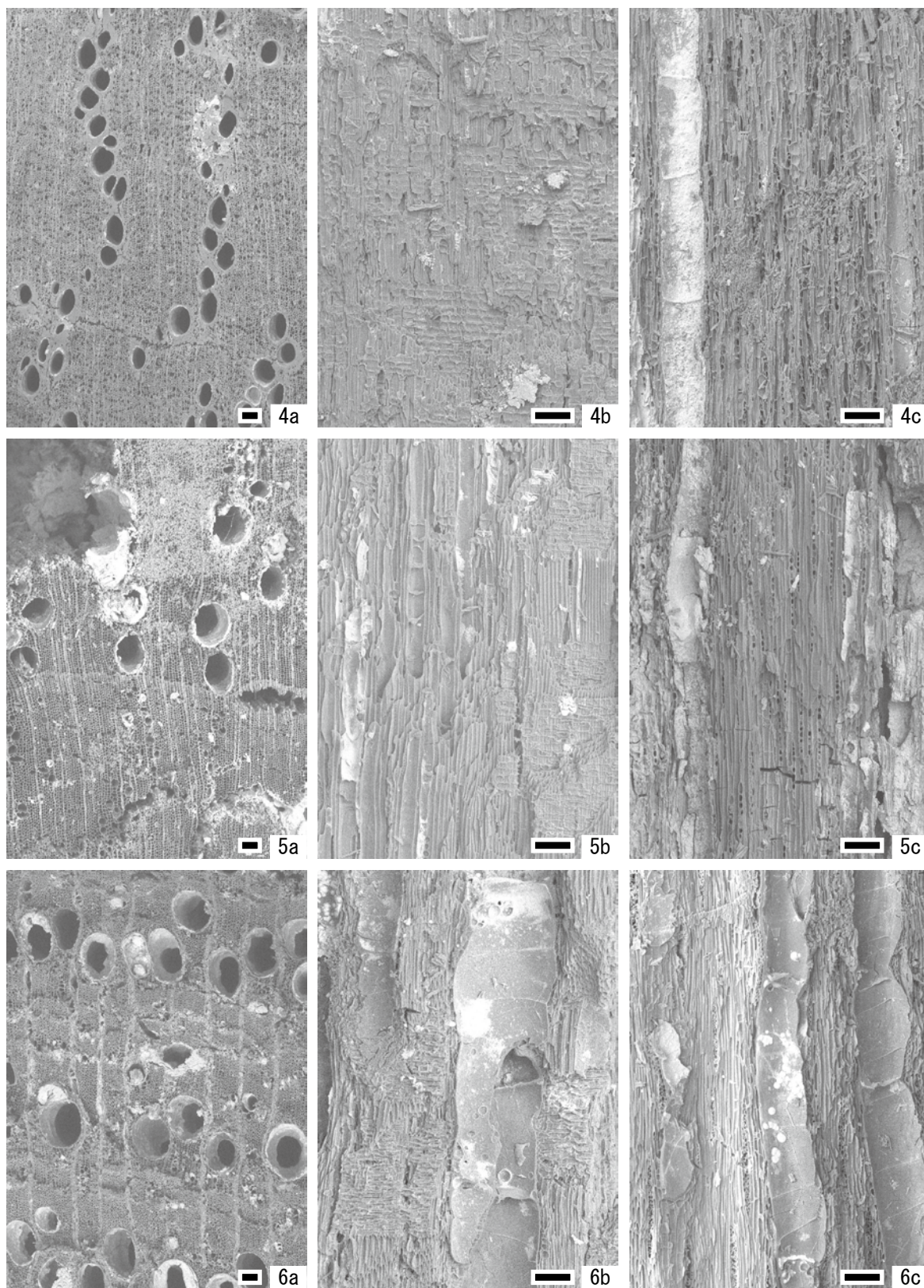
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62,1-33..
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .
- 吉川純子,2011,縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化. 植生史研究,18,57-63.



- 1. マツ属複維管束亜属 (試料6)
- 2. カヤ (試料8)
- 3. コナラ亜属クヌギ節 (試料15)

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
 スケールは100 μ m

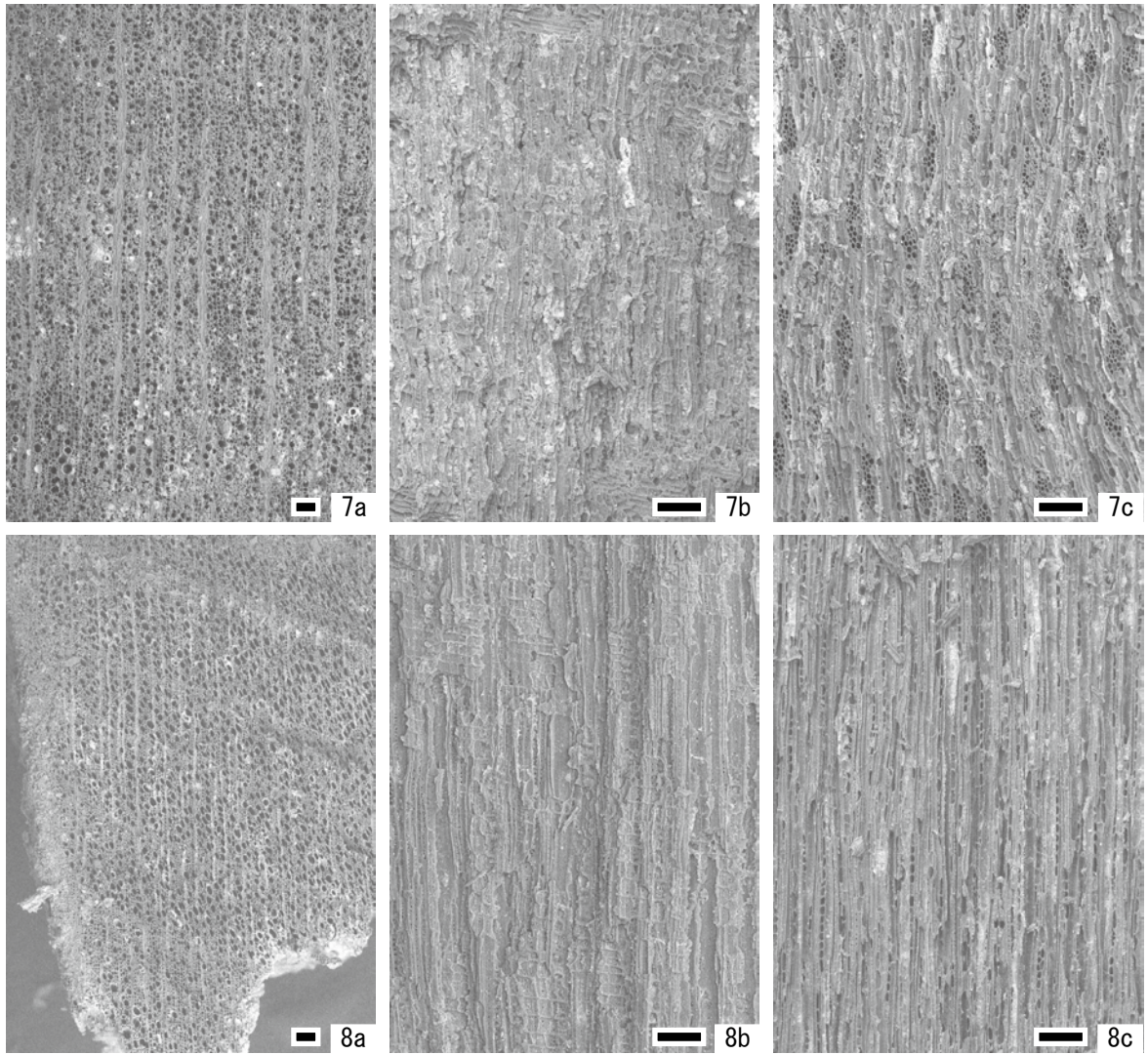
第28図 炭化材 (1)



- 4. アカガシ亜属 (試料16)
- 5. スダジイ (試料1)
- 6. ケヤキ (試料13)

a:木口 b:柁目 c:板目
 スケールは100 μm

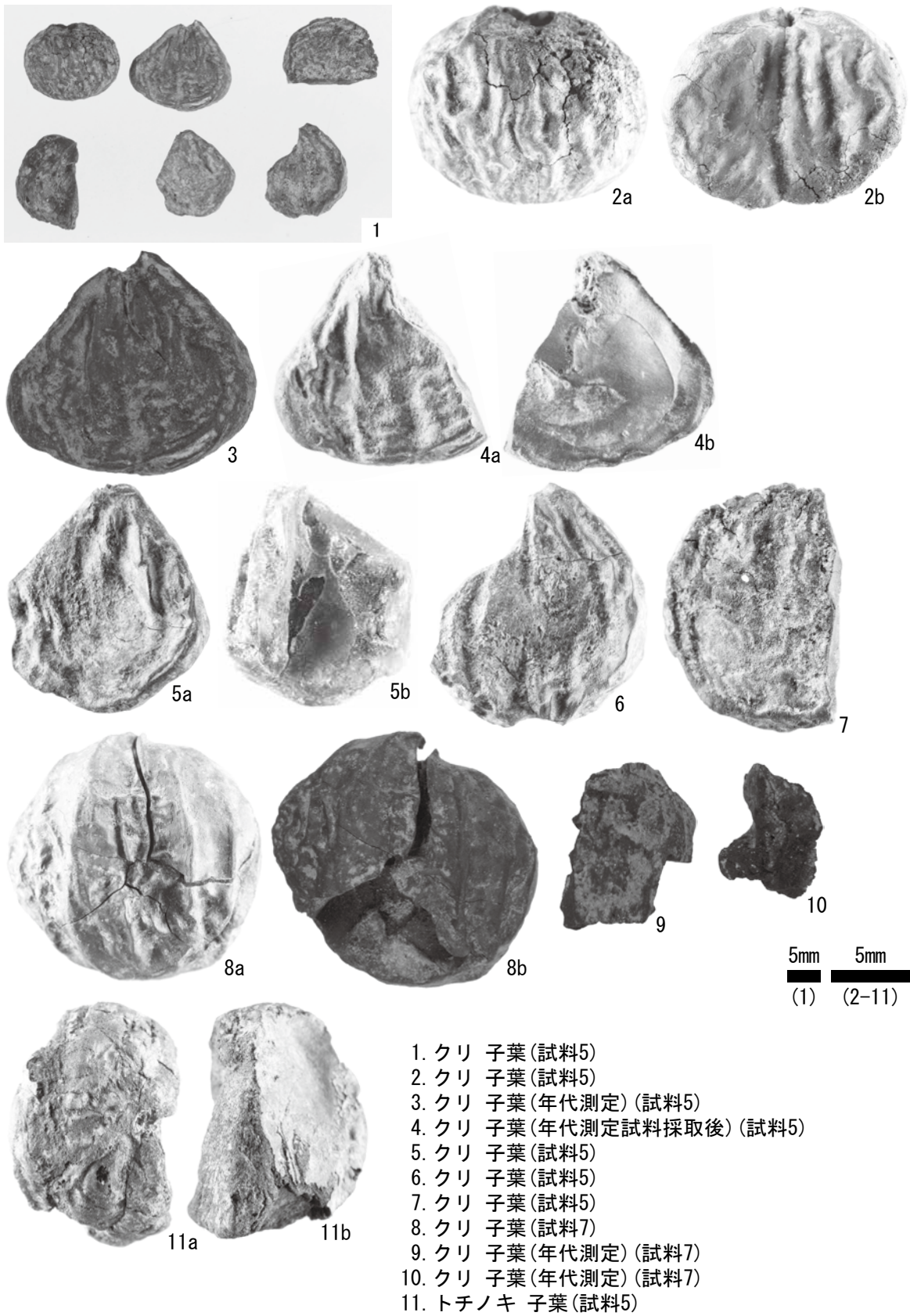
第29図 炭化材 (2)



7. シキミ (試料7)
8. サカキ (試料2)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

第30図 炭化材 (3)



第31図 炭化種実

V 総括

堀の内遺跡は美祢市秋芳町岩永本郷の向山裾部丘陵に所在する。その丘陵一帯の表層地質は石灰岩周辺に存在する緑色岩と礫岩・砂岩・頁岩互層帯に属し、土壌は赤色土壌（錦山統）である。

秋芳町には、カルスト台地上に展開する旧石器時代と縄文時代の遺跡群と、カルストポリエ（またはカルストフィールド、溶食盆地）と呼ばれる大型の平坦地形の縁辺に展開する弥生時代から中世にかけての遺跡群が存在する。厚東川流域の丘陵地にある本遺跡は後者と同様の性格をもち、周辺には且遺跡、的場遺跡、道場・中村遺跡、川東遺跡、土井敷遺跡などの集落遺跡・遺物包蔵地・遺物散布地や、堀の内石棺群、且石棺群、且横穴、山露横穴墓、三戸石棺（昭和56年2月27日、岩永八幡宮境内へ移築保存）などの埋葬遺跡が点在している。

昨年の「農業競争力強化農地整備事業 岩永本郷東地区 埋蔵文化財発掘調査業務」により、堀の内遺跡、川東遺跡、土井敷遺跡で弥生時代から中世にかけての集落遺跡が確認された。これらの埋蔵文化財資料は、当時の歴史的環境を知る上で貴重なものとなった。

本年度は、昨年度の調査に引き続き周知の遺跡「堀の内遺跡」の南東部分にあたる範囲において発掘調査を行った。「堀の内」と言う地名の由来でもある岩永地頭職「岡部氏居館跡」との関連性も視野に入れて遺構の広がりや精査し、遺物の出土状況等を確認した。

1 弥生時代～古墳時代の様相

今回の発掘調査において縄文時代に遡る遺構の発見はなかったが、遺物としては砂質片岩製の打製石斧1点を遺物包含層で発見し、腰岳産黒曜石の石核1点を採集している。在地産石材を利用した石器と物資交易によってもたらされた遺物で、これらは近辺に縄文時代の遺構が埋存している可能性を示唆するものである。また、遺物包含層1から出土した炭化材（試料16）の放射性炭素年代測定（AMS）の数値は暦年較正用年代 $2420 \pm 20BP$ を示した（以下、分析の詳細はIV章を参照）。古木効果もあり得るため推測の域を出ないが、この炭化材の出土は、縄文時代晩期（AMS測定法による較正年代では弥生時代前期末）の遺構が隣接地に存在している可能性を示している。

調査地における集落の展開は弥生時代になってからであり、円形竪穴建物（SI01）を1棟検出している。この竪穴建物から弥生土器小片を数点検出したが、図化には至っていない。竪穴建物の形状・規模等から弥生時代後期と推定する。弥生土器と共伴出土した炭化材（試料1・2）の放射性炭素年代測定（AMS）では、試料1 暦年較正用年代 $1870 \pm 20BP$ 、試料2 暦年較正用年代 $1885 \pm 20BP$ という数値を得ており、弥生時代後期を示している。昨年度に実施した堀の内遺跡発掘調査において、1区（標高約73～74m）で弥生時代中期の可能性が高い円形竪穴建物を発見している。今年度調査で検出した弥生時代後期と推定する円形竪穴建物（SI01）の標



写真4 磨製石斧出土状況

高は約 84 m で、10 m 高位にある。

そのほか弥生時代の遺物としては、安山岩製打製石鏃 1 点（SP18 流入）、泥質片岩製磨製石斧 1 点（遺物包含層）、磨石 1 点（SX01 流入）、敲石 1 点（遺構外採集）が見つかっている。

古墳時代の産物と考えられる遺物は高杯 1 点のみである。古墳時代の遺構は後期においては近隣で確認されているものの、今年度調査区内では検出していない。また、採集遺物もほとんどないことから、隣接地に遺構は存在しないと推察する。

2 古代の様相

古代の遺物は、図化した須恵器甕 3 点と土師器甕 4 点を含み、出土点数は 10 点に満たない。中世の遺物と共伴出土した遺物および遺構外採集遺物であるが、出土量は古墳時代に比べると増す。

昨年度の堀の内遺跡発掘調査で古代の溝を 1 条検出しているほか、隣接の川東遺跡や更に離れた土井敷遺跡でも古代の遺構を確認している。調査地内で古代の遺構は確認できなかったが、すぐ周辺に古代の遺構が埋存している可能性は高い。

3 中世の様相

1) SB01・SX01 と遺物包含層 1 の出土遺物

本遺跡における遺物のほとんどが、調査区東部中央に位置する掘立柱建物 SB01 の構成柱穴と、長さ約 6.4 m × 幅約 5.6 m の長楕円形性格不明遺構 SX01、その北下方に堆積する遺物包含層 1 から出土している。出土遺物のうち青磁・白磁は概ね 11 世紀後半～12 世紀後半頃に出土する器形の特徴を示し、共伴出土土器も同時期の産物が大半を占める。

今年度調査で出土した青磁・白磁を分類して「第 7 表」と「第 32 図」として掲載した。出土した分類例の特徴を次に述べる。

白磁碗Ⅳ類は肉厚な玉縁口縁を有し、体部は口縁に向かって逆ハ字状に直線的に延びる。Ⅳ－1 類の高台は内部のケズリが浅く、肉厚の底部となる。Ⅳ－2 類は 1 類より高台内部のケズリが深い。Ⅴ類の高台は細く高く直立する。体部は下位で丸みをもち口縁部に向かって緩やかに開いて延びる。Ⅴ－1～3 類は 11 世紀後半～12 世紀前半の標識磁器で、Ⅴ－1 類は直口縁、Ⅴ－2 類の口縁は緩やかに外反する。Ⅴ－4 類は屈曲した口縁部を有し、上端部は水平にする。12 世紀中葉から出土し始めるとされている。Ⅷ類の体部は斜め上方に直線的に開き、Ⅷ－4 類の口縁部は外反する。

白磁皿Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類は 11 世紀後半～12 世紀前半の標識磁器である。Ⅱ類は碗Ⅳ類と同様の高台を有し、器壁は厚めで玉縁口縁である。Ⅳ類の口縁は外反肥厚し、底部外面は平底かわずかに抉る。Ⅴ類の体部は下位に丸味をもち、口縁部にかけて特に薄くなる。Ⅴ－2 類の口縁部は屈曲する。Ⅶ類の体部はやや内湾気味に立上がり、口縁部に向かって薄く延びる。Ⅶ－1 類は体部中位で屈曲する。Ⅲ類は底部外面をやや深くケズリ、口縁部は直口縁またはやや外反する。12 世紀中葉の準標識磁器とされ、白磁碗Ⅷ類とセットと考えられているが、今回の調査では SP18 から皿Ⅳ－1 類、皿Ⅶ－1 類（以上 11 世紀後半～12 世紀前半）と、碗Ⅴ－4 類（12 世紀中葉）と同伴出土している。

SX01 出土の初期龍泉窯系の青磁碗 0 類は口縁部下に鋭い屈曲点を有し、体部は逆ハ字状に開く。

第7表 堀の内遺跡出土の青磁・白磁の分類

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	標識磁器	出土遺構	準標識磁器	出土遺構			
①-	1100-	X II	A	白磁椀IV -1a (25)	SP25				
			B	白磁椀IV -1a か 2a (26)	SP31				
		X III		(165)	遺物包含層 1	青磁椀 0 類 (初期龍泉窯系)	SX01 SX01		
				(127)	SX01			(134)	
				(130)	SX01			(135)	
				白磁椀 V -1a (161)	遺物包含層 1				
				白磁椀 V -2a (126)	SX01				
				(159)	遺物包含層 1				
				(160)	遺物包含層 1				
				(162)	遺物包含層 1				
				(194)	遺構外				
				白磁椀 V -2c (128)	SX01				
		X IV		(28)	SP49	白磁椀 V -4a (15)	SP18		
	1150-			白磁皿II -1b か 2 (28)	SP49			(14)	SP04(SP18、SX01 接合)
				白磁皿IV -1a (19)	SP18			(163)	遺物包含層 1
				(132)	SX01			(129)	SX01
				白磁皿 V -2a (131)	SX01			(193)	遺構外
				白磁皿VII -1a (21)	SP18 (SX01 接合)			(195)	遺構外
				白磁皿VII -1c (20)	SP18 (SX01 接合)			白磁椀 V -4b + d (158)	遺物包含層 1
					白磁椀 V -1 ~ 4 (166)	遺物包含層 1			
				白磁椀VIII - 4 (164)	遺物包含層 1				
			青磁椀 I 類 -1a (133)	SX01	白磁皿III -1 (17)	SP18			
			青磁椀 I 類 -3a (24)	SP17	(18)	SP18			
			青磁皿 I 類 -2b (136)	SX01	(22)	SP18			
			青磁皿 I 類 -2a (167)	遺物包含層 1	(16)	SP18			
②	1200- 1230-	X V							
		X VI							

図中 () 内の数字は遺物番号

紀年銘資料 ① A.D. 1091 寛治 5 年、平安京左京 4 条 1 坊 SE8 井戸

② A.D. 1224 貞心 3 年、大宰府 33 次 SD605 溝

第 7 表は、太宰府市教育委員会 2000 太宰府市の文化財 第 49 集 「大宰府条防跡 X V - 陶磁器分類編 -」に基づいて作成

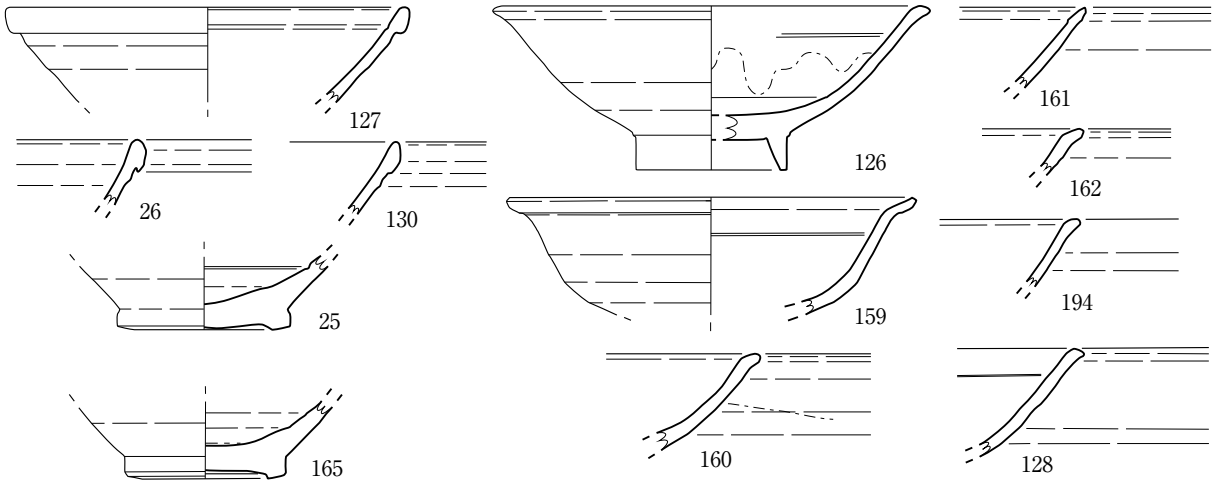
青磁椀 I 類は 12 世紀中葉～後半の標識磁器である。体部下位に重心をもち、口縁端部は丸く肉厚。直口となる例が多い。I - 1 類は無紋、I - 3 類は内面に片彫文と櫛目を入れ複雑な文様を有す。

青磁皿 I 類は 12 世紀中葉～後半の標識磁器である。体部中位で屈曲し、口縁部に向かって薄く引き出す。I - 2 類 I - 1 類に比べて小型で、I - 2a 類は無文、I - 2b は内面見込みに花文を有す。

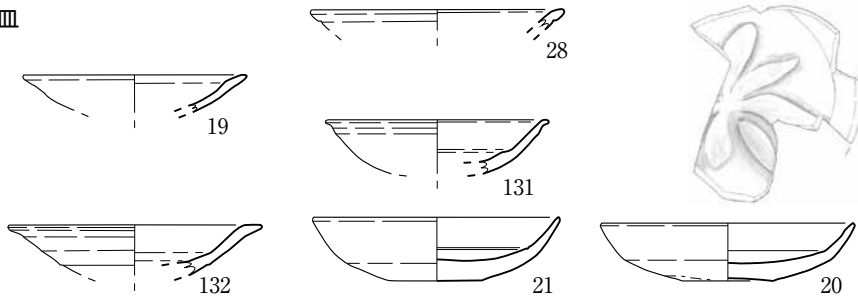
SB01 の構成柱穴 SP04 出土の白磁椀 (14) は、同じく構成柱穴 SP18 出土白磁椀片および SX01 出土白磁椀片と接合に至った遺物である。また、SP18 出土の白磁皿 2 点 (20 および 21) も SX01 出土の破片と接合している。同一個体を意図的に分散して埋めたか、或いは一部を柱穴に埋めた後に残りを廃棄したものとする。SX01 は SB01 に伴う遺構であり、儀礼等まつわる出来事があったと推察する。

SP04 出土炭化材 (試料 11) の放射性炭素年代測定 (AMS) では暦年較正用年代 $915 \pm 20BP$ 、SP18 出土炭化材 (試料 12) では暦年較正用年代 $950 \pm 20BP$ の数値を得ており、出土遺物の比定年

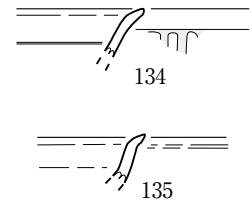
11 世紀後半～12 世紀前半
白磁椀



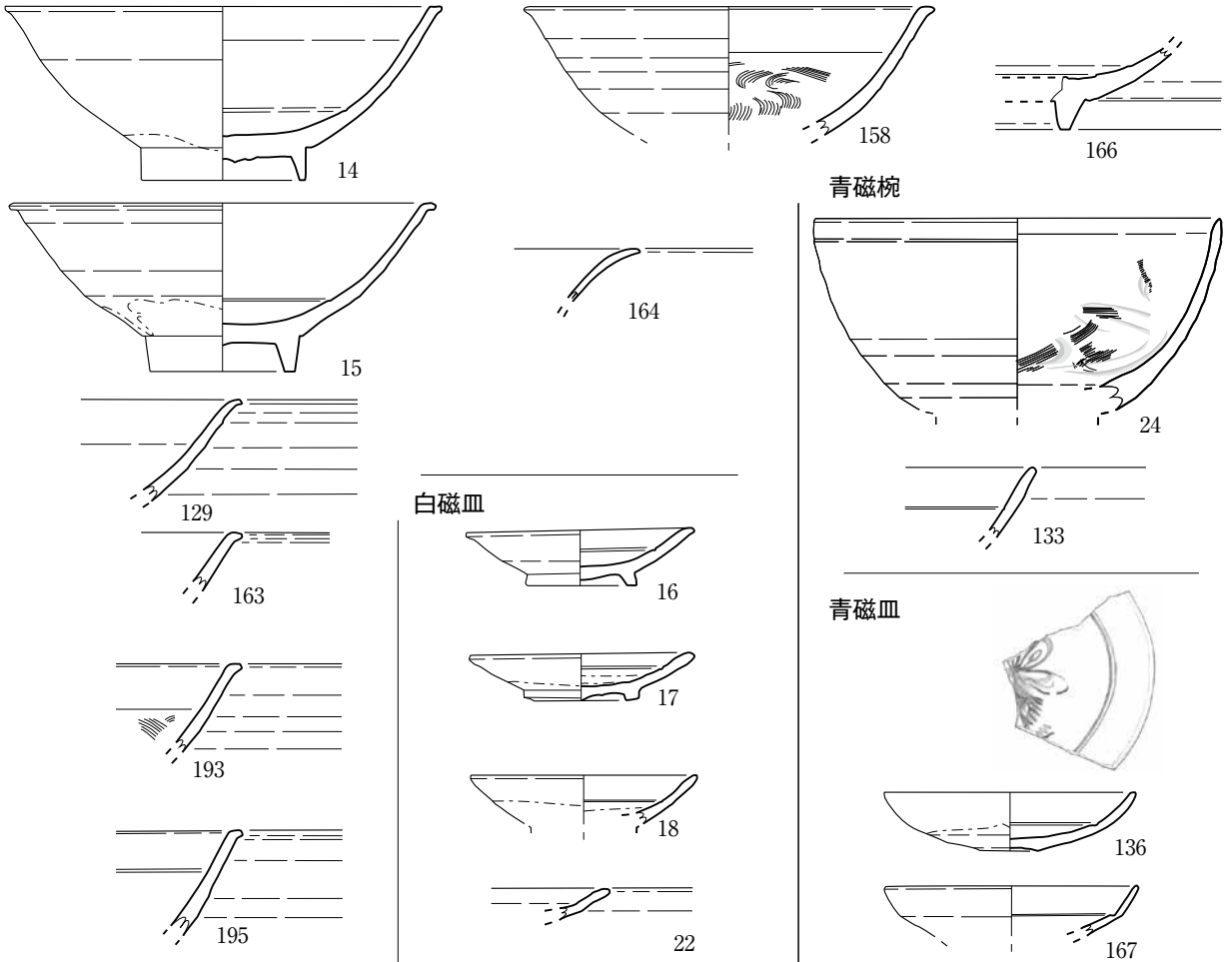
白磁皿



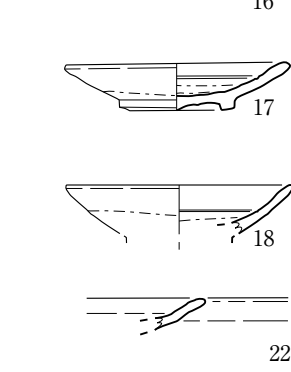
青磁椀



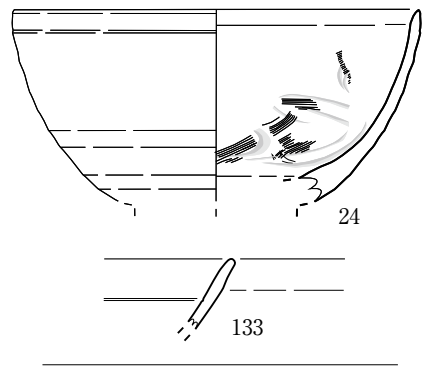
12 世紀中葉～後半
白磁椀



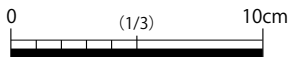
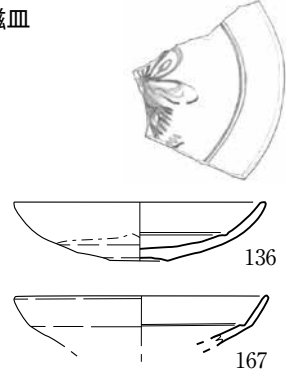
白磁皿



青磁椀



青磁皿



第 32 図 堀の内遺跡出土の青磁・白磁

代と概ね一致する。

関連する遺構・出土遺物として SP49 と陶器甕 (30) をあげる。SP49 から出土した Y 字口縁を有する陶器甕 (30) 片で、構成柱穴 SP18 から出土した陶器甕片と接合している。SP49 は SB01 の構成柱穴と判断していないが、SB01 構成柱穴 SP04 と SP27 を結ぶ直線の延長上で SX01 内にある。他の柱穴と対応して SX01 上に柱列ないし建物を展開し得る。儀礼と関連した遺構・遺物の可能性もある。Y 字口縁甕は福岡市「博多」で数点の出土例がある^{註1}が、山口県での類例を見ない。12 世紀の中葉～後半の遺物と位置づけられている。

SX01 の全面を上層から精査しながら掘り込み、上層平均約 5 cm の埋土を取り除くと、下位には複数の掘込みが出現する。50cm～200cm 程度の浅い皿状の掘込みが切り合いながら大きな廃棄土坑を形成していることが判明した。包含遺物から推測し、限られた短期間の廃棄場所として利用されていたと見られる。多量の土師器の皿 (京都系 2 点を含む)・杯・椀や瓦器椀・皿 (和泉型 12 世紀代) と共に、11 世後半～12 世紀前半の指標となる白磁椀・皿、および 12 世紀中葉の指標となる青磁椀・皿が複数点出土した。この遺構から出土した炭化材 (試料 3、4、6、8～10) および炭化種実 (試料 5、7) の放射性炭素年代測定 (AMS) では、暦年校正用年代 $930 \pm 20\text{BP}$ ～ $1115 \pm 25\text{BP}$ の数値を得た。試料 6 の炭化材は古木効果を受けている可能性があり、それを考慮すれば概ね出土した土器の比定年代と相違ないと言える。

遺物包含層 1 からも 11 世後半～12 世紀中葉までの白磁椀が複数出土している。12 世紀中葉の指標となる青磁皿 1 点も出土している。遺物包含層 1 出土炭化材 (試料 15) の放射性炭素測定結果は出土遺物の時期と概ね一致する。

遺物の出土状況と出土遺物全体から判断すると、実際に遺物が廃棄された時期は白磁・青磁が示す標識年代の後半寄りになり、SB01 に関する建物は 12 世紀中葉～後半に廃絶を迎えたと考える。

このほか、遺物包含層 1 からは短頸雁又式鉄鏃が出土している。出土箇所上方に位置する掘立柱建物 (SB01) に関連した儀礼的要素を示唆する遺物、あるいは墓の埋納品^{註2}と考える。

中世のその他の遺構としては、調査区の南上方から北下方へ走る溝を 6 条検出した。出土遺物は殆どなく、僅かに土師器片を確認する。新旧 2 条が重なり合う場所が 2 ヶ所あるが、溝と溝の間隔と切り合い関係から、第一次期 (中世か) が 4 条、第二次期 (中世または近世) が 2 条とみる。区画としての溝、あるいは雨水捌用水路としての溝として機能していたと考える。

出土遺物では、遺構外で瓦質土器と足鍋の脚等を採集したが、これらは鎌倉時代後半～室町時代の遺物と考える。これは、岡部氏が岩永地頭職にあった時期とも重なってくる。



写真 5 雁又式鉄鏃出土状況

2) 歴史的背景 「長門国美祢郡岩永地頭職 岡部氏」

武蔵国から長門国へ

岡部氏は武蔵国の出身。武蔵七党（横山・猪俣・野与・村山・西・児玉・丹）のうち、猪俣党の流れである。小野篁以後、義孝が横山党、時範が猪俣党の祖となり、次いで忠綱が武蔵における岡部氏の祖となる。その後、岡部忠澄が一ノ谷の合戦で平忠度を討取り勇名を挙げ、その長男広澄は頼朝の命により豊後に行き、九州における豊後岡部氏の祖となる。1220（承久2）年には次男景澄が長門国美祢郡岩永の地頭職となり、長門における岡部氏の祖となる。

土地制度の移り変わりと武士の誕生

大化の改新以来の土地制度は、土地の公有を原則とした班田収授法の制定により、国民には口分田が配給され、その身一生を限って使用収益する権利が認められた。ところが奈良時代に入って耕地の面積を拡張し、農業経営に活気を帯びさせるために、開墾田の私有を承認する政令（三世一身法・墾田永年私財法）が発令される。ここにおいて社寺や貴族、あるいは余力のある庶民が次々と開発事業を起こし、大規模な公地を私有することにより、いわゆる荘園が発足する。

元来、荘園は公地に対する私有地であり、租を逃れるものではなく、国司の行政圏外に独立したものでなかった。ところが平安時代に入る頃から、社寺や権門は非合法的に租の納入を怠ったり、免租の特典を獲得したりして、不輸租地としての荘園を発生させ、国司の政治力の及び得ない特殊地帯としていく。このように平安時代の土地制度は、国司の配下にある公領（国衙領）と、社寺・権門や

地域豪族などを領主とする荘園とに二分され、次第に荘園に蚕食されていく公領もまた、朝廷貴族や国司または国衙の荘園のような観を呈し、平安中期には、世を挙げて荘園制社会ともいべき状態となった。

同時に、地方に対する中央政府からの統制が弱まり、地方の政治が乱れていく中で、国衙の官人たちが職務執行の手段として武力に頼ったり、荘園領主となった地方豪族や有力者は、その領地を守るために武力を貯えたりしていく。その社会を背景に新興階級としての武士が誕生していき、その代表として東国を勢力圏とする清和源氏と、西国に地盤を作り上げた桓武平氏



第 33 図 長門国の主な荘園・地頭の配置

が現れる。

保元（1156年）・平治（1159年）の乱により、源氏は決定的な打撃を被り、清盛を頭領とする平氏一門の全盛時代を迎える。清盛は積極的に日宋貿易を起こしたり、平氏の一族・家人を諸国の荘園の地頭に補し、荘園の実権を掌握したりして、実質的な利益を収める政策をとった。平氏の知行国となった長門国の武士の多くは平氏の知遇を得ており、一ノ谷の戦いにも豊東郡司秀平・豊西大夫備近・厚東入道らが参加している。その後、壇ノ浦の戦い（1185年）で源氏は平氏を打ち破り、頼朝によって武家政治が開かれ、諸国に守護を置き、また公領・荘園の別なく、各地に地頭を置いた。

長門国の主な荘園及び地頭の配置（平安末期～鎌倉初頭）

防長両国における荘園は、畿内近国などに比べれば少なく、反して国衙の支配力は比較的に強固であったようであるが、長門国の国衙は早く衰えていき、鎌倉時代には公領は皆無に帰し、ある限りの土地はほとんど私有地（荘園）として地頭の管理下におかれ、守護の支配に従った。

長門国5郡の主な荘園（公領も含む）を挙げる。

厚狭郡…棚井庄（宇部市字棚井）、鴨庄（山陽町字鴨庄）、津布田庄（山陽町字津布田）

豊浦郡…二宮庄（下関市長府）、員光庄（下関市大字王司字員光）、吉永庄（豊浦町大字黒井字吉永）

美祢郡…大美禰庄（美祢市大字大嶺）、位佐庄（美祢市大字伊佐）、厚保（美祢市大字東・西厚保）

大津郡…三隅庄（大津郡三隅町）、深川庄（長門市大字深川）、向津奥庄（油谷町大字向津具）

阿武郡…牛牧庄（萩市・阿武川下流の三角州）

地頭の多くは関東の武士で、防長の地によって土着し、これを子孫に伝えたが、それ以前からの在地豪族の系譜をひく者も少なくなかった。前者には御家人の流れを汲む岡部氏や伊佐氏、由利氏が、後者には在地の郡司出身である青景氏や厚東氏、豊田氏らが挙げられる。

地頭を束ねる守護には、海上交通の要衝である関門海峡を抱える長門国に見合った人物が選ばれていったが、岡部氏が岩永の地頭職に就いた当時の長門守護佐々木広綱は、承久の乱で後鳥羽院に味方したため、北条氏に処刑される。また、1度目の蒙古襲来（文永の役）以後は、九州沿岸地方の防備を強めるために、守護を改め長門探題と称し、北条氏一門の世襲としていく。

岡部氏の動き

美祢郡岩永の地頭、岡部氏の名が史上に現れるのは、元弘の乱においてである。長門探題北条時直の配下に属していた岡部氏は、時直に従って南朝追討のために東上していくが、途中、伊予の平井城攻めの大敗で、小六、孫六が戦死する。続く時直討伐の勅旨を受けた吉見氏との戦い（大嶺合戦）では、厚東氏や豊田氏、由利氏、厚氏などと共に帰順し、建武中興の一翼を担ったとされる。

南北朝時代になって、長門守護厚東氏に属し、厚東氏が亡んだ後は大内氏に仕え、1542（天文11）年の大内義隆の出雲遠征（雲州経略）に岡部隆景は同行している。そして、大寧寺の変を迎える。1551（天文20）年、岡部隆景は陶晴賢の反逆によって、山口を追われた大内義隆に従って長門に下った。綾木から岩永と進むが、堀の内の居館には寄らず、即心庵で休憩後、大津郡仙崎に向かう。義隆は九州に逃れて再挙を考えるが、風波のため叶わず、深川大寧寺に戻り、義隆は自刃し、隆景も主君に殉ずる（大寧寺の変）。岡部氏の所領は没収され、長門岡部氏は廃絶となる。

その後、毛利氏が陶晴賢を討った厳島の戦い（1555年）後、実姉が陶晴賢夫人である内藤隆世は、

第8図 土地制度の移り変わりと岡部氏関連年表

時代	年 号	出 来 事
飛鳥	645(皇極 4)	乙巳の変 蘇我氏が滅びる
	646(大化 2)	改新の詔 律令政治開始(班田収授法の制定)
奈良	710(和銅 3)	平城京遷都
	723(養老 7)	三世一身法
	743(天平 15)	墾田永年私財法
平安	794(延暦 3)	平安京遷都
	1156(保元元)	保元の乱
	1159(平治元)	平治の乱 源義朝が平清盛に敗れる
	1167(仁安 2)	平清盛が太政大臣になる
	1184(寿永 3)	一ノ谷の合戦 岡部忠澄が平忠度を討取る
1185(文治元)	壇ノ浦の戦い 平氏が滅びる	
鎌倉		「守護・地頭」の制度を設置
	1192(建久 3)	源頼朝、征夷大將軍となる
	1220(承久 2)	岡部景澄、岩永の地頭職となる
	1221(承久 3)	承久の乱 後鳥羽上皇が北条義時に兵を挙げる
	1274(文永 11)	文永の役 (1度目の蒙古襲来)
	1281(弘安 4)	弘安の役 (2度目の蒙古襲来)
	1331(元徳 3)	元弘の乱 ~ 1333
	1333(元弘 3)	鎌倉幕府滅びる
室町	1334(建武元)	建武の新政が始まる
	1336(延元元)	南北朝の動乱(朝廷が南朝、北朝に分裂)
	1338(延元 3)	足利尊氏が征夷大將軍になる
	1467(応仁元)	応仁の乱 ~ 1478
	1542(天文 11)	大内義隆の雲州経略
	1546(天文 15)	岡部隆景、父興景より家督を受ける
1551(天文 20)	大寧寺の変	

大内氏の血縁を求めた陶晴賢の思いを継ぎ、大内義長を護りながら山口高嶺城に、ついで下関且山(勝山)に拠り毛利軍勇に抗すが敗死、義長も長福寺にて自刃する。

廃絶後の岡部氏居館

一方、毛利隆元に嫁し、輝元を生んだ実姉をもつ内藤隆春は、1558(弘治3)年には内藤氏宗家の相続と所領を安堵せられ、12月には毛利氏の守護代を拝命している。

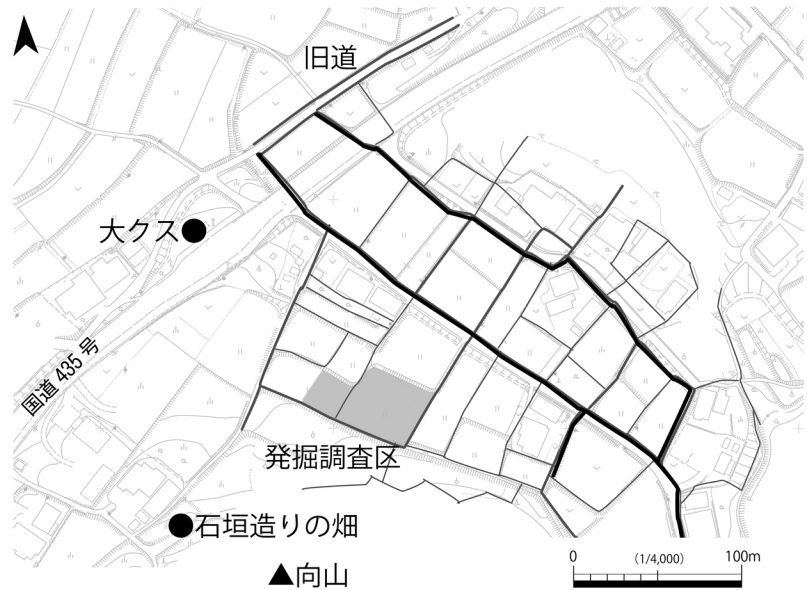
この頃から、岩永堀の内の岡部氏の旧館には、隆春の生母山内氏が暮らし、それ以来岩永の大方と称された。岩永の大方は1604(慶長9)年に死去する。1600(慶長5)年、毛利氏が防長二州に削封され、改めて家臣に知行地を配分するにあたり、岩永村堀の内付近は栗屋孝春(隆春3男)が拝領し、祖母である大方の居館に住み、内藤氏の旧家臣古谷内蔵允盛通も隆春に仕えている。岡部氏廃絶後も毛利氏と深いつながりのある内藤氏に関わりを持つ人物が居館に住んだ。

1615(元和元)年、大坂夏の陣で嫌疑のかかった内藤元珍、栗屋元豊の二名は自刃し、内藤氏は荒滝城および領地没収、栗屋氏は領地没収・家名断絶となるが、やがて内藤姓は復し、栗屋家も後年取り立てられ大組に班せられる。特に岩永領没収に際して除籍された古谷氏は帰農し、岩永堀の内に定住して元豊などの供養に奉仕し、その子孫は庄屋役などを勤めている。

発掘調査成果から窺える堀の内

今回の調査では岡部氏の居館跡を示す遺構は検出できなかった。掘立柱建物SB01も、柱穴から出土した土器は12世紀代のものであり、岡部氏が岩永地頭となった時期より70~100年早くに建てられたものと推測できる。この地が公領だったか、荘園だったかを知る手掛かりはないが、平氏が荘園の実権を掌握するために補任した地頭に関わる建物、あるいは開発事業に取り組み荘園領主となった地方豪族や有力者に係る建物の可能性がある。特に出土遺物の中に青磁、白磁、中国陶器などが目立つことから、日宋貿易とのつながりも見えてくる。

『岡部氏の事績とその遺跡概要』(中嶋輝一著『秋芳町地方文化研究 第1号』)の中に「岡部氏は代々本郷堀ノ内に居館を構え、その上の向山(通称城山)を城塞とした。現在末近巖氏宅前に石垣造



第 34 図 発掘調査区周辺

りの約一反の畑がある。これが居館跡で、後に内藤下野守興盛の後室(岩永大方という)隠居の館となった。」とある。真偽のほどは定かではないが、この場所は調査区から南西へ 100 m 程度離れた向山麓にある。また、樹齢 600 年とされる岡部氏居館跡の大クスと呼ばれる楠が国道 435 号の傍に立っており、その国道(当時県道)開設(明治 20 年頃)により堀が埋められている。これらの位置関係から、本調査区は居館跡内もしくは居館跡周辺に位置すると考えられる。性格不明遺構 SX02 からは、近世の土器や陶器、瓦片が出土しているが、中世から近世にかけてこの地に暮らした内藤氏や内藤氏に関わる人々の生活の痕跡の可能性もある。

4 近世の様相

井戸の可能性が高い SK01・02、右三巴文を有する軒丸瓦が出土した SK08、紅皿・白磁碗(玩具)・陶器の播鉢・土瓶等が出土した SX02 は、何れも調査区の東南部分に集中する。当時の生活を営む上で、丘陵斜面を開墾した平地に機能的に配置されたものと推察する。そのすぐ北側には、SX02 の北辺とほぼ平行に SA02 を発見している。そしてその西側にやや角度を変えて SA03 が連なる。SA02・03 の構成柱穴からは、時代を決定づける遺物が出土していないため推察の域を出ないが、SA03 の構成柱穴は SD4 埋土上面から掘りこまれていることから、中世でも新しい溝 SD01・03 の時期、あるいは SK08・SX02 の時期に、それを含む敷地の区画としてつくられた柵列と考えることができる。調査地高位にあるこれらの遺構は、全て後世の削平により、上面を 50cm～70cm 以上失っている可能性がある。調査地内で生活主体となる建物(掘立柱建物)遺構は検出できなかったが、削平による消滅あるいは更に高位の平地に存在している可能性がある。

萩焼・肥前陶磁器等も出土していることから、その後 18 世紀の終盤頃に畑地として改耕され、更には水田として整備されて今日に至っている。

5 まとめ

平野部に繋がる岩永盆地南東端の山裾部という好立地に所在する今年度調査地は、中世初期段階から、青磁・白磁といった国際貿易品や天目茶碗・瓦器などの流通品を多量に所有していた権力者が拠点とした地である。調査成果は、岡部氏が1220年に岩永地頭職に就くより100年以上前から、当地を治めていた権力者が居たことを物語っており、岩永地区の歴史的に新たな考察を展開する貴重な資料となった。また、県内における平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構を検討する上でも、指標となりうる良好な一括資料が得られたと言えよう。

註

- 1 福岡県福岡市教育委員会 1984 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ『博多—高速鉄道関係調査(1)—』
- 2 公益財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2015 山口県埋蔵文化財センター調査報告第91号『中恋路遺跡3』

参考文献

- 1 秋芳町地方文化研究会 1965『秋芳町地方文化研究 第1・22号』
- 2 秋芳町史編集委員会 1991『秋芳町史』
- 3 美祢市史編集委員会 1991『美祢市史』
- 4 山口銀行 1994『防長歴史探訪(6)』
- 5 山口県教育委員会 1996『歴史の道調査報告書 赤間関街道』その他
- 6 太宰府市教育委員会 2000 太宰府市の文化財 第49集『大宰府条坊跡XV —陶磁器分類編—』
- 7 山口県 2004『山口県史 資料編 考古2』
- 8 小森俊寛 京都編集工房 2005『京から出土する土器の編年的研究 —日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』
- 9 防府市教育委員会 2012 周防国府跡発掘調査報告2『—鎌瀬地区・寿昌院地区・東式高洲名地区の調査—』
- 10 防府市教育委員会 2013 周防国府跡発掘調査報告3『—船所・浜宮北方地区の調査—』
- 11 秋芳町地方文化研究会 2014『美禰郡細見繪圖』(復刻版)
- 12 公益財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター 2020 山口県埋蔵文化財センター調査報告第106集『堀の内遺跡 川東遺跡 土井敷遺跡』

図 版



調査区 遠景（西から）

図版 2



調査区遠景（北西から）



調査区と岩永盆地（東から）



調査区と岩永盆地（正面奥）



調査区近景①（北上空から）

図版 4



調査区近景②（北上空から）



調査区全景（北上空から）



調査区北部分（鉛直上空から）



SX01 周辺部（鉛直上空から）

図版 6



SI01 完掘状況（北から）



SI01 完掘状況（東から）



SI01 中央土坑土層断面（東から）



SB01 完掘状況（北から）



SB01 完掘状況（東から）

図版 8



SB01 構成柱穴 SP04 半裁・土器出土状況（北から）



SB01 構成柱穴 SP18 土器出土状況（東から）



SP49 土器出土状況（北から）



SP49 完掘状況（北から）



SD01・02 完掘状況（西から）



SD01・02 土層断面①（南から）



SD01・02 土層断面②（南から）

図版 10



SK01 土層断面 (南から)



SK01 完掘状況 (南から)



SK02 土層断面 (南から)



SK02 完掘状況 (南から)



SK08 遺物出土状況（北から）



SK08 完掘状況（北から）



SX01 土層断面東部分（北から）



SX01 土層断面西部分（南から）



SX01 遺物出土状況（北から）



SX01 完掘状況（北から）



SX01 遺物出土状況（東から）

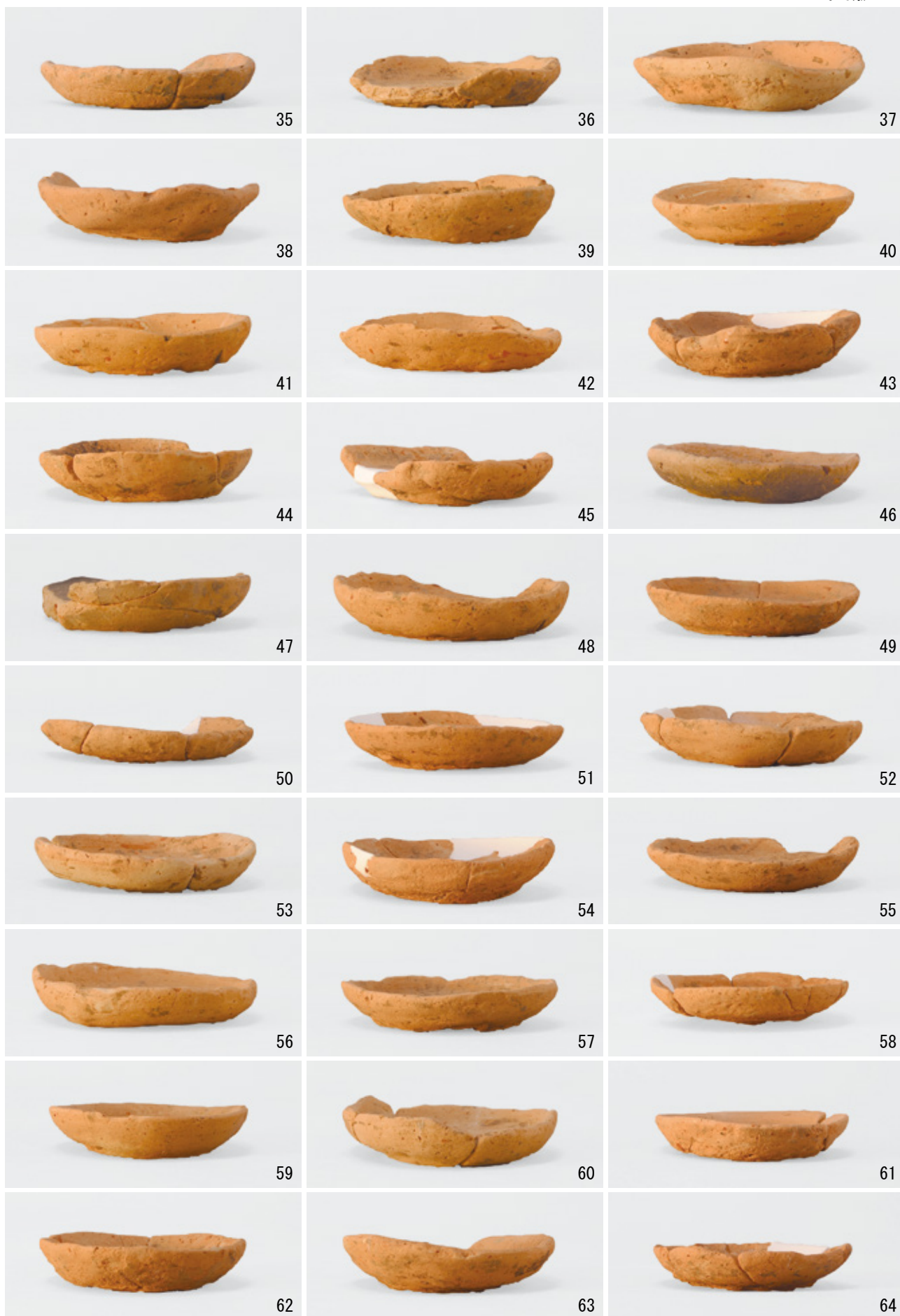


SX01 遺物出土状況（部分：東から）



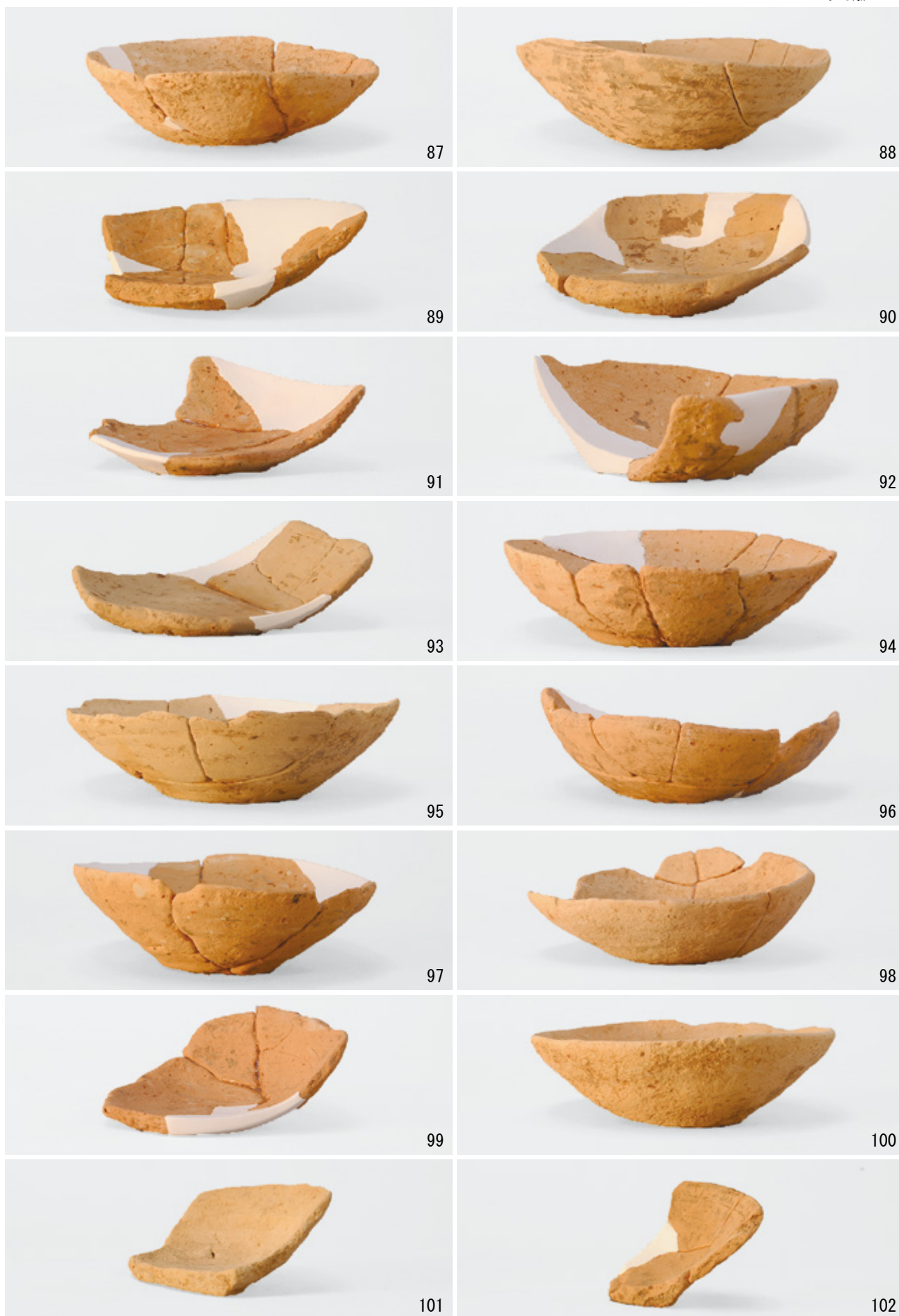
出土遺物 (1)

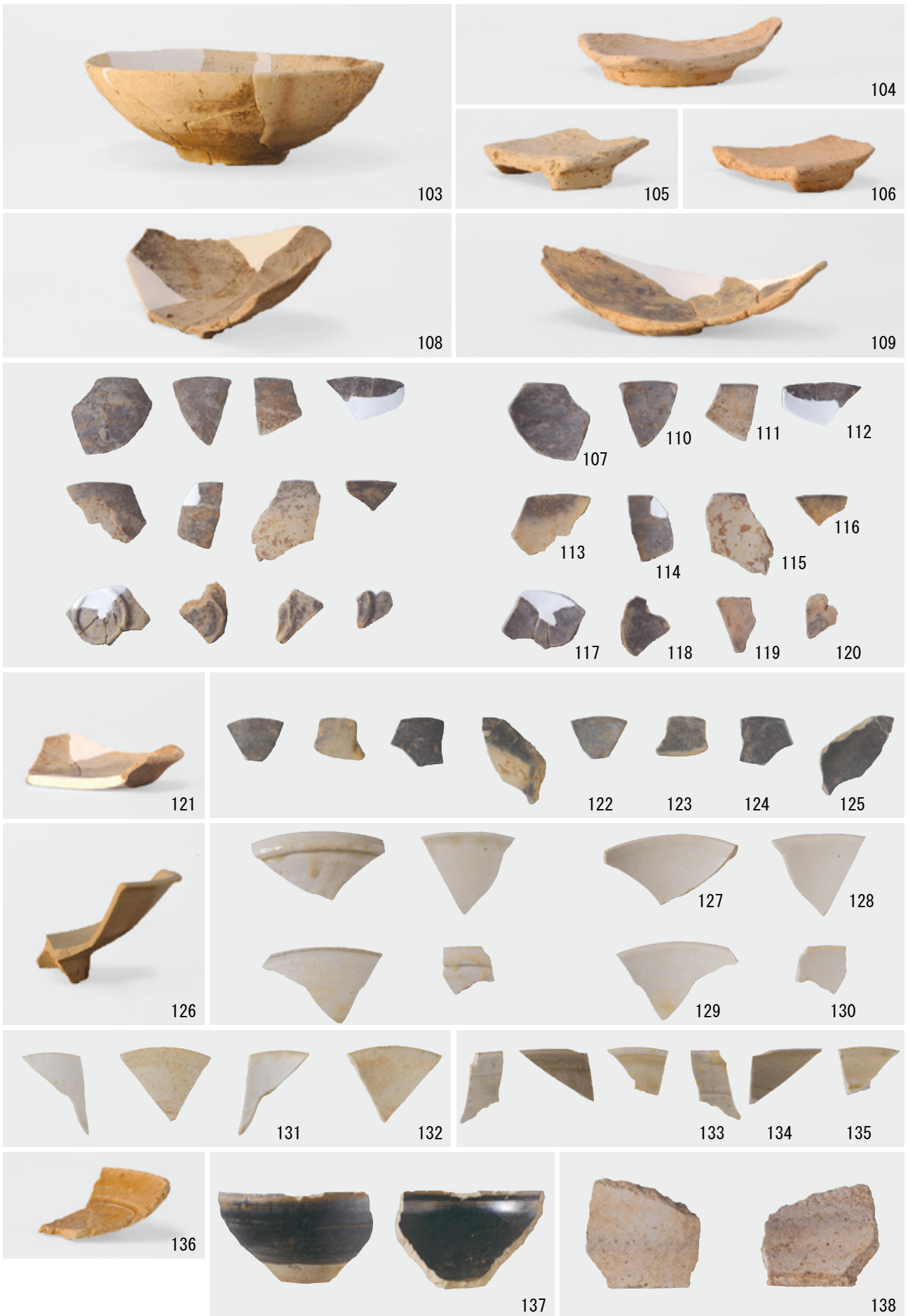




出土遺物 (3)









出土遺物 (7)



報 告 書 抄 録

ふりがな	ほりのうちいせき2
書名	堀の内遺跡2
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第108集
編集著者名	井上広之 磯村義信
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2021年3月18日（令和3年3月18日）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほりのうちいせき 堀の内遺跡	やまぐちけん 山口県 みねねし 美祢市 いわなが 岩永 ほんごう 本郷	35213		34° 19' 48"	131° 27' 91"	20200518) 20200911	820	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀の内遺跡	集落	弥生時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴建物 1棟 掘立柱建物 1棟 柱穴列 1列 土坑 15基 溝 6条 柱穴 約350個 性格不明遺構 2基	弥生土器 土師器 瓦器 瓦質土器 輸入陶磁器 国産陶磁器 鉄鏃 等	弥生時代の円形竪穴建物を 検出 中世の土師器・瓦器・輸入 磁器の一括廃棄土坑を検出

要約	<p>弥生時代後期および中・近世の集落遺跡である。</p> <p>弥生時代の竪穴建物を検出し、弥生土器や炭化材が出土した。焼失家屋と考えられる。</p> <p>中世においては平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物1棟を復元したほか、柱穴列、土坑等を検出した。廃棄土坑からは多量の土師器皿・杯・椀と共に瓦器や中国陶磁器が出土しており、文献史料に関連する良好な一括資料を得た。</p> <p>近世では、竪穴状の遺構や水溜と考えられる円筒形土坑から、近世陶磁器や瓦等が出土した。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第108集

堀の内遺跡 2

2021年3月18日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 児玉印刷株式会社
〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号